

飯田市南信濃の小字の由来・解釈

1. 「小字表」と「小字図」の双方に記載のある小字のみ

2. 参考資料は次の通り

- ①『日本国語大辞典』縮刷版（小学館）昭和 56 年
- ②新村出編『広辞苑』第 4 版（岩波書店）1993 年
- ③『日本方言大辞典』（小学館）2005 年
- ④福田アジオ他『日本民俗大辞典』（吉川弘文館）2000 年
- ⑤馬瀬良雄代表『長野県方言辞典』（信濃毎日新聞社）2010 年
- ⑥柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』（平凡社）1985 年
- ⑦編纂委員会『南信濃史 遠山』（南信濃村）昭和 51 年
- ⑧楠原佑介ほか『地名用語語源辞典』（東京堂出版）昭和 58 年
- ⑨国語学会編『国語学大辞典』（東京堂出版）昭和 55 年
- ⑩柳田國男・倉田一郎『分類山村語彙』（国書刊行会）昭和 62 年
- ⑪谷川健一編『民俗地名語彙事典』（三一書房）1994 年
- ⑫上村民俗誌刊行会『南信州・上村 遠山谷の民俗』（刊行会）昭和 52 年
- ⑬『遠山谷中部の民俗』（飯田市美術博物館・柳田國男記念民俗学研究所）
2010 年
- ⑭『遠山谷南部の民俗』（飯田市美術博物館・柳田國男記念民俗学研究所）
2010 年
- ⑮『遠山霜月祭 南信濃①』（飯田市美術博物館・遠山常民大学）平成 22 年
- ⑯『遠山霜月祭 南信濃②』（飯田市美術博物館・遠山常民大学）平成 23 年
- ⑰『遠山霜月祭<上村>』（上村遠山霜月祭保存会）平成 20 年
- ⑱宮家準編『修験道辞典』（東京堂出版）平成 18 年
- ⑲室町時代語辞典編修委員会『時代別国語大辞典 室町時代編』（三省堂）1985 年
- ⑳森田武編『邦訳 日葡辞書』（岩波書店）1989 年 ほか

【間戸・間渡・間戸久保】

アイト・アイト・アイトクボ。

遠山川右岸のサワカラ沢と押出沢の間の山地に数カ所ある。小字内には合戸峠がある。

アイトもアイトも同じであるが、ドはト→ドとトが濁音化したものか。トはト（処）で、場所を示す接尾語。

アイト（ド）は何を意味しているのか。地名用語語源辞典（以下、語源辞典という）によって二説を挙げておきたい。

①アイはアヒ（間）で「(何かと何かの) 間」の意。ここでは旧木沢村と旧和田村の間を意味していることが考えられる。この小字が生まれた時に、木沢村と和田村があったのかどうかは分からないので、集落と集落の間とした方が正しいかもしれない。すなわち、アイト（ド）とは「村境になっているところ」をいうか。

②アイはアヒ（合）で「(二つ以上のものが) 合う所」の意もある。ここでは小嵐神社のある北西方向から下ってくる山道と小道木から登ってくる道、それに押出に通じる道の三本の道路がつながっている。従って、アイト（ド）とは「山道が合流しているところ」をいうのかもしれない。

他にも語源辞典にあるように、アイはアエ（零）から「崩崖」のこととする解釈に惹かれるが、無理があるので採りあげないことにする。

なお、アイトクボとは「アイトの近くにある谷」であろう。

また、2.5 万分の 1 全国地図に大・中字として挙げられているアイト地名は無いが、アイト地名は 4ヶ所にあり、うち 3ヶ所には「相戸」となっている。

【青ナギ下】

アオナギシタ。

遠山川左岸の池口川と梶谷川の間の山地にある。

アオナギとは何か。二説を挙げる。

①アオはアヲ（青）で色を表す。アヲ（青）は「本来は黒から白までの広い範囲の色彩を示し、主として、青、緑、藍色を指す」（時代別国語大辞典室町時代編。以下室町編という）らしい。従って、アヲは緑～青色までを意味していたと思われる。今でも交通信号をアオといたりミドリだといったりする。ナギ（薙）は「崩崖」のこと。

以上から、アオナギシタとは「青緑色の地肌の崩壊地の下方にある土地」をいうか。外帯にある緑色岩類の崩れ地であろうか。

②オホ（大）→アヲ（青）の転訛はよく見られる（語源辞典）。従って、アオナギシタはオオナギシタ（大ナギ下）だったかもしれない。であれば、アオナギシタとは「大きな崩壊地の下の方にある土地」をいうことになる。

なお、全国地図にはアオナギ地名は載っていない。

【赤澤】

アカザワ。

上村境の上村川左岸氾濫原とその奥の山地に広がる小字で北端を赤沢川が流れている。

アカザワとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①アカはアカ（閼伽）で、水のことをいう。神仏習合の修験道の神事でも、閼伽水を清浄な水として神仏に供えたり、先達と新客との間でやりとりされるといふ。以上から、アカザワとは「清浄な水が湧き出て流れている場所」をいうのであろうか。

②アカはアカ（赤）で、「赤い土」をいうのかもしれない。すなわち、アカザワとは単に「赤土の岸を流れている流水のあるところ」を意味することも考えられる。

なお、全国地図にはアカザワ地名は25ヶ所に大・中字として挙げられている。

【アカハネ、赤羽根

アカハネ、アカバネ。

二ヶ所にある。一つは木澤の上島の上村川左岸の氾濫原にあり神乃郷木沢橋が懸かっているところにある比較的小さな小字で、もう一つは南和田の名田熊沢の中流域の山地に広がる広大な小字である。

アカバネはアカハニ（赤埴）が転じた語というが（国語大辞典）、アカハネも同様にアカハニの転訛したものであろう。つまりアカバネもアカハネも「赤土のある土地」を意味しているものと思われる。

長野県方言辞典には、アカハネは「山などの赤くはげた場所」で、アカバネは「赤土のやせ地」とあり、東北信の方言としているが、伊那谷でもこれらの小字が発生した当時は同じ意味で使われていたのであろう。繰り返しになるが、アカハネ＝アカバネであろう。地名でも、清音⇔濁音の交換は一般的である。

全国地図にもアカハネは6ヶ所、アカバネは29ヶ所に中・大字として記載があり、うち22ヶ所で「赤羽根」の字が宛てられている。

【赤谷】

アカヤ。

和田の遠山川右岸の押出の氾濫原とそれに接する傾斜地に三ヶ所ほどある。かつては一つながりの大きな小字だったと思われる。一つにまとめてみると、殆どが遠山川の氾濫原になる。

ヤは語源辞典にあるように、ヤツ（菴）の略で「湿地」のこと。従来、ヤツは東日本系の語とされていたが、西日本でも山陰、南四国、九州には多いという。

従って、アカヤとは、「赤土が見えている湿地」をいうのであろうか。

しかし、アカをアカ（閼伽）とする解釈も否定しきれない。アカヤを「閼伽水を採った湿地」であったこともなかったとは言い切れない。

全国地図には、アカヤ地名は16ヶ所が中・大字として挙げられており、うち12ヶ所が「赤谷」となっている。

【朝日山】

アサヒヤマ。

遠山川左岸の南和田大町にある。大町配水池の遠山川支流の東向き斜面にある。

アサヒヤマとは何か。語源辞典に依りながら仮説を二つ。

①アサヒ（朝日）は文字通りで「朝日の当たる所」をいう。すなわち、アサヒヤマとは「朝日の当たる山地」を意味する。東向きの斜面にある小字であり、矛盾はない。

②アサはアス、アズ（埴）の転じた語で「崩崖」のこと、ヒはヒ（樋）で「川」をいう。以上から、アサヒヤマとは「崩崖のあり、谷川が流れている山地」をいう解釈も捨てきれない。

アサヒヤマ地名は全国地図には

30ヶ所も中・大字として記載があり、その半数が「朝日山」となっている。

【アジマ、阿島】

アジマ。

木沢の上村川右岸の山地の緩傾斜地に4ヶ所ある。

シマ（島）といえば、水に囲まれるか、傍らを川が流れている場所を思うが、これらの小字があるのは上村川とは離れた山地にある。急傾斜地の間にある緩傾斜地になっている。

アジマとは何を意味するのであろうか。主に語源辞典に依りながら二説を挙げてみたい。

①アジマはアシマが濁音化したもので、アはアクタ（芥）の略で「湿地」をいい、シマは「ある一区画をなした土地」（国語大辞典）のこと。従って、アジマとは「自然湧水のある一区画の土地」を意味するか。急傾斜地の麓に湧水がある場所と思われる。

②アはアグ（上）、アフグ（仰）、アニ（上）などの語幹で、「上」の意。従って、アジマとは「高い所にあつて、島のように一区画となっている土地」をいうのかもしれない。

全国地図には中・大字として、3ヶ所が挙げられているにすぎない。

【アトマ】

木澤の須澤にある。

須澤の集会所と宇佐八幡宮の間の道路沿いにある。

アトマとは何か。難解地名であるが、二説を挙げておきたい。

①アトマ←アドマ←アヅマと転じたか。ヅ→ドの転訛はウ段→オ段の母韻交替で、各時代にわたり極めて例が多いという（国語学大辞典）。ド→トは清音化で、意味の上での変化はない。

アヅは「二つの物の間の区切目のことか。または崖の崩れた所をいう」（室町編）とある。小字発生期と考えられる室町時代には使われていた語である。マはマ（間）で、「空間、場所」を示し、接尾語的に使われる（語源辞典）という。以

上から、アトマとは「崩崖のある所」をいうのであろうか。

②あるいは、アトマ←アトバと転じたか。バ行→マ行の子音交替はきわめて多い（国語学大辞典）という。アはアジマのところで出てきたように、「湿地」をいう。トバは動詞トバス（飛）の語幹で「急傾斜地」を意味する（語源辞典）。従って、アトマとは「泉の湧き出る急傾斜地」を意味するのかもしれない。

さすがにアトマ地名は全国地図には記載されていない。

【アバラクド、安バラクド】

アバラクド。

二つの小字は繋がっており、和田押出の遠山川右岸にあって、川端から北側の山地に延びている。

アバラクドとは何を意味するのか。これも難解地名である。

アバラは「建造物などが朽ちて荒れはてたさま」で「家や壁がこわれて崩れ落ちた」状態をいい、形容動詞として使われたという（室町編）。ここでは、傾斜地が崩れ落ちていることを指すのであろう。クドはく（潰）・ド（処）だという（語源辞典）。

以上から、アバラクドとは「崩れ落ちた崖が何か所もある所」をいうのであろう。

アバラクド地名も、全国地図には載っていない。

【飯島、飯嶋、飯鳶】

イイジマ。

遠山川右岸の南和田の飯島地籍にかたまっている。飯島沢と南沢が遠山川に流れ込む氾濫原と低地であり、中部電力の飯島発電所がある。

イイジマとは何か。二説を挙げる。

①イイジマ←イヒジマと転じた語で、イヒ（槓）で「池や用水から水を引くために、堤などの地中に埋めた箱形の樋」（室町編）をいうか。池か支流の飯島沢や南沢から水を引いていたイヒが何か所かあったことも考えられる。シマは「水流に臨んでいる周囲を水で囲まれた陸地のようなところ」（国語大辞典）であろう。以上から、イイジマとは「樋が埋められている土手がいくつかある水流に臨んだ土地」をいうのかもしれない。

②イイはキ（井）の長音化したもので、「川」をいう（語源辞典）。従って、イイジマとは「川に面した低地」を意味するか。

やや脱線するが、イイにはイイ（逶迤）かもしれない、という思いもあった。「うねうねと曲がっているさま」（国語大辞典）の意である。飯田高松高の校歌では、これをイダと歌った。これによれば、イイジマは「うねうねと曲がった川に接する島」を意味することになる。しかし、「逶迤」は漢詩に使われることが多く、地名とはなりにくいと判断して、採りあげないことにした。

なお、全国地図には中・大字として24ヶ所にも記載があり、うち22ヶ所が「飯島」の字を宛てている。このイイジマも伊那和田の地図に中字として載っている。

【家ノ上】

イエノウエ。

南和田の大町と万古、和田の漆平島の三ヶ所にあるが、地図上で確認できたのは漆平島のイエノウエだけである。

漆平島のイエノウエは池口川が遠山川に合流する左岸の台地にある。

イエノウエは「家の上の方の土地」をいうのであろうが、イエには二通りの解釈がある。すなわち、①「有力者の家」と②「集落」（語源辞典）である。ここでは、漆平島の集落から仰ぐ傾斜地になっているので、②とすることもできるが、①の解釈も十分にありうる。

全国地図で中・大字として採用されているイエノウエ地名は4ヶ所と意外に少ない。

【家ノ浦】

イエノウラ。

和田の尾乃島と新町にあるが、尾乃島のイエノウラは地図上では確認できていない。

新町のイエノウラ小字は遠山川氾濫原の山側の麓にある。

イエノウラも「家の裏手の土地」を意味すると思われるが、イエノウエ小字と同じように二説が考えられる。

①イエを「有力者の家」とすれば、イエノウラは「有力者の家の裏手の土地」となり、②イエを語源辞典に「集落」とすれば、イエノウラとは「(新町の) 集落裏手の土地」となる。

全国地図ではイエノウラ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【家軒・家ノ軒】

イエノキ・イエノノキ。

木澤の川合、和田の押出と山原、南和田の飯島などに5ヶ所ほどあるが、山原は未確認。

ノキ（軒）は長野県伊那郡と静岡県水窪の方言で「家の裏手の土地」をいう（国語大辞典）。従って、イエノキやイエノノキはイエノウラと同義と考えてよさそうだ。

当然のことながら、全国地図には、イエノキ地名もイエノノキ地名も載っていない。

【家ノ下】

イエノシタ。

南和田の飯島にある大きな小字で名田熊沢の谷になっている。

面積も広いので、この場合のイエは語源辞典にある「集落」であろうか。

従って、イエノシタとは「(名田熊の) 集落の下流側にある土地」をいうのであろう。

イエノシタ地名は、全国地図の中・大字に4ヶ所が挙げられている。

【池口】

イケグチ。

和田の大島、池口、漆平島にあるが、大島と漆平島のイケグチは地図上では確認できていない。

池口集落のイケグチ小字は10ヶ所ほどに散在している。これらの小字が「池口」中字になっている。散在する小字は、小字発生時には一つに繋がっていたものと思われる。

イケ（池）は「規模の小なるもの、人工のものに限らず、湖沼を示す地名に使われている」（語源辞典）という。イケグチ小字がばらばらに散在していることから、この小字発生時期は古く、この池は享保三年(1718)の「遠山大地震」ではなく、和銅七年(714)の「古代遠山地震」によって現れた沼を指しているものと思われる。

それではイケグチとは何をいうのであろうか。語源辞典により、二説を挙げる。

①クチ（口）は「出入口」で、水が川となって流れ出る場所をいうのであろうか。つまり、イケグチとは「池から水が流れ出ている土地」を意味するか。

②クチは「フチ（縁）に通じ、“端、へり”の意」もあるという。従って、イケグチとは、「池端となっている土地」をいうのかもしれない。

全国地図にはイケグチ地名は4ヶ所で中・大字となっており、その全てが「池口」となっている。

【池口上ノ島】

イケグチカミノシマ。

和田の池口に3ヶ所ある。

イケグチカミノシマとは、字面の通りで「池口の上流側にある、水に囲まれた島」をいうのであろう。

【池口宮ノ上】

イケグチミヤノウエ。

池口川の上流部にある。

イケグチミヤノウエとは「池口にあるお宮の上の方にある土地」を意味するものと思われるが、そのお宮が見当たらない。この小字発生時には、近くにお宮があったのであろうか。はっきりしない。

【池田】

イケノダ。

和田の漆平沢にあり、小池沢の左右兩岸に並んでいる。小池沢は大昔、池口川の流路であった川。

イケノダとは何か。考えられる仮説は次の二つ。

①イケノダとは、字面の通りで、「近くに池のある田んぼ」をいうか。現在でも水田はあり、その上流には池もある。

②ダはタ（処）と同じで「場所」を表す接尾語（語源辞典）。従って、イケノダとは「池のあるところ」をいうのかもしれない。

全国地図には、イケダ地名は96ヶ所も中・大字として挙げられているのに、イケノダ地名は全く記載がない。

【池原】

イケバラ。

和田の池口に、イケグチ小字の間にある。

イケハラという語は一般の辞書にはない。おそらくは、「池だったところに出てきた陸地」をいうのであろう。まだ耕作の手が入らない未墾地か、あるいは開墾したばかりの土地ではなかったか。

全国地図には、イケバラ地名は、2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【石ノトウ】

イシノトウウか、あるいはイシノトウか。明治初期長野縣町村字地名大鑑はイシノトウミとしている。

南和田の名古山にある。

よくわからない小字。わからないながらも、イシノトウとして二説を挙げたい。

①イシノトウはイシ（石）ノ（助詞）トウ（塔）で、「石造の塔のあるところ」かもしれない。

②トウは動詞タフス（倒）の語幹タフの転で「傾斜地」の意もあるという（語源辞典）。従って、イシノトウとは「石の多い傾斜地」をいうとも考えられる。あるいは崩崖があったのかもしれない。

イシノトウ地名は、全国地図に中・大字として、3ヶ所に記載がある。

【石佛】

イシボトケ。

木澤の木沢、南和田の名古山、和田の山原の三ヶ所にある。

イシボトケとは何を意味するのか。敢えて二説を挙げる。

①イシボトケといえば、文字通りで「石を刻んで造った仏」（国語大辞典）であろう。日葡辞書にもイシボトケはあるので、中世末にもあった語である。従って、イシボトケ小字は「石を刻んで造った石仏のあるところ」となる。しかし、まだいずれのイシボトケ小字も未調査で、そこに石仏を祀っているのかどうかも確認していない。それに、広大なイシボトケ小字もあり、これがはたして石仏に関わっているのかどうか不安もある。

②ボトケには、動詞ホドク（解）の連用形が名詞化した語で「とけ離れる」意から「崩壊地形」を示すこともあるという（語源辞典）。すなわち、イシボトケとは「石の多い崩壊地のある土地」かもしれない。

イシボトケ地名は、全国地図に19ヶ所が中・大字として記載されている。

【一ノセ・ニノセ】

イチノセ・ニノセ。

木澤の中根、遠山川左岸にある。このイチノセ小字のすぐ上流側にはニノセ小字がある。

セ（瀬）は「歩いて渡れる浅い流れ」（国語大辞典）をいう。従って、イチノセは木澤の中心部からみて「最初の歩いて渡れるところ」であり、その上流に、「二番目に歩いて渡れるところ」であったと思われる。

全国地図には、イチノセ地名は91ヶ所、ニノセ地名は9ヶ所がそれぞれ中・大字として記載されている。

【市ノ瀬】

イチノセ。

八重河内の梶谷川左岸にある。須沢という支流の左岸でもある。

先のイチノセ（一ノセ）とは異なっているように思えるので、別項とした。

この小字のすぐ下流側にはセノコシ小字が接している。

イチノセとは何か。語源辞典によりながら三説を挙げたい。

- ①イチは「単なる美称」かもしれない。すなわち、イチノセとは「歩いて渡れる浅い流れになっているところ」をいうか。
- ②イチは「市場」を指すか。上流には梶谷の集落もある。イチノセとは「市場が開かれる徒渉地点のあるところ」となる。
- ③イチーイツ（巖）と転じた語。ウ段→イ段の母韻交替は「かなり見られる」（国語大辞典）という。イチノセとは「峻しい地形にある徒渉点所在地」ということかもしれない。この小字は急傾斜地になっている。

【五石】

イツツイシ。

和田の大島で池口川の中流部右岸の南向き傾斜地にある。

イツツイシとは何か。二説を挙げる。

- ①イツツイシとは、単純に字面の通りで「5個ほどの石の集まったところ」をいうのであろうか。それは山の神が依りつく依代であったと考えることもできそうだ。伊那谷南部ではまだ見ていないので気になるが、いわゆる磐座である。巨石だけでなく、石の集合体が磐座になることもあるという（山岳宗教と民間宗教の研究）。
- ②イツツイシとはイツ（巖） ツ（助詞） イシ（石）で「神聖な力のある石」をいうのかもしれない。意味は①と同じで、磐座をいう。大きな石があったのかもしれない。

全国地図には、イツツイシ地名は載っていない。

【一盃水】

イッパイミズ。

和田の漆平島の小池沢最上流部にある。他にもイッパイミズ（一杯水）小字が南和田十原にあるが、地図上で確認できていない。

遠山奇談にも「一盃水」があるが、秋葉山奥の院の近くというから、和田のイッパイミズのことではない。秋葉山の一盃水は「手にむすびてのみほすに、暫して、又もとのごとく一盃にたゞへ湧といえども少しもあふるることなし。此のゆへに此名あり。奇なることを感ぜぬはなし、」（南信濃村史遠山）とある。

人々の渴きを癒やすに十分な清水が湧き出ていたのであろう。

イッパイミズとは「旅人、修行者や山人たちにきれいな清水をもたらしたところ」を意味するか。

イッパイシミズやイパイミズ小字は、ここ伊那谷南部には多い。全国地図には、イッパイミズ地名が1ヶ所だけだが、中・大字として採られている。

【一本杉】

イッポンスギ。

和田漆平島の小池沢上流の池口川に近いところにある。

イッポンスギとは字面の通りで「ただ一本だけ生えている、目じるしになるような杉」（国語大辞典）のある土地を意味するのであろう。地名発生時には、目立つ存在だったと思われる。

全国地図にはイッポンスギ地名が22ヶ所に中・大字として記載されており、うち21ヶ所が「一本杉」となっている。

【井戸久保】

イドクボ。

木澤の川合の上村川左岸の山地で西向きの傾斜地にある。

イドクボは井（井）ド（処）クボ（凹）で、「自然湧水のある谷」をいうのであろう。上村川支流の谷に湧き出ている清水があったと思われる。

全国地図にあるイドクボ地名は一ヶ所だけ。

【井戸下】

イドシタ。

和田山原の遠山川右岸の氾濫原とその上の段丘の斜面にある。

イドシタも井（井）ド（処）シタ（下）で、「湧水地の下側の土地」をいうか。

全国地図にはイドシタ地名は載っていない。

【井戸道】

イドミチ。

南和田十原の集落がある台地から見上げる傾斜地にある。

イドミチとは「清水に通じる道のあるところ」か。十原ではこの湧水を生活用水にしていたのか、道になるほど近くの家々で利用してきたのであろうか。

イドミチ地名も全国地図には無い。

【犬塚】

イヌヅカ。

和田の須澤で遠山川右岸の傾斜地にあり、林道赤石線が通っている。

イヌヅカとは、「何かいわれのある犬を葬った塚のあるところ」を意味していると思われる。

イヌヅカといえば、里人である娘を助けるために妖怪と戦って死んだ犬を祀った塚だと伝えられている場合が多いのであるが、ここには、そうした言い伝えはなかったのであろうか。

全国地図には、イヌヅカ地名が9ヶ所の中・大字として挙げられており、うち8ヶ所は「犬塚」となっている。

【伊ノ木沢・井ノ木沢】

イノキサワ・イノキザワ。

これらの小字は、和田の押出の遠山川右岸で、支流である伊ノ木沢周辺にある。

イノキサワ＝イノキザワである。

イノキサワとは何を意味するのか。三説を挙げたい。

- ①イノキサワはキ（井）ノ（助詞）サワ（沢）で、「川の傍の土地」をいうか。キ（川）とサワ（沢）が重複しているのが気になるがあり得ないことではない。
- ②イノ←イナ（砂地）の転か、「砂」の古語ヨナから転じたか、それともスナ→ウナ→イナと転訛した語ではないかという（語源辞典）。ア段→オ段の母韻交替は稀だということから、直接に転じたとするのは難しいからであろうか。イノが「砂地」をいうのであれば、キは「場所」を示す接尾語で、イノキとは「砂地の土地」をいうことになる。この場合は、イノキサワとは「砂地を流れる谷川のあるところ」となる。
- ③イノキは動詞イノク（動）の連用形が名詞化した語であろう。イノクは長野県の方言で遠山でも使われていた（長野県方言辞典）。すなわち、イノキサワとは「動いた谷川があるところ」となる。「川が動く」とは川筋がずれることをいう。少しずつ、ずれるのであれば、地名にはならないと思われるので、地震で動いたと思われるがどうであろうか。少し怪しげで付会っばいか。

全国地図にはイノキサワ地名もイノキザワ地名も無いが、イノキ地名は5ヶ所の中・大字として挙げられている。

【井水山尻】

イノミズヤマジリ。

和田の押出にあり、遠山川右岸で、支流の金七沢との合流点にもなっている。

イノミズヤマジリとは、「川が流れている尾根筋の末端部」をいうのであろう。

これだけ長いから、むろん全国地図には載っていない。

【大白・入大白】

オオジロ・イリオオジロ。

いずれも南和田の名古山にあって、隣り合っており、遠山川の西方の山地になっている。

イリオオジロとは「オオジロの奥にある土地」を意味するが、オオジロとは何か。二説を挙げる。

- ①オオジロは字面の通りで「大きな白っぽい土地」をいうのであろうか。ここは内帯で岩石は古い花崗岩類だということなので、崩崖は白く見えていたのであろう。
- ②オオジはオンジ（隠地）の転で「日当たりの悪い土地」（語源辞典）をいうか。ロはラと同じで「漠然とした場所」を表すという。すなわち、オオジロとは「日当たりの悪い土地」をいうのであろうか。ただ、オンジ→オオジの転訛にはや

や疑念がある。

国土地理院の全国地図には、イリオオジロ地名はないが、オオジロ地名は13ヶ所に中・大字として記載があるが、宛てられている字は「大城」と「大代」のみ。

【入久保】

イリクボ。

南和田名古山の遠山川の西方山地にある。

イリクボとは「奥地にある窪地」であろうか。遠山川の近くにはクルミクボ（胡桃久保）小字がある。

全国地図には1ヶ所にだけ、イリクボ地名があり、「入久保」となっている。

【松島・マツ島・上松島】

マツジマ・マツシマ・イリマツジマ。

木澤の中根にもマツシマ（松島）小字はあるが、ここでは和田山原のマツシマ関連小字について触れる。

これらの小字は遠山川右岸の氾濫原とその上の斜面になっており、イリマツジマはマツジマ小字の上部にある小さな小字でマツジマ小字に囲まれている。

マツシ（ジ）マとは、「川の傍にある松の自生している土地」を意味するのであろう。

イリマツジマとは「マツジマ小字の奥にある土地」をいう。

全国地図にはイリマツジマ地名もイリマツシマ地名もないが、マツシマ地名は85ヶ所、マツジマ地名は9ヶ所にある。

【上ノ平】

ウエノタイラ。

和田新町の遠山川左岸の遠山郷土館のあるところ。

タイラは「山中にある平らな所」をいう方言で、東北各地や吉野、それに静岡県磐田郡でも使われているという（国語大辞典）。

従って、ウエノタイラとは「(新町の) 上にある山中の平らなところ」を意味する。

全国地図にはウエノタイラ地名は12ヶ所に挙げられている。

【上ノ山】

ウエノヤマ。

木澤の小道木に2ヶ所ある。一つは遠山川左岸の氾濫原から山地にかけて、もう一つは上村川左岸の山地にある。

ウエノヤマとは何か。単に「上の方にある山地」では特徴が薄いので地名にはなりにくい。この場合のヤマとは「耕作地」（国語大辞典）をいうのであろう。長野県の東北信、静岡県の方言だという。

従って、ウエノヤマとは「高い所にある焼畑」を意味するものと思われる。

国土地理院の2.5万分の一地図には全国で、39ヶ所に記載されている。

【大栗畑・ウクリ畑】

オオグリバタ・ウクリハタ。

これらの小字は木澤小道木の遠山川右岸の山地にある。オオグリバタには狭いが平地があつて家屋もある。その周りに二ヶ所、小さなウクリハタ小字がある。

ウクリハタのウはヲ（小）が転じた語であろう（語源辞典）。とすれば、ここには「大栗畑」と「小栗畑」が並んでいることになる。それぞれ、「大きな面積のクリハタ」と「小さいクリハタ」を表現しているのであろう。

さてクリハタ（栗畑）とは何か。二説が考えられる。

①クリは「栗が自生していたところ」をいい、ハタは「焼畑」を指す。すなわち、クリハタとは「自生する栗の木があつた焼畑」をいうか。遠山には昭和のはじめ頃までは、天然の栗林が多く、小さいが甘い遠山栗がたくさん拾えたという（遠山谷南部の民俗）。

②クリは動詞クル（削）の連用形が名詞化した語で、「崖」をいうかもしれない（語源辞典）。であれば、クリハタとは「崖のあつた焼畑地」を意味していたかもしれない。

ウクリハタ地名もオオグリバタ地名も、全国地図には記載されていない。

【後山】

ウシロヤマ。

南和田の飯島にあり、遠山川右岸の大きな小字で、中を飯島沢が流れ下っている。

ウシロとは「上の方」や「北側」を指すことが多い（語源辞典）。ここでウシロヤマというのは、文字通り、「（飯島の集落からみて）上の方にある山地」をさしているのだろう。

全国地図にもウシロヤマ地名は多く、57ヶ所に中・大字として記載があり、うち55ヶ所で「後山」の字が宛てられている。

【ウ平・下平】

ウタイラ・シモノタイラ。

これらの小字は、和田の漆平島にあり、シモイタイラは遠山川左岸の氾濫原とそれにつながる傾斜地に広がる大きな面積を有し、ウタイラはそのシモノタイラの上の台地に一角にあつて、シモノタイラに三方を囲まれた小さな小字である。

ウタイラのウはウへ（上）が転訛した略語で「上の方」をいう。すなわち、ウタイラとは「上の方にある山中の平らなところ」をいい、シモイタイラとは「下の方にある山中の平らなところ」を意味するのであろう。

なお、ウタイラ地名は全国地図にはないが、シモノタイラ地名は3ヶ所に挙げられている。

【馬ノ瀬】

ウマノセ。

木澤の中根にあり、遠山川左岸で広い面積を占めた山地になっている。

ウマノセとは「低い山の一部がまるで”馬の背”のようになっているのをいう。思うに二つの峯を結ぶ線の低くなった所で、鞍部の稜線に当たる部分であろう」（民俗地名語彙事典）というが、それらしいところは見あたらない。

したがって、ウマノセとは「馬の背のようになっている尾根筋のある土地」としておきたい。尾根筋の傾斜の緩い部分を指しているのかもしれない。

全国地図には、11ヶ所にウマノセ地名が中・大字として記載がある。

【梅平】

ウメタイラ・ウメダイラ。

八重河内に二ヶ所、八重河内（中字）と梅平（中字）にあり、広大な面積を有している。

ウメタイラもウメダイラも意味に違いはない。

ウメは動詞ウム（埋）の連用形が名詞化したもので、「崩壊地」を意味する。

ウメタイラ、あるいはウメダイラとは「崩落や土石流で埋まり、緩傾斜地になったところ」を意味する。これらの小字の中にはそうした埋もれ地がどこかにあることになる。

国土地理院の全国地図には、ウメタイラ地名はないが、ウメダイラ地名は8ヶ所が中・大字として載っている。

【梅の久保】

ウメノクボ。

木澤の小道木に、二ヶ所ある。

ウメノクボとは、ウメノタイラと同様で、「崩落や土石流で埋まっている窪地のあるところ」を意味すると思われる。

【梅ノ越】

ウメノコシ。

南和田の遠山川右岸の側稜にある。

ウメノコシとは「崩落による埋もれ地もある側稜の中程の山地」をうか。

全国地図には、ウメノコシ地名は載っていない。

【梅ノ田】

ウメノタ。

木澤の中根、遠山川が上村川と合流する地点のすぐ上流側の右岸にある広い小字である。

遠山川に接しているが、田んぼは見えない。

タはタ（処）で「場所」を示す接尾語（語源辞典）。

ウメノタとは「崩落して埋まったところがある土地」をいうのであろう。

ウメノタ地名も、国土地理院の2.5万分の一地図には載っていない。

【浦山】

ウラヤマ。

南和田大町集落の南側山地にある。かなりの傾斜地になっている。

ウラヤマとはウラヤマ（裏山）で、国語大辞典にあるように、「集落の後ろの

方にある傾斜地で、日当たりが悪いところ」をいうのであろうか。

全国地図には21ヶ所にウラヤマ地名が、中・大字として挙げられている。

【扇平】

オウギダイラ。

木澤の川合と南和田の名古山にあり、いずれもかなりの傾斜地になっている。

オウギダイラとは何を意味するのか。二説を挙げておきたい。しかし、これはオウギダイラではなくて、オウギヒラではなかったか、という思いを捨てきれないでいる。

①オウギは「扇形の地形」をいう（語源事典）。扇形といっても、それは上空から見た地形ではなく、「両支脈の下端相逼って、その中間の形、扇の如く溪流、その中より流れ出る所」（民俗地名語彙事典）の形をいうのである。谷川の下流側からみた地形であろう。ダイラは「山の中腹から麓のあたり」（語源辞典）か。以上から、オウギダイラとは、「二本の側稜の中腹から下の付近で、下流から見て扇形になっているところ」となる。しかし、これでは谷であればどこにでもある図で、地名となりうるのかどうか、という疑問は残る。

②オウギはアブ（崩壊地形）・キ（「場所」接尾語）から転じた語で「崖崩れ地」をいうか（語源辞典）。すなわち、オウギダイラとは「山の中腹部から麓の付近で崩崖のあるところ」をいうことになる。

全国地図には、オウギダイラ地名は2ヶ所で中・大字となっており、いずれも「扇平」となっている。

【柄沢・カラ沢・カラ澤・大カラ沢】

カラサワ・オオカラサワ。

カラサワ小字は和田の新町、木澤の八日市場、南和田の名古山にあり、オオカラサワは和田の漆平島地籍から新町地籍に広がる小字。小池沢左岸にあり支流の大柄沢が流れている。

カラサワとは何を意味するのか。主に民俗地名語彙事典に依りながら二説を挙げる。

①カラ←カレ（涸）と転じたもので、「水の乏しい谷川筋のあるところ」か。和田のオオカラサワとカラサワは小池沢に接しており、地震で池口川の流路が変わってから名づけられた可能性がある。

②カレには「山の崩れた所。崖」の意がある。そうならば、カラサワとは「崩崖のある谷川のあるところ」となるが、これで、他の土地と区別できる地名となりうるのかどうか。

ただ、①も②も、このア段⇄エ段の母韻交替は「あまり多くない」（国語学大辞典）というのが気になる。

なお、オオカラサワは「広大なカラサワ」をいうのであろう。

全国地図には、オオカラサワ地名は1ヶ所にしかないが、カラサワ地名は56ヶ所にも中・大字として記載されている。

【大久保】

オオクボ。

木澤の川合、南和田の飯島それに和田の大島にもある。

いずれも大きな小字になっているが、木澤のオオクボについては、その大きさがはっきりしていない。

オオクボも文字通り、「大きな窪地」を意味するのであろう。

国土地理院の全国地図には、337ヶ所にオオクボ地名が中・大字として記載があり、うち295ヶ所に「大久保」の字を宛てており、残りの42ヶ所は「大窪」となっている。

【ヲヲクラ】

オオクラ。

木澤の上島にあり広大な面積になっている。上村川左岸の氾濫原から山地に及んでおり、さらに上方のナカダチ小字を挟んで尾根付近にまで達している。

オオクラ（大蔵）は上代の三倉の一つであるが、この場所に倉庫があったとは考えにくいので採りあげない。

オオクラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オオ←オホ（大）で「大きい」の意か。クラは動詞クル（割）の連用形クリが転じた語で「山中のきりたった岩盤」を意味するという。従って、オオクラとは「断崖のある広い傾斜地」をいうのであろうか。

②オオ←アハと転じた語で、アハは動詞アハク（褫、暴）の語幹で「崩れ落ちたところ」をいうか。すなわち、オオクラとは「崩落した断崖のある土地」だろうか。

全国地図には、オオクラ地名は68ヶ所にあり、宛てられている漢字は、「大倉」が54ヶ所、「大蔵」が14ヶ所となっている。

【大沢】

オオサワ。

木澤の中字「木沢」にある。上村川右岸にあり、支流の三ツ沢川の右岸になっている。

オオサワとは何か。これも二説を挙げる。

①オオはオホ（大）で、オオサワとは「水量の多い、大きな谷川が流れているところ」をいうのであろうか。

②あるいは、オオはアハの転訛した語で、アハは動詞アハク（褫）の語幹で「崩壊したところ」を指すか。とすれば、オオサワとは「崩崖のある谷川が流れている土地」となる。

2. 5万部の一の全国地図には、オオサワ地名は244ヶ所に中・大字として挙げられており、うち242ヶ所が「大沢」となっている。

【大しま・大シマ・大嶋】

オオシマ。

いずれも、和田の大島に三ヶ所ある。その一つは遠山川左岸の高台にあって、そこは大島の集落になっており、残りの二つは遠山川の左右兩岸にあり、右岸

のオオシマは小さな高台の平地で、左岸は氾濫原にある。

宛字がいくつもあるのは、かつては大きな小字であったが、ある時、オオシマ小字を分配することになって、同じオオシマの呼名で帳面の字を一部変えたのであろうか。

オオシマとは何か。三種類のオオシマを挙げておく。

①オオは美称の接頭語で、シマは「水流に臨む陸地」か。オオシマとは「川の傍の土地」をいう。遠山川左岸の氾濫原にあるオオシマはこれか。

②シマは「ある一区画をなした土地」（国語大辞典）で、オオはオホ（大）のこと。以上から、オオシマとは「台地の平坦地にある、広い土地」をいう。大島の集落のあるオオシマはこれであろう。

③オオ←アハと転じたもので、アハは動詞アハク（褫）の語幹で「崩壊した所」をいうか（語源辞典）。すなわち、オオシマとは「崩れ地のある台地」を意味する。遠山川右岸の急傾斜地に挟まれた小さなオオシマはこれであろうか。

オオシマ地名も全国地図には多い。147ヶ所が中・大字として記載があり、うち142ヶ所で「大島」の字を宛てている。

【嶋・し満】

シマ。

これらの小字は和田の押出にある。

シマ（嶋）小字は二ヶ所、いずれも遠山川に注ぐ押出沢川の右岸にある。シマ（し満）は台地上にある小さな小字で二つ並んでいる。

シマ（嶋）は「川端にある土地」を意味し、シマ（し満）は「一区画をなした土地」であろうが、何の区画であるのか、その内容については不明。

全国地図には、シマ地名は93ヶ所に記載されている。

【大嶋西・大しま西】

オオシマニシ。

和田の西島にある。遠山川右岸で大島集落の対岸になっていて西方に当たる。

オオシマニシとは、「オオシマの西方にある土地」をいう。そのオオシマとは集落のオオシマをいうのか、それともオオシマ小字をさすのかは不明。

【大ゼリ】

オオゼリ。

南和田名古屋山の遠山川右岸にあつて、大町の天満大橋が架かっている所。

ゼリは遠山の方言で「小石の多くある場所」（上村の方言、語源辞典や国語大辞典など）であるというが、ここでは当てはまりそうにない。

セリは「天竜川で、巨岩に急流が当たって、渦を巻いている所」（民俗地名語彙事典）とも、静岡県榛原郡の方言で「川が曲流して岩に打ちつける所」（国語大辞典）ともいう。この方が、このオオゼリ小字にはぴったりする。あるいは、セリは動詞セル（迫）の連用形が名詞化した語で「山などが迫った所」（語源辞典）の方が現場には合っている。

以上から判断して、オオゼリとは、オオセリが濁音化したもので、

①「大きな山塊が川に迫っていて、急流が激しく岩を打ちつけている所」か、あるいは

②オオをアハから転じた語とみて、「崩崖が川に迫っていて、そこに激しく急流がぶっつかっている所」としたい。

なお、全国地図にはオオゼリ地名もオオセリ地名も載っていない。伊那谷南部の特徴的な地名であろうか。

【栃山・栲山】

トチャマ。

南和田の名古山にある。ほかにも地図上では確認できていないが、木澤の小道木、南和田の十原、和田の池口や夜川瀬にもある。意外ではあるが、比較的小さな小字になっている。

トチャマとは「栃の実が拾えるトチノキの自生する山」をいう。

トチはトチノキのこと。トチノキ科の落葉高木で日本の特産種。種子は栗に似て光沢のある赤褐色に熟す。栃の実は栃餅にしたり、米・粟・黍に混ぜて栃粥にしたり、ソバ粉や米の粉と混ぜて栃団子にして食べたという。あく抜きした栃の実を粉にして保存食にもした。「栃の木は伐るな」という伝承が遠山には残っているが、天明飢饉の教訓だという。救荒食物でもあったのである。さらに栃の木は沢筋や谷筋に多く、水源保全のはたらきもしていたらしい。(以上は南信濃南部の民俗)

トチャマとは「自生している栃の木を大切にしている山地」をいうのであろう。

全国地図には、トチャマ地名が6ヶ所に中・大字として記載されている。

【大栃山】

オオトチャマ。

南和田の大町や底稲にある。

オオはオホ（大）を表すよりは美称の接頭語とするか、あるいは今までに何回か採りあげているように、アハの転訛した語で「崩壊した所」の意に近いと思えるがどうであろうか。

従って、オオトチャマとは、①「栃の木が自生している場所」か、あるいは、②「崩れ地もある栃の木自生地」を意味するものと思われる。

全国地図には、1ヶ所にだけオオトチャマ地名が採られている。

【水上栃山】

ミザガミトチャマ。

南和田の大町にある、比較的大きな小字で、遠山川左岸にあって遠山川に長く接している。近くには遠山天満宮が祀られている。

ミザガミトチャマとは何か。二説を挙げる。

①ミザガミがはっきりしないが、「水上」であれば、「泉の涌くところ」（語源辞典）の意もある。すなわち、ミザガミトチャマとは「泉が湧いている付近で、栃の木が自生している山地」をいうのであろうか。

②ミザガミはミズカミ（水神）ということかもしれない。「水神が祀られているところ」であろうか。そうであれば、ミザカミトチャマとは、「水神様が祀られている、栃の木の自生している山地」をいうことになる。

【大ナギ】

オオナギ。

和田大島の池口川右岸の崩壊地にある。

ナギは動詞ナグ（薙）の連用形が名詞化した語で「山のくずれてなぎたおしたようになった所」で、長野県下伊那郡、静岡県榛原郡や愛知県北設楽郡などでは方言として使われ、「山などの崩れた所。崖」をいう（以上は国語大辞典）。

以上から、オオナギとは「大きく山崩れした急傾斜地」をいうのであろう。

なお、日葡辞書には、崩崖を意味するナギはないが、ナグはあって「草ヲ薙グ。稲ヲ薙グ」が例示されている。

全国地図には、オオナギ小字は3ヶ所に中・大字として載っている。

【大野・大ノ】

オオノ。

南和田の大町と名古山に3ヶ所ほど、いずれも遠山川左岸の山地にある。上村の下栗にも7ヶ所ほどある。

オオノは、「焼畑にするが、ふだんは人の入らない原野になっている山地」であろうか。

【大ハッケ】

オオハッケ。

和田の大島にある。遠山川左岸の奥地で、尾根の峰になっている。

オオハッケとは何か。二説を挙げる。

①民俗地名語彙事典によれば、ハッケはハケのことだという。そのハケとは「北海道・東北・関東から西の方にかけて、丘陵山地の片岸をいう地名」（国語大辞典）であるという。オオには、何回か繰り返しているように、アハの転じた語で「崩壊地」をいう。以上から、オオハッケとは、「片側が崩壊地になっている丘陵地」をいうのであろうか。現地は尾根から北側は緩い傾斜地になっているが、南側は急峻な斜面で崩壊地も多かったのではないかと思われる。

②民俗地名語彙事典は次のようにもいう。ハッケは「崖」のことで、関東、東北ではバッケとかバンゲ、ガンゲ、ガッケともいい、中国、四国では同じ地形をホキ、ホケ、ハケとっている、と。これに従えば、オオハッケとは「大きな崖のある土地」を意味するのであろう。

全国地図には、オオハッケ地名は記載がない。

【大林】

オオバヤシ。

この小字も和田の大島にあり、遠山川左岸山地にある大きな小字である。

ハヤシには「人工的で継続的な管理、たとえば植林・伐採・落葉掻きが常時行われている樹木の集まり」の意があり（民俗大辞典）、水窪のハヤシという方

言は「植林した所」をいう（国語大辞典）。

以上から、オオバヤシとは「人の手が入っている樹木の繁った、広い山地」をいうのであろう。あるいは入会地だったのかもしれない。

全国地図のオオバヤシ地名は46ヶ所にあり、いずれも「大林」となっている。

【大平】

オオビラ。

南和田名古屋山の大堀沢最上流部にある。

ヒラは「信州では傾斜面のこと。白馬地方ではビラと濁っている」（民俗地名語彙事典）という。ヒラも濁音化したビラも同じ意味で、「傾斜地」を意味していることに、ほぼ間違いはないと思われる。

オオビラとは何か。オオに二通りの解釈があるので、二説を挙げておきたい。

①オオはオホ（大）で、オオビラとは「広い人手の入った林地」をいうか。

②オホ←アハの転で、アハク（禡）の語幹で「崩壊した所」（語源辞典）となり、オオビラとは「崩崖もある傾斜地」を意味するか。

国土地理院の全国地図には、オオビラ地名が21ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「大平」の字が宛てられている。また、オオヒラ地名は136ヶ所にもある。

【大平サハ・平沢】

オオヒラサワ・ヒラサワ。

いずれも和田の大島にあり、池口川中～下流部の右岸にあり、並んでいる。

ヒラサワは「傾斜地で谷川が流れているところ」となるが、遠山谷のどこにもある地形なので、地名になりうるのかどうか、気になるが、全国地図をみると65ヶ所に使われている地名なので、地名として認知されているのであろう。

オオヒラサワは、①「大きな谷川」をうか、あるいは、②「崩崖のある谷川」を意味するか。

【大町】

オオマチ。

南和田の中字にもなっている小字で、遠山川左岸の大町の集落がある台地上に二ヶ所ある。二つのオオマチ小字の間に、現在はワミ（和見）小字が挟まっているが、かつては繋がっていたようにも見える。

オオマチとは何をいうのだろうか。難解地名である。それゆえということもあるが、三説を挙げておきたい。

①マチといえば、一般的には「田」をいう。現在でも水田はあるので、「大きな水田があるところ」をいうのかもしれない。誇らしげな地名か。

②マチ←マツ←マツリと転じた語で「祭り場」のことか（語源辞典）。ウ段からイ段への母韻交替は、かなりみられるという（国語学大辞典）。この場合のオオは美称の接頭語であろう。ここには遠山天満宮がある。

③袴の内股の部分をマチ（襠）という。このことからマチとは「山間のかくれ地」をいう（語源辞典）。確かに、マチ（襠）の語は日葡辞書にもあるが。

全国地図には、オオマチ地名が108ヶ所にも及ぶ。

【道上・道下】

ミチウエ・ミチシタ。

和田の押出にはウエとシタが対になっており、木澤にはミチシタ小字のみが単独で二ヶ所にある。

ミチウエ・ミチシタは字面の通りでそれぞれ、「道路の上側の土地」と「道路の下側の土地」を意味する。

【大道上・大道下】

オオミチウエ・オオミチシタ。

木澤は小道木に、和田は漆平島、押出、新町にある。

この地名にあるオオはオホ（大）から転じたもので、美称の接頭語と思われる。従って、ミチウエ・ミチシタと由来は同じではないだろうか。

全国地図には、オオミチウエ地名が2ヶ所、オオミチシタ地名が3ヶ所にあり、こちらの大道には古代の主要道路がかかわるものもあるのではないだろうか。

【大峰】

オオミネ。

木澤の川合にあり、上村川左岸の山地にある。

オオミネとは何を意味するのか。二説を挙げておく。

①オオミネとは、字面の通りで、「広い尾根になっている山地」をいうか。

②オオミネは「大峰山」の略。修験道の霊山である。オオミネとは「山伏が修行をした山」をいうのかもしれない。吉野の大峰山に見立てたのであろうか。洞や岩窟があれば、その可能性は高い。

全国地図にもオオミネ地名は48ヶ所の中・大字として挙げられ、うち32ヶ所が「大峰」となっている。

【大持平山】

オオモチヒラヤマ。

遠山川左岸の南和田大町にあり、谷川に沿った細長い小字になっている。

オオモチヒラヤマとは何か。難解地名であるが、二説を挙げておく。

①ヒラヤマは「傾斜地である山地」をいうか。山は傾斜地になっているのは当然であるが。オオモチとはオオモチノキ（大欒木）の下略で、トリモチノキすなわちヤマグルマをいうのであろうか。常緑高木で本州では山形以南の山地に自生しているという。樹皮から鳥もちを作る。遠山谷に鳥もちの伝承があるのかどうかは不明であるが、鳥もちで小鳥を捕る猟があったことは十分に考えられる。以上から、オオモチヒラヤマとは「トリモチノキが自生している山地」をいうのであろうか。

②モチは粘り気のある状態から「湿地」を意味することもあるという（語源辞

典)。オオは美称の接頭語。従って、オオモチヒラヤマとは「谷川があり、しけっばい山地」をいうか。

オオモチヒラヤマ地名は、もちろん、全校地図には見当たらない。

【大屋敷】

オオヤシキ。

和田新町集落の裏地となる山地にある。

オオヤシキといえば「豪族の屋敷」がまず浮かぶが、この山地では考えにくい。

では、オオヤシキとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げてみたい。

①オオはオホ（大）で美称の接頭語、ヤはイハ（岩）の約。シキは動詞シク（頻）の連用形で「（何か）重なった所」、すなわち「山丘の重畳とした状態」をいう。以上から、オオヤシキとは「石の多い山丘の重畳たる山地」をいうか。それを好字にしたのかもしれない。

②オオヤは「大きな岩」で、シキはシ（石）・キ（場所接尾語）で、オオヤシキとは「大きな岩のある石の多い土地」となる。大きな石がなければ、成立しない。

全国地図にはオオヤシキ地名は28ヶ所があるが、その多くは「豪族の屋敷」をいうのであろう。

【大柳】

オオヤナギ。

和田の山原にある。遠山川右岸の山地の急傾斜地が迫った川岸にある。

オオヤナギとは何をいうのであろうか。三説を挙げる。

①オオヤナギとは文字通りで、「大きな柳の木があったところ」をいうか。

②オオは美称の接頭語で、ヤナ（梁）・ギ（場所接尾語）。すなわち、オオヤナギとは「梁を仕掛けた所」かもしれない。ヤナは室町編にも載っている。

③オオ（大）は「大きい」の意、ヤはイハ（岩）の約で、ナギ（薙）は「崩壊地」。以上から、オオヤナギは「岩のある大崩れ地」を意味するか。

国土地理院の2.5万分の一地図には、中・大字として、オオヤナギ地名は14ヶ所にあり、すべて「大柳」になっている。

【大ヨケ】

オオヨケ。

木澤の川合の上村川左岸にある。

オオヨケには二説を挙げたい。

①ヨケは動詞ヨク（避）の連用形が名詞化した語で、「崖ぎわの通路」をいう上下伊那郡の方言だという（長野県方言辞典）。「川を避ける」意であろう。

従って、オオヨケとは「川を大きく避ける道路のあるところ」をいうか。

②日葡辞書には「水を避（よ）くる」という例文がある。「水をほかの方へ流す」の意だという。天竜川でもこういう使い方になる。すなわち、オオヨケとは「川の流を大きく変えているところ」をいう。自然の岩場なのか、人の手が加わっ

たものなのかははっきりしない。

全国地図には、オオヨケ地名は一件も記載が無い。伊那谷特有の地名であろうか。

【岡和田】

オカアダ。

南和田名古山の遠山川右岸の山地に、二ヶ所ある。一つは尾形戸沢右岸に、もう一つは南の方のマダラ沢の近くにある。

オカアダとは何をいうのであろうか。

オカはヲ（峯）・カ（処）で「山稜」をいい、アダはアタと同じで「損傷」の意から「崩崖」を意味するか（以上は語源辞典）。アタは日葡辞書にもあり、遠山にはアタケルという方言があって「暴れる」ことをいう（長野県方言辞典）。

従って、オカアダとは「山地で崩崖のあるところ」を意味するものと思われる。

全国地図には、オカアダ地名は載っていない。

【岡澤】

オカザワ。

南和田の名古山に二ヶ所、いずれも遠山川右岸の屋形戸沢流域にある。

オカには「側稜」の意があり、アカザワとは「側稜の間を流れ下る谷川の流域」をいうのであろうか。

全国地図には、オカザワ地名は7ヶ所、オカサワ地名は2ヶ所にあり、どれも「岡沢」の字が宛てられている。

【オコシ・オコジ】

オコシが1ヶ所、オコジが2ヶ所、いずれも和田の山越にある。遠山川右岸で山原集落の上方の山地になっている。

オコシ=オコジであろう。オコジは「起地」のイメージから生まれたのかもしれない。

オコシは動詞オコス（起）の連用形が名詞化した語で、長野県飯田付近の方言で「新しく起こした山畑」をいう（国語大辞典）。山畑は山間の畑地であるが、焼畑も含まれていると思われる。長野県方言辞典にはないが、日本方言辞典には拾われている。

以上から、オコシモオコジも「新しく起こした山間の畑地になっている土地」をいうのであろう。

オコシ地名は、全校地図の中・大字として5ヶ所に挙げられているが、オコジ地名は載っていない。

【押出】

オシデ。

和田の中字「押出」の集落に3ヶ所ある。遠山川右岸になる。

南信濃村史遠山には、オシデは「享保三年（1718）の大地震の時に「山が崩れて平地となった所」とあるが、針間道夫氏はこの「出山」を遠山地震以前の

文書から見つけ出している（伊那谷研究団体協議会シンポジウム 2015）。遠山地震の時には、すでにオシデ地名があったことになる。現在のオシデ小字の分布をみても、小さな小字でしかもバラバラに散在していることから、被害面積がそれほど広くないか、あるいは比較的古い地名ではないと思えるので、針間氏の発表には頷ける。

以上から、オシデは「（押出沢と伊ノ木沢に発生した）土石流によって土砂が押し出された土地」としておきたい。

オシデ地名は全国地図の 9ヶ所に中・大字として挙げられている。

【押出沢・押出澤】

オシデザワ。

和田の押出に数カ所ある。いずれも遠山川の西の山地から流れ出る押出沢の流域になる。

オシデザワとは「土石流を発生させたことがある谷川の流域」をいうのであろう。土地の人たちには土石流の印象が強く残っていたところであったと思われる。

オシデザワ地名は、全国地図には 2ヶ所にある。

【押出山】

オシデヤマ。

和田の押出ともう 1ヶ所、木澤の小道木にある。和田のオシデヤマ小字は 2ヶ所にあり、いずれもオシデザワ小字に挟まれている。木澤のオシデヤマ小字は遠山川の左岸にあり、日掛沢の北の方の谷に沿っている。

オシデヤマも「土石流が発生したことのある谷川のある山地」を意味していると思われる。

オシデヤマ地名は、全国地図には 1ヶ所にしかない。

【押村】

オシムラ。

これも和田の押出、伊ノ木沢流域にあり、オシデ小字に接している。現在は田んぼになっている小さな小字である。

オシ（押）は「押し出された地形」か（語源辞典）。ムラはムラ（群）と同語源で「地形・水系などによって人の居住に適し生活圏を形成している地域」（国語大辞典）をいう。

以上から、オシムラとは「土砂が押し出されている土地で、人の居住に適したところ」をいうのであろう。

オシムラ地名は全国地図にはない。

【ヲチ】

オチ。

遠山川左岸の和田の新町に、大きい小字と小さいのがある。

オチは動詞オツ（落）の連用形が名詞化した語であろう。ヲチの由来についても、二説を挙げておく。

①南信濃村史遠山には、オチは「出山と同様、山が崩れ落ちてオチという地名になった」としている。従って、オチとは「山が崩れ落ちたところ」をいうか。北隣にはデヤマ（出山）小字がある。

②オチには「傾斜地。崖」の意がある（語源辞典）。すなわち、オチとは「崖地」をいうか。

全国地図には、オチ地名が10ヶ所に中・大字として挙げられており、うち3ヶ所が「落」となっている。

【ヲチイ】

オチイ。

この小字も遠山川左岸の和田新町にある。二つのヲチイ小字の間になっている。

オチイとは何を意味するのか。意外と分かりにくい地名で三説を挙げておく。

①オチは先に触れたように「崖」の意がある。イは井（井）で「清水」をいうか。すなわち、オチイとは「清水が湧き出ている傾斜地」をいうか。

②オチイとは「オチ小字の近くで泉の湧き出ているところ」をいうかもしれない。

③オチイはオチ（落）・イ（居）で「崩れ落ちて落ち着いたところ」といった意味もあるかもしれない。

オチイ地名は、全国地図に中・大字として4ヶ所に記載があり、うち3ヶ所は「落居」の字を宛てている。

【落込】

オチコミ。

和田の漆平山、遠山川左岸の小池沢に更に支流のナル沢が流れこんでいる。

オチコミ（落込）は「落ちて他のものの中に入ること」（国語大辞典）をいう。そこで、オチコミ小字も「急傾斜地を流れる支流が本流に激しく流れ込んでいくところ」をいうのであろうか。

全国地図には、オチコミ地名は記載されていない。

【ヲチ山】

オチヤマ。

木澤の上村川右岸にあり、氾濫原に山地が迫り出して急峻な傾斜地になっている。

オチヤマとは「急傾斜地のある山のあるところ」をいのであろう。

全国地図にはオチヤマ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【追付】

オツツキ。

和田の池口にある大きな小字で、その中に、イケグチ・イケグチミヤノウエ・イケグチカミノシマなどの小字が包み込まれている。

オツツキとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①オツツキ←オチツキ（落着・落付）と促音便化したもので、「移り動いていた

ものがとどまる場所」(国語大辞典)をいう。流水や土砂が溜まり、堆積するところをいうのであろう。池があったか、あるいは傾斜が緩くなった場所であった。以上から、オツツキとは「流れてきた川や土砂が留まったところ」を意味するか。

②前記の解釈と結果は同じであるが、オツツキとはオヒツキ(追付)が促音便化したもので、「先行した水や土砂に追い付いた場所」をいうか。

全国地図には、オツツキ地名は載っていない。

【ヲトワギ】

オトワギ。

木澤の小道木にあり、遠山川左岸で遠山川氾濫原に下る傾斜地になっている。

オトワギとは何か。語源辞典によって二説を挙げる。

①オトワギとはオト(落)・ハ(端)・ギ(キと同じで場所接尾語)。すなわち、オトワギとは「崖地のあるところ」をいうか。

②オトはオトス(落)から「崖」の意。ワギ←ワキと濁音化した語で、ワキは動詞ワク(湧)の連用形が名詞化したもので、オトワギとは「自然湧水のある崖地」を意味するか。

全国地図にはオトワギ地名は記載されていない。

【尾の久保】

オノクボ。

木澤の上村川右岸の阿島台地から仰ぐ山地にあり、小嵐神社に行く道が通っている。

①オノクボとはヲ(峯)・ノ(助詞)・クボ(窪地)で、「側稜のある山地にある窪地」をいうのであろうか。あるいは、②ノ(野)は人里に対して、まだ開かれていない土地をいうか(語源辞典)。であれば、オノクボとは「山中の土地で未耕地になっている小高い土地」をいうのかもしれない。

全国地図には、オノクボ地名は3ヶ所に挙げられており、うち2ヶ所が「小野久保」となっている。

【尾野嶋・尾ノ島・尾の嶋】

オノシマ。

これらの小字は和田の遠山川左岸の尾乃島にある。遠山川の氾濫原から東側の山地に続いている。

シマは「ある一区画をなした土地」を意味し、オ(尾)は「山の裾野の延びた所」(国語大辞典)をいう。

以上から、オノシマとは「(側稜から川原まで)山の裾野の延びているところ」を意味するものと思われる。

また、松山義雄氏は、オには鉱脈の意味もあり、むかし鉄の精錬が行われていたのではないかというが、まだ発見されてはいない(新編伊那風土記)。

全国地図には、オノシマ地名は3ヶ所に中・大字として記載されている。

【伯母根】

オバネ。

南和田大町の遠山天満宮の麓付近の傾斜地にある。

オバネには静岡県の方言で「山の峰。尾根」の意がある（国語大辞典）。

ここのオバネはオ（尾）・バ（場）・ネ（根）で、「尾根筋の先端部」を意味するか。

全国地図には、オバネ地名は2ヶ所に挙げられている。

【尾屋敷】

おやしき。

和田の新町に2ヶ所あるが、新町の東側の傾斜地に並んでいる。

オヤシキは「武家屋敷」（国語大辞典）の意があるので、オヤシキは「武家屋敷があったところ」としたい。和田城の南側の傾斜地だから、城を守る場所に位置していたのであろう。「尾屋敷」の文字に惹かれて、「屋敷があった少し高いところ」にしたいという思いもあるが、やめておきたい。

全国地図には、オヤシキ地名が15ヶ所にも中・大字として記載があり、うち10ヶ所に「御屋敷」、1ヶ所にだけ「尾屋敷」の字が宛てられている。

【ヲンダシ】

オンダシ。

南和田大町の大仁の杜の山際にある。

オンダシはオヒダシ（追い出し）の促音便化した語であろう。国語大辞典にも静岡県磐田郡の方言で「大雨で水と土砂と一緒に山から川へ流れ込むこと」の意としているように、各地の一般的な方言になっている。もちろん長野県方言辞典にもある。

以上から、オンダシとは「大雨で土砂が流れ出して堆積した処」を指す。土石流が流れ出たところで、急傾斜地から緩傾斜地や平坦地に谷川が流れ落ちる場所に多い。

全国地図には、オンダシ地名は3ヶ所で中・大字となっており、うち2ヶ所が「押出」となっている。

【開地】

カイチ。

これも南和田の大町にあり、遠山天満宮の傍を流れる支川の上流の急傾斜地にある。

カイチ（開地）は「荒地を切り開いて、田や畑や宅地などをつくること」（国語大辞典）をいうが、当地の急傾斜地に適応しそうにもない。焼畑はあったにしても、こうした地名にはならないのではないかと判断して採りあげないことにしたい。

では、カイチとは何か。

カイチにはカヒ（峡）・チ（場所接尾語）で、「谷間」の意がある（語源辞典）。従って、カイチとは「谷間になっているところ」をいうのであろう。

国土地理院の全国地図には、カイチ地名は7ヶ所が中・大字として採りあげ

られているが、「開地」となっているのは、1ヶ所だけ。

【カイモト】

和田の夜川瀬にある。遠山川右岸にある支流の樋口沢左岸の流域にある。

カイモトについて、該当しそうな解釈は辞書類にはみえない。

モトはモト（下・許）で「麓」の意と思われるが、カイモトとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

- ①カイはカヒ（峽）で「谷間」をいうか。カイモトとは「谷間が開けたところ」となる。
- ②カイがカキ（欠）のイ音便化した語であれば、カイモトとは「崩崖の麓あたり」を意味するか。
- ③カイがカシ（谷壁）のイ音便化したものであれば、カイモトとは「谷壁の下の方の土地」となる。

カイモト地名は、全国地図には2ヶ所に載っている。

【柿木下】

カキノキシタ。

和田の押出、押出沢左岸の扇状地にある小さな小字である。

カキノキシタとは何か

- ①一般的には、面の通りで「目立つような柿の木の許にある土地」ということになる。この解釈もありうる。
- ②カキノキとは「カキ（欠）・ノキ（除）と類義語を重ねた形で、崖などの崩壊地形を意味する地形」（語源辞典）という。これによれば、カキノキとは「崩壊地の下方の土地」となるが、どうであろうか。

全国地図には、カキノキ地名が1ヶ所にだけあり、「柿木下」の字を宛てている。

【柿久保】

カキノクボ。

南和田の名古山、遠山川右岸の氾濫原から山地にかけて延びる長い小字である。

カキノクボとは、カキ（欠）・ノ（助詞）・クボ（窪）で、「崩落地のある麓の土地」をいうのであろう。

2. 5万分の1の全国地図には、カキノクボ地名は4ヶ所にあり、いずれも「柿」と「久保」の字が宛てられている。

【笠掛】

カサカケ。

南和田十原の遠山川左岸の山地にある。

カサカケとは何か。よくわからない、やっかいな地名である。

カサカケは中世に行われた射芸の一つで、神事笠懸もあり神事にも登場するというので、論外とするわけにもいかないが、この山中で行われことはないかと判断して採らないことにする。

それでは、カサカケとは何か。二説を挙げる。

- ①カサはカ（上）・サ（場所接尾語）で、カケ（欠）は「崩壊地」をいう（以上は語源辞典）。従って、カサカケとは「上流部に崩崖のある谷」を意味するか。
- ②カサカケ←カザカゲと清音化した語か。カザカゲ（風陰）は「風の当たらない所をいうのかもしれない。カザカゲは日葡辞書にもある。

カサカケ地名は全国地図に3ヶ所があり、いずれも「笠掛」の字が宛てられている。

【風原】

カザハラ。

和田新町の南東部の山地にある。一昔前になるが、この気候地名であるカザハラを尋ねて南信濃まで来たことがあった、そのときには、どこにあるのか分からなかったの、やっと探し当てることができた、という思いがある。

みな沢右岸の北西方向に下る側稜にある。

カザハラとは何か。二説を挙げる。

- ①カザハラとは「風の当たる、採集や狩猟の場」をいうか。西よりの風が当たりやすいところだから、冬の風を意識した命名であろうか。なお、このカザハラ小字の南西方向の遠山川左岸にオノシマ小字があるが、ここにはカザラという屋号の家があるという（新編伊那風土記）。カザハラ→カザラと転じた語であるが、これまでに五、六回も屋根がめくられているという。
- ②カサ→カザと濁音化したもので、カ（上）・サ（場所接尾語）から「上流の方」をいう（語源辞典）。従って、カザハラとは、「上流の方にある採集狩猟の場」かもしれない。

全国地図には、カザハラ地名は1ヶ所のみで「風原」となっている。

【カジツクリ】

南和田の名古山の遠山川右岸の支流柳木瀬沢の上流部にある。

カジは動詞カジル（搔）の語幹で「引っ搔かれたような地形」（語源辞典）をいい、ツクリは遠山谷でいうところのヤマツクリ（山作）、すなわち焼畑を意味するものと思われる（遠山谷北部の民俗）。

従って、カジツクリとは「崩崖のある焼畑耕作が行われていた所」を意味するか。

全国地図にはカジツクリ地名もカシツクリ地名も載っていない。

【梶谷】

カジヤ。

八重河内の此田にある。八重河内川に東側から流れ下る梶谷川の谷に大小のカジヤ小字が散在する。

カジヤとは何を意味するか。二説を挙げる。

- ①カジは、先にカジツクリ小字で採りあげたが、動詞カジル（搔）の語幹で「引っ搔かれたような地形」をいう。遠山地方では「搔ク」ことを「カジル」と表現している（長野県方言辞典）。ヤはヤツ（谷）に同じだから「谷あいの地」の

意（国語大辞典）。以上から、カジヤとは「崩落地のある谷あいの土地」を意味するか。

②松山義雄氏は「カジヤという地名は、鍛冶屋がここを開き、かつ居住していたことから生まれた地名であることは、疑いがない」（新編伊那風土記）といい、さらに、刀剣や農具のたぐいを打つ小鍛冶ではなく、金属を精錬する大鍛冶だとする。砂鉄による製鉄が行われた土地であるという。そうなれば、カジヤとは「製鉄に関わった人たちが住んでいた土地」を意味する。少なくとも、砂鉄の状況を調べる必要はありそうだ。

全国地図には、カジヤ地名は82ヶ所にも中・大字として挙げられており、うち33ヶ所に「鍛冶屋」、20ヶ所に「鍛冶屋」の字が宛てられている。

【檜山】

カシヤマ。

和田の押出の押出沢川扇状地にあり、緩傾斜地から山地側の傾斜地に懸かっている。

カシヤマとは何か。語源辞典によって、二説を挙げる。

①カシは動詞カシグ（傾）の語幹で、「山麓などの傾斜地にみられる地名」だという。ヤマは「林地」か。従って、カシヤマとは「林地になっている傾斜地」をいうか。

②カシにはカシワ（柏）の意もあるという。遠山でもそうであったのかどうか、はっきりはしないが、もしそうであるなら、カシヤマとは「柏が自生していた林地」を意味するのであろう。

全国地図には、カシヤマ地名は21ヶ所に中・大字として挙げられており、うち14ヶ所が「檜山」に、3ヶ所が「柏山」となっている。

【カチツネ】

これも和田押出の押出沢川左岸の山地にある。

カチツネはあまり聞かないが、何を意味するのか。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カチは動詞カツ（搗）の連用形で「叩き落とす」の意から「崩崖」を意味する。ツネはツメ（詰）の転で「谷の奥」など詰まった地形をいう。マ行⇄ナ行の子音交替は「比較的多い」という（国語学大辞典）。以上から、カチツネとは「崩崖のある谷の奥地」をいうか。

②カチ←カッチ←カハ（川）・ウチ（内）

と転じたもので、カチには「河谷」の意がある。従って、カチツネとは「（押出沢川の）河谷の奥まった土地」を意味しているかもしれない。

全国地図には、カチツネ地名は載っていない。

【カトナキ】

木澤の川合にあり、遠山川左岸の川原から山地にかけての広い小字になっており、高い所を林道川合線が通っている。

カトナキとは何か。語源辞典に依り三説を挙げる。

①カトナキはカ（欠）・ト（場所接尾語）・ナギ（薙）から転じたものか。すなわち、カトナキとは「崩崖のある崖地」を意味する。カは動詞カク（欠）の語幹。

②カトはカハ（川）・ト（処）の略語か。カトナキとは「川辺にある崩壊崖地」となる。

③カトはカド（角）の清音化した語で、「曲がり角」のこと。つまり、カトナキとは「（遠山）川の曲がり角にある崩崖地」を指すか。

全国地図には、カトナキ地名は記載がない。

【金山】

カナヤマ。

木澤の中根、八重河内、和田の漆平島の3ヶ所にある。

木澤のカナヤマは遠山川が上村川に合流する、直前の遠山川右岸の急傾斜地にある。中根城址の南西側になる。

八重河内のカナヤマ小字は梶谷川の中流域に、和田のカナヤマ小字は小池沢支流のナル沢の上流より奥地にある。

カナヤマとは何を意味しているのか。分かりにくい地名であるが二説を挙げる。

①カナヤマは字面の通りで金属に関わる地名で、「鉄か銅の鉱石が掘り出された土地」だろうか。八重河内のカナヤマ小字は、松山義雄氏の指摘する砂鉄を採集していた場所である可能性がある。

②カナはカンナ（鉋）の古語カナの語源である「カク（掻）・ナグ（薙）」と同じく「掻き薙がれたような土地」をいう（語源辞典）。従って、カナヤマとは、「崩崖のある山地」となる。

かなりの期間、稼働していた加加良銅山は、池口桜井鉱山もそれほど遠くないところにあった地域だから鉱山であったことも十分に考えられる。

全国地図には、カナヤマ地名は74ヶ所が中・大字として挙げられており、うち74ヶ所に「金山」、1ヶ所だけであるが「銅山」の字もある。

【上澤山】

カミサワヤマ。

木澤の上島集落の西方にあり、大きな小字になっている。その中を上沢川が流れている。

カミ（上）は「高い所」をいい、サワ（沢）は「山あいの水のあるところ」を指す（語源辞典）。

従って、カミサワヤマとは「あちこちに水のある山地」を意味するのであろう。広い小字だから、あちこちに湿地を伴う谷がある。

小嵐稻荷社も遠くないところにあるので、カミサワヤマのカミはカミ（神）とも考えられるが、関係は薄いとみた。

全国地図には、カミサワヤマ地名は記載が無い。

【上島・上嶋】

カミシマ・カミジマ。

カミシマもカイジマも、その由来は同じであろう。

和田の池口に一ヶ所、木澤には数ヶ所ある。

カミシマとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①カミ（上）は「高い所」をいい、シマ（島）は「一区画をなす土地」か。すなわち、カミシマとは「少し高い方にある土地」をいう。池口や木澤の山地にあるカミシマ小字はこれか。

②カミ（神）・シマ（島）は「神社のある川端の土地」の意もある。白山神社を包む上島集落のあるカミジマ小字はこれかもしれない。

③カミは「上流の方」をいい、カミジマは「(中心地から見て) 上流側にある川端の土地」を意味していることも考えられる。上村川上流にあるカミジマ小字は、これに当たるか。下流にある、押出のナカシマ小字に対応しているであろう。

全国地図にはカイジマ・カミシマ地名は28ヶ所に記載がある。

【上ノ島・上ノシマ】

カミノシマ。

和田新町の遠山川左岸の川端に沿う大きな小字になっており、山地側はデヤマ（出山）小字に、南側の下流はナカノシマ（中ノ島）小字に接している。

カミノシマとは何か。はっきりしているが、それでも二説を挙げたい。

①カミノシマとは「上流側の川端の土地」をいうのであろう。

②もしかしたら、デヤマ（出山）が押し出してきた記憶から発生した地名かもしれない。カミは動詞カム（嘯）の連用形が名詞化した語で「水、球、車などが、岩、砂、土などを激しくえぐる」意があり、カミノシマとは「(遠山川の) 水流が押し出してきた土砂を激しくえぐった川端の土地」をいうのかもしれないが、この解釈が成立する可能性は小さいか。

カミノシマ地名は全国地図の中・大字として12ヶ所に挙げられている。

【上山】

カミノヤマ。

和田押出の集落に近い山地にある。

カミノヤマとは何か。二説を挙げる。

①カミ（神）・ノ（助詞）・ヤマ（山）で、「神聖な山地」をいうか。山住神社を祀っている土地である。

②カミはカミ（上）で、カミノヤマは「集落のすぐ高い所にある山地」をいうか。

全国地図には、中・大字として、カミノヤマ地名を17ヶ所に挙げている。宛てられている字に「上」があるのは14ヶ所、「神」の字となっているのは3ヶ所ある。

【日末・ヒスエ・上日末】

ヒスエ・カミヒスエ。

これらの小字は、いずれも和田の池口にある。

ヒスエとは何か。辞書類には載っていない、意外とはっきりしない地名。二説を挙げる。

①ヒスエは字面の通りで「日光の末端」で、「日当たりのよくない土地」をいうのであろうか。隣にはヒカケ小字が並んでいるので、ヒカケ地よりも日当たりはいいのかもしれない。それとも、単に、ヒカケを言い換えたにすぎないのか。

②ヒはヒ（樋）で「流水」のことか（語源辞典）。であれば、ヒスエとは「川の最上流部になる山の奥地」をいうか。

カミヒスエは「ヒスエの更に上流部の土地」を意味するのであろう。

辞書類にはないので当然ながら、全国地図には、カミヒスエ地名はむろんのこと、ヒスエ地名も記載されていない。

【亀久保】

カメクボ。

和田の大島、池口川の中流部に二ヶ所ある。

カメクボとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カメは動詞カム（噛）の連用形カミが名詞化した語で「崩壊地形」をいう。イ段⇔エ段の母韻交替は極めて多いという（国語大辞典）。以上から、カメクボとは「崩壊で窪地になった土地」をいうのであろう。715年の大地震で崩落したところか。

②カメはカハ（川）・メ（目。べの転）で「川のあたり」をいうか。すなわち、カメクボとは「川の近くにある窪地」を意味するか。

全国地図には、カメクボ地名は5ヶ所に挙げられており、そのすべてに「亀久保」の字が宛てられている。

【カヤンバ】

南和田の十原集落から仰ぐ傾斜地にある。

カヤバ→カヤンバと撥音便化した語であろうか。カヤバ（茅場）で「屋根を葺く茅を刈るところ」（国語大辞典）であろう。十原集落共同の入会地であったか。

全国地図には、カヤンバ地名は載っていない。

【唐沢】

カラサワ。

和田山原のヤマハラ小字に囲まれた小さな小字である。

すでに「柄沢・カラ沢」で採りあげているが、この唐沢は仮説②に当たるか。すなわち、「崖の崩れたところにある谷川」をいうのであろうか。

【カラスの筒】

カラスノツツ。

木澤の須澤にあり、遠山川左岸岸辺の急傾斜地にある。

カラスノツツとは何をいうのか、全く取りつきできない地名である。それでもいくつか候補を挙げておきたい。

①ツツは動詞ツツムの語幹で「立ちふさがる」の意がある（語源辞典）。このことから、カラスノツツとは「鳥の行く手を遮る急傾斜地」をいうか。鳥が立ち寄らない所なのであろうか。

②ツツは動詞ツツク（突）の語幹で「崩壊地形」をいう（語源辞典）。①の解釈とは逆になるが、カラスノツツとは「鳥の多い崩崖のあるところ」をいうか。

③鳥勧請の行事と関わるか。全く聞いたことがないので、可能性はかなり低い。正月行事や収穫儀礼で、山の神の使いとしての鳥に餅や団子を食べさせる行事。そうした餅や団子を入れた筒を置いた所とうのはどうであろうか。一般には、餅や団子は地面に撒くことが多いようだ。

むろん、全国地図には、カラスノツツ地名は、載っていない。

【川合・川井】

カワイ。

木澤の中字「川合」にある。遠山川左岸にあり、すぐ上流には左岸から三ツ沢川が合流している。

カワイとはカワ（川）・アイ（合）のことで、字面の通り、「川が合流しているところ」をいう。

全国地図には、カワイ地名は87ヶ所に中・大字として記載がある。

【川島】

カワシマ。

木澤の中字「木沢」にある。遠山川とは離れた木沢簡易水道柵の上配水池の近くなる。

カワシマといえば「川の中にある島」となるが、ここでは当てはまらない。

ここでは、カワは「泉。わき水」を意味する（語源辞典）。「古い時代とかある地方の日本人にとっては”水のある所”がすなわちカハでありキであったはず。我々の祖先にとっては、”水そのもの”が重要なのであって、河流を源流から河口部まで一本の流れとして認識する必要はなかったのではないか」（語源辞典）という。

シマは「ある一区画をなした土地」（国語大辞典）をいう。

以上から、カワシマとは「泉が湧き出ている土地の一区画」を意味するのであろう。村人たちにとっては大切な泉だったのでないだろうか。

全国地図には、カワシマ地名が30ヶ所もあるが、そのほとんどは「川の中にある島」と思われる。

【勘平作り・喜平治作り】

カンペイツクリ・キヘイジツクリ。

カンペイツクリは和田の押出、キヘイジツクリは和田の池口にある。いずれも山地になっている。

ツクリは「山作」の土地で、焼畑が行われていたところである。

従って、ケンペイツクリは「勘平さんの焼畑耕作地」であり、キヘイジツクリとは「喜平治さんが焼畑耕作をしていた所」を意味する。

それぞれ、固有名詞の人が所有する焼畑で、共同でおこなうこともあったのであろうか。

もちろん、全国地図には、カンペイツクリ地名もキヘイジツクリ地名も記載はない。

【木澤】

キザワ。

旧木沢村の村名にまでなった小字であり、いずれも三ツ沢川の流域にある。

キザワとは何をいうのか。当然すぎるので、かえって分かりにくい地名である。二説を挙げておく。

①キザワとは「材木を流して運び出した谷川のあるところ」をいうか。現在の三ツ沢川のことであらうか。

②キザワとは、もしかしたら「川に埋もれ木がある所」か。この場合は、川は遠山川のことになる。

全国地図には、キザワ地名は6ヶ所に挙げられており、うち5ヶ所が「木沢」になっている。その中の一つが、2.5万分の一の「上町」図。

【北原】

キタハラ。

和田の山原にあり、三方をヤマハラ小字に囲まれており、近くには数軒居の居住地もある。

キタはキダが清音化した語でキダハシ（階段）をいうか（語源辞典）。ハラは「耕地に利用されていない草刈地などになっている緩傾斜地」をいうのであろうか（民俗大辞典）。

キタハラ地名は、全国地図には91ヶ所が挙げられており、うち90ヶ所は「北原」になっている。

【桐手】

キリテ。

南和田の飯島の遠山川右岸、川から離れた急傾斜地にある。

キリはキリ（断）で「切り立った地形」をいい、テは「場所」を示す接尾語か（以上は語源辞典）。

従って、キリテとは「切り立った崖地があるところ」をいうのであろう。

全国地図には、なぜかキリテ地名は採られていない。

【桐原】

キリハラ。

和田の押出にある。遠山川に西方山地から流れ込む金七沢左岸の急傾斜地になっている。

キリハラとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら、二説を挙げておき

たい。

①キリはキリテ小字のキリと同じように、「切り立った地形」をいい、ハラは「キタハラ小字のハラと同様に「耕地として利用されない、採集・狩猟の場」であろうか。すなわち、キリハラとは、「急傾斜地で、採集や狩猟の場となっている傾斜地」を意味するか。

②キリはキリ（霧）かもしれない。であれば、キリハラとは「霧が上がってきやすい採集や狩猟の場」かもしれない。霧が果たして上ってくるのかどうか。

全国地図には、キリハラ地名は9ヶ所の中・大字として記載されており、うち6ヶ所が「桐原」となっている。

【金作作】

キンサクツクリ。

南和田の十原集落の南方の山地にある。

キンサクツクリとは「金作さんが所有する山畑、すなわち焼畑耕作地」をいう。

全国地図には、むろんのこと、キンサクツクリ地名は無い。

【クスマキ】

和田の夜川瀬にある。樋口沢と志乃婦沢の間の山地になっている。

クスマキは何を意味しているのだろうか。語源辞典などにより、二説を挙げる。

①クスは動詞コソグ（刮）の語幹コソの母音交替した語で、「崩壊地形」をいう。コのお段→クのお段への変化は「各時代にわたっており、極めて例が多い」（国語学大辞典）といわれており、ソースの変化も同様。マキは「谷川が巻くように流れているところ」のこと。以上から、クスマキとは「崩崖があつて谷川が巻くように流れている土地」をいうのであろうか。

②クス←コシ（麓）と転訛したもの。

シ（イ段）からス（ウ段）への母韻交替も「かなり多い」といわれている（国語学大辞典）。マキは動詞マク（撒）の連用形が名詞化した語で「崩壊地形」をいう。従って、クスマキとは「麓が崩崖になっている土地」ということも考えられる。

全国地図には、クスマキ地名は記載されていない。

【熊ノ下】

クモノシタ。

木澤川合の上村川右岸の川原にあり、すぐ上の小台地には熊野神社や正八幡宮が祀られている。

クモノシタは「熊野下」で、「熊野神社の下側にある土地」をいう。

全国地図には、クモノシタ地名は2ヶ所の中・大字として記載がある。

【熊ノ丈】

クモノタケ。

木澤の中字「木沢」にある。

タケは「信仰に関係ある山」をいう（語源辞典）。従って、クマノタケは「熊野信仰にかかわる山」を意味するか。天台系の修験者の修行地であったかもしれない。

全国地図には、クマノタケ地名は載っていない。

【熊ノ地・熊野地】

クマノチ。

和田押出の押出沢川の左岸に集まっており、もっとも下流側のクマノチ小字には山住神社が鎮座する。

クマノチとは「熊野信仰に関わる土地」と思われるが、はっきりしないところもある。

山住神社は水窪にある山住神社から勧請したと思われる。猪防除のためのお宮だと聞いたことがある。そのことと熊野信仰とどこで繋がっているのだろうか。

あるいは、ここもかつては熊野修験者の修験の場であったが、山住神社は盛山との関係で、その後に祀られるようになったのか。等々。

全国地図にはクマノチ地名は載っていないが、新宮市には熊野地（クマノジ）がある。

【熊伏】

クマブシ。

八重河内の小嵐と此田に大小のクマブシ小字がある。ここには県道南信濃水窪線が通っている。

クマブシとは何を意味しているのだろうか。二説を挙げる。

①クマはクマ（隈）で「奥まった所」をいい、ブシは「小平地」を意味する（語源辞典）。すなわち、クマブシとは「奥まった山地に小平地が何か所か

あるところ」をいうのであろうか。

②クマは動詞クマスの語幹で、クマスは下伊那郡や静岡県榛原郡の方言で「ばらばらにする。くずす」の意（国語大辞典）。従って、クマブシとは「崩れ地や小平地が散在する山地」をいうのかもしれない。当地の方言であるとはいえ、クムという自動詞からの変化は考えにくいのが気になる。

クマブシ地名もクマブセ地名も、全国地図には無い。

【倉ノ沢】

クラノサワ。

南和田大町の高台にあり、宮の前沢に接する。

クラノサワとは何か。国語大辞典により、二説を挙げる。

①クラには「岸壁」の意がある。岐阜県の方言だという。すなわち、クラノサワとは「岸壁のある谷川のあたり」をいうのであろうか。

②クラ（座）は磐座のクラで「すわる所」のことで、クラノサワとは、「近くにお宮があった神聖な土地を流れる谷川」のことか。周辺には宮の前沢があり、ミヤノウエ（宮ノ上）小字もある。宮の前沢はクラノサワのことかもしれない。

お宮がはっきりしないが、少し離れているが台地の先端にある唐土神社であろうか。

全国地図にはクラノサワ地名は6ヶ所にあり、そのいずれにも「倉」と「沢」の字が使われている。

【胡桃久保】

クルミクボ。

南和田の十原と飯島にある。飯島のクルミクボは屋形戸沢左岸にあり十原のは林道十原線に沿っている。

クルミクボとは何か。語源辞典に依りながら三説を挙げる。

- ①クルミは「ぐるりと囲まれた地形」をいう。すなわち、クルミクボとは「山が周りにある小さな窪地」をいうか。
- ②クルミはクル（割）・ミ（「辺」接尾語）で「崩れた辺り」をいう。従って、クルミクボとは「崩れ地のある付近の窪地」を意味するか。
- ③オニグルミも含めてクルミと呼んでいる。日本各地の川に沿って自生している落葉高木で種子を食用にする。クルミクボとは「胡桃が自生している窪地」をいうのであろうか。

全国地図には、なぜかクルミクボ地名は載っていない。

【胡桃通・クルミ通り】

クルミトオリ。

南和田の大町、遠山川左岸の天仁の杜の台地から登る傾斜地の麓付近にある。クルミトオリとは何をいうか。これも三説を挙げる。

- ①クルミトオリとは、「下段の平地を取り巻くように巡る裾地」を意味するか。
- ②あるいは「オニグルミが取り巻いているように自生している土地」か。小字地名発生時には、道路も通っていた可能性がある。
- ③クルミはクル（割）・ミ（廻）で「山裾に沿って崩れたことのある土地」かもしれない。

クルミトオリ地名は、全国地図には記載が無い。

【クルミ山・胡桃山】

クルミヤマ。

南和田の名古山にある。一つは遠山川左岸の川端にあり、もう一つは対岸の右岸の名古山集落奥の山地にある。

クルミヤマとは、字面の通りで「クルミの自生している林地」を意味するのであろう。

全国地図にはクルミヤマ地名は2ヶ所の中・大字として挙げられており、いずれも「胡桃山」となっている。

【クロノ田】

クロノタ。

木澤上島の下栗側稜の先端部尾根に近い北西向きの斜面にある。

クロノタとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①クロには「傍ら。そば」の意がある。ここでは「道路の傍」をいうか。ノタはノタ（野田）で「山間の湿地」で下伊那郡の方言だという。以上から、クロノタとは、「道路に沿った山間の湿地があるところ」を意味するのであろう。

②色のクロ（黒）はクリ（涅）に通じ、「湿地」をいう。クロノタとは、意味が重複するが、「湿地のある山地」をいうこともあるかもしれない。

全国地図には、クロノタ地名は1ヶ所にだけあり、「黒野田」となっている。

【桑原】

クワバラ。

南和田の大町にある、かなり広い面積を有する小字である。遠山川左岸の天仁の杜の低地に接する傾斜地になっている。

クワバラ（桑原）は、一般的には「桑の木を植えた広い畑」（国語大辞典）をいうが、いま針葉樹林になっている、この傾斜地に桑が植えられていたとは考えにくい。

では、クワバラとは何を意味しているのであろうか。二説を挙げておきたい。

①クワ←キハ（際）と転じたもので（語源辞典）、「遠山川の川辺」を意味する可能性はある。この小字名が発生した時には、遠山川がここまで蛇行していたかもしれない。キ（イ段）→ク（ウ段）の母韻交替は「かなり多い」（国語学大辞典）という。ハラは「耕地として利用されていない採集・狩猟の場」（民俗大辞典）か。以上から、クワバラとは「川辺にある耕作されていない傾斜地」を意味するか。

②クワは「崖」をいうことが多いらしい。クエ（崩）・ハ（端）の約ではないかという（以上は語源辞典）。従って、クワバラとは「崩崖のある耕作されていない傾斜地」をいうか。

全国地図には、クワバラ地名は38ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「桑原」の字が宛てられている。

【ケン】

木澤須澤の遠山川左岸にあり、リケン小字に隣接している。

ケンとは何をいうのか。簡潔にすぎて、かえって分かりにくい地名である。

ケン「鋭く尖った」という字義による漢語地名用語だという（語源辞典）。しかし、小字名が生まれたと思われる中世に、ケン（剣）という語が存在していたのであろうか。日葡辞書にも室町編にも、それはあった。ケン（剣）は、日本刀とは違って、もともとは諸刃の刺突用武器だという。

以上から、ケンとは「剣のように突き出た尾根の先端部」を意味するのであろう。

2,500分の一地図をみると、確かに、その通りで、遠山川を対岸に押しやって尾根の先端となる岬が突き出ている。

全国地図には、ケン地名は記載が無い。

【リケン】

木澤の須澤、ケン小字の下流側と少し離れた下流側にある小字で、二ヶ所に

なっている。

リケンとはケンよりも更に分かりにくい地名である。

ケンが漢語地名用語（語源辞典）であれば、その隣にあるリケンも漢語地名用語であっても不思議ではない。

リはリ（裏）で、「物のうらがわ」の意がある（国語大辞典）。

すなわち、リケンとは「ケン小字の裏側にある土地」と考えることができよう。少し離れた下流側にあるリケンは、かつては上流側のリケンに繋がっていたのであろう。

つまり、リケンとは「尾根の先端が突き出た、その裏側にある土地」を意味するものと思われる。地図で見ると、リケン小字は、ケン小字を裏側から包んでいる。須澤の集落からもそのように見えたのであろう。

全国地図には、当然のことながら、リケン地名も記載はない。

【小池・小池平・小池原】

コイケ・コイケタイラ・コイケツパラ。

和田新町にはコイケ小字が 1 ヶ所あり、和田の漆平島にはコイケ・コイケタイラ・コイケツパラ小字がある。

これらの小字は、全て小池沢の流域にある。

コイケは文字通りで、「小さな池のあるところ」をいうのであろう。かつては流量も多かった川なので、水量が少なくなると、大小の池ができたと思われる。

コイケタイラ小字は二ヶ所にあり、いずれも小池沢左岸の傾斜地にある。そこには平坦地はない。従って、ここではコイケタイラとは、現地の状況から「小池沢左岸の傾斜地」となるが、これが正しいこと証明するあかしは今のところはない。

コイケツパラは「小池沢流域の採集や狩猟の場となっている傾斜地」をいうか。

全国地図には、コイケ地名は 60 ヶ所に中・大字として記載があり、うち 58 ヶ所が「小池」となっている。コイケタイラ地名やコイケツパラ地名は無い。

【コウタ】

和田の山原にある。遠山川に北西から合流する兵沢の上流右岸にある。

コウタとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①コウタは、カミ（上）・タ（処）がウ音便化した語で「（山原の集落からみて）上の方にある土地」をいう。タは「場所」を示す接尾語。

②コウタは、カハ（川）・タ（処）とこれもウ音便化したもので、「（兵沢の）川に沿った土地」を意味する。

全国地図には、コウタ地名は、2 ヶ所に中・大字として記載されている。

【小嵐】

コウロウシ。

八重河内に大小のコウロウシ小字がある。

コウロウシとは何か。二説を挙げる。

①コウロウシ←コオロシと長音化した語で、コ（木）・オロシ（降）から「伐採した材木を滑り落とした所」をいうか。

②コウは「わずかな」という接頭語コが長音化した語で、オロシは「崖」の意（以上は語源辞典）。すなわち、コウロウシとは「ちょっとした崖があちこちにあった所」を意味するか。青崩峠付近だから、崩壊地も多かったと思われる。

コウロウシ地名は、全国地図には記載されていない。

【コガイト・小ガイト】

コガイト。

いずれも和田大島の遠山川左岸、国道 152 号線の南東側の傾斜地に並んでいる。

コは「ほとんど意味をもたない接頭語」（語源辞典）で、カイトについては「遠山地方でハ、カイトは畑だと称している」（民俗地名語彙事典）とある。

以上から、コガイトとは「人家に近い焼畑のあった所」を意味するのであろう。この傾斜地だから、常畑は考えにくい。

コガイト地名は、コ（小）が付きながらも、全国地図には3ヶ所が中・大字として採られている。

【小越】

コゴシ。

南和田、十原集落の東隣のなる緩傾斜地にある。東端を林道十原線が通り、十原簡易水道の配水池もある。

コゴシとは「山道なので岩がごつごつと重なって険しい」意だという（国語大辞典）。形容詞である。時代別国語大辞典の室町編には載っていないが、上代編には「岩などがごつごつしてけわしい」とある。なぜ中世には消えていたのかは不明。

以上から、コゴシとは「岩がごつごつとした傾斜地」を意味するのであろう。

全国地図には、コゴシ地名は載っていない。

【コザシバ】

南和十原の集落の南側の側稜先端部で、急傾斜地になっている。

コザシバとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①コザ←コサと濁音化したもので、コサは「日蔭地」のこと、シバは「雑木」をいう。すなわち、コザシバとは「雑木林のある日蔭地」をいうか。

②コサには静岡県磐田郡の方言で「不毛地」の意がある。シバは動詞シバクの語幹で「打つ. 殴る」の意から「崩崖」をいう。以上から、コザシバとは「崩崖のある不毛地」か。焼畑耕作もできないような不毛地であったか。

全国地図には、コザシバ地名は載っていない。

【小瀬戸】

コゼト。

八重河内の梶谷川の中流域左岸を中心にした広大な小字である。

コゼトは、コゼト←コセトと濁音化したもので、同じことを意味しているの

であろう。

コセトとは何か。三説を挙げる。

①コセ・ト（場所接尾語）であれば、コセには「一方が山側になった道」（国語大辞典）の意があるので、コセトとは「谷間になっていて道路の続くところ」を意味するか。コセは東筑摩郡の方言とされている。

②コ（木）・セトで、セトは「川の瀬の狭くなった所」（国語大辞典）をいう。従って、コセトは「樹木が繁った、川の瀬の狭くなっているところ」をいうのかもしれない。

③あるいは、コセト←コセ・セトが縮まった語であろうか。すなわち、コセトとは「川の瀬が狭まっていて、道路が通っている谷間」をいうか。

全国地図には、コゼト地名が4ヶ所、コセト地名が5ヶ所にあり、それらのいずれも「小瀬戸」になっている。

【小道木】

コドウギ。

木澤の上村川右岸の曲流点にある。

コはほとんど意味をもたない接頭語、ドウは擬音語ドウドウから川音による音響地名、キは「場所」を示す接尾語（以上は語源辞典）。

従って、コドウギとは「（上村川の）川音が響く土地」をいうのであろう。特に、水量が増したときには、曲流点なので、激しい音がしていたのであろうか。

全国地図には、コドウギ地名は記載されていない。

【小ナギ】

コナギ。

和田の漆平島、池口川の下流域に二ヶ所ある。

コナギは字面の通りで、オオナギに対して、「小さな崩壊地のあるところ」をいうのであろう。ナギは動詞ナグ（薙）の連用形が名詞化した語。

コナギ地名は、全国地図には記載されていない。

【此田・小野田・小の田・此の田】

コノタ。

八重河内には大小のキノタ小字が散在している。全てが小嵐川の右岸にある。

コノタとは何か。難解地名である。主に語源辞典に依りながら、三説を挙げておきたい。

①コはコウの約で「川」か。ノタはノタ（野田）で、「山間の湿地」をいう。下伊那郡の方言であるという。以上から、コノタとは「川があり、湿地もある山地」をいうか。小嵐川の支流が何本もコノタ小字内を流れている。湿地も多く、そこには大きくは無いが水田もある。

②コはコ（木）で、「樹木の繁ったところ」をいうか。すなわち、コノタとは、「樹木の繁った山間の湿地があるところ」かもしれない。

③コウノタ→コノタと短音化したものか。コウはカミ（神）が転じた語。カミ→カウとウ音便化して、さらにコウと転訛したのであろう。以上からコノタと

は「神の田」すなわちジンデン（神田）であった田んぼがあったか。「神社に附属して、その収穫を神社の祭典や造営にあてるための田地」（国語大辞典）である。不輸租田で、しかも好字ということで、周辺に広がったとも考えられるがどうであろうか。此田の産土社は大野田神社で、コノタ（小野田）小字にある。

全国地図にはコノタ地名は、1ヶ所にだけ中・大字として挙げられており、「此田」の字になっている。もちろん、2.5万分の一の「伊那和田」に載っている。

【小畑】

コバタ。

和田の山原の山地にあり、松島第一配水池がある。

コバタとは何か。国語大辞典に依りながら、二説を挙げる。

①コバ（木場）には「焼畑」の意がある。すなわち、コバタとは「焼畑耕作が行われていた土地」か。今は休耕の状態なのかどうか。

②コバ（木場）には「山から切りだした木を一時集めておく山間のわずかな平地」をいうこともある。タは「場所」を表す接尾語。以上から、コバタとは「山中の材木集積所のある土地」をいうのかもしれない。傍らを女沢が流れている。この谷川を堰き止めて、一挙に流したか。

全国地図には、コバタ地名は27ヶ所に中・大字として記載があり、うち14ヶ所が「小畑」となっている。

【棚ヤ戸】

コヤト。

南和田の十原の遠山川左岸の氾濫原から山地に少し懸かる土地になっている。

コヤトは何を意味するのか。語源辞典によりながら、二説を挙げたい。

①コヤ・トで、コヤはコヤ←コイ←クエ（崩）と転じたもので、「崖地」をいう。ト（戸）は形容詞トシ（利）の語幹で「険しい地形」をいう。以上から、コヤトとは「険しい地形で崩崖のあるところ」を意味するか。

②コ←コウ（川）と転訛した語、ヤト（谷）で、コヤトは「川のある溪谷」をいうか。

国土地理院の2.5万分の一全国地図には、コヤト地名は3ヶ所が中・大字として挙げられている。

【五郎平】

ゴロウヒラであろう。『下伊那地名調査』にはゴロウシとあるが、間違いか。南和田の大町集落の南方の尾根にある。

ゴロウヒラとは何か。二説を挙げておきたい。

①ゴロウは固有名詞で、ゴウロウヒラとは「ゴロウさんの所有する傾斜地」をいうが、焼畑耕作が行われていた所であろうか。

②ゴロウ←ゴロと長音化した語で「大きな石のゴロゴロしている所」（語源辞典）の意か。すなわち、ゴロウヒラとは「大きな石がゴロゴロしている傾斜地」をいうか。

【権現堂】

ゴンゲンドウ。

木澤小道木の遠山川左岸にある。川合地籍になる。川に突き出た尾根の先端部にある。

ゴンゲンドウとは「権現様を祀った御堂のあったところ」を意味する。今はない。対岸の権現山には熊野神社と正八幡神宮がある。熊野権現や八幡大権現が祀られていたのであろう。平安時代中期ごろから、権現称号は普及したが、1868年（明治元年）の神仏分離令以後は、神社で権現号を使うことが禁止された。それでも、各地にゴンゲンは今でも残っている。

全国地図にも、ゴンゲンドウ地名は21ヶ所の中・大字として記載があり、その全てに「権現堂」の字が宛てられている。

【権現山】

ゴンゲンヤマ。

木澤の小道木と川合にあり、遠山川の左右両岸にわたる。

小道木には熊野神社があるので、対岸の川合にある権現山も熊野権現に関わっているのであろう。熊野神社霜月祭の神名帳には「下伊那郡遠山小道木川合両耕地に おんたてはやらせたもふ 熊野神社」（遠山霜月祭 南信濃②）とある。

ゴンゲンドウ地名は全国地図には67ヶ所が挙げられている。

【サイネンボ】

サイネンボ。

木澤の八日市場で、上村川右岸の水量の多い支流に沿っている。

サイネンボとは何を意味するのか。難解地名である。三説を挙げておく。

①サイネンボ←サキ（先）・ネ（尾根）・ノ（助詞）・ボウ（崩崖）と転じたものか。ボウは動詞ボボケルの語幹から「そそけ乱れた様子」すなわち崩壊地形を示すという（語源辞典）。以上からサイネンボとは「側稜の尾根の先端部が崩壊しているところ」を意味するか。

②サイはサ（語調を整える接頭語）・キ（井）で「水のある所」の意、ネンは動詞ネル（練）の連用形が撥音便化した語で「湿地」をいい、ボウは「崩崖」のこと（以上は語源辞典）。従って、サイネンボとは「川の流れている湿地で崩崖のあるところ」をいうか。

③サイネンボは「西念坊」のことであろうか。西念坊とは「世にありふれた凡僧の通称」だという（国語大辞典）。以上から、サイネンボとは「坊さんに関わる土地」をいうことも考えられないことではない。凡僧だということで、何らかの災難にあったお坊さんだったかもしれない。

全国地図には、むろんサイネンボ地名は載っていない。

【坂】

サカ。

和田の池口と漆平沢にある。

サカ（坂）とは、「一方は高く一方は低く、傾斜している道路」（広辞苑）を

いう。

坂はサカイ（境）に由来するという。「坂は上と下という相異なる空間を結ぶ通路であり、その途中は危険な場所とみなされ神仏がまつられた」（民俗大辞典）といい、また「坂は心意的には。異次元の空間をつなぐもので、その中間に位置する崖地は、きわめて曖昧な、しかもおどろおどろしい空間として、人々の目に映じたようである」（民俗地名語彙事典）ともいわれる。ここのサカは地域の人々からどんな目で見られていたのでしょうか。

全国地図には、サカ地名も20ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【サガシ・サガシ畑】

サガシ・サガシバタ。

和田押出の集落や近くの山地にある小さな小字である。

サガシとは何か。国語大辞典に依りながら二説をあげる。

①サガシは形容詞サガシ（険）がそのまま地名になったのであろうか。「平坦でない」の意がある。従って、サガシとは「平坦でない土地」をいうか。

②サガシは動詞サガス（涼）の連用形が名詞化した語で「かき広げる」の意から「土石流が流れたところ」を意味するか。ただ、動詞サガスが中世末から近世にかけて使われていたかどうか。

サガシバタは①「サガシという土地が耕作されて畑になった所」をいうか。それとも、②単に「平坦でない畑」を意味するか。

全国地図には、サガシ地名は9ヶ所にあるが、サガシバタは無い。

【坂平】

サカビラ。和田の池口にあり、サカ小字の上側に接している。

ビラは「傾斜地」だから、サカビラとは「サカ小字の上にある傾斜地」を意味するか。

全国地図には、サカビラ地名は載っていない。

【櫻】

サクラ。

和田山原の女沢左岸の傾斜地にある。

サクラとは何か。語源辞典に依りながら、三説を挙げておく。

①クラは動詞クル（剝）の連用形が名詞化した語で、サは「語調を整える接頭語」か。すなわち、サクラとは「崩崖のあるところ」をいうのであろう。

②サクラはサク（抉）・ラ（場所接尾語）か。サクは動詞サクル（抉）の語幹で「土壌などの崩れやすく脆い状態」をいう。従って、サクラとは「崩れやすい崖のある山地」の意か。

③サクラは文字通り、「多くの桜の木があるところ」かもしれない。

全国地図には、サクラ地名は46ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【桜ウツ】

サクラウツ。

木澤須澤の遠山川右岸の急傾斜地にある、大きな小字。

ウツは「獣の通路」をいう。南信濃村梶谷ではカモシカの通路、愛知県北設楽郡では猪、鹿の通路、三河の山地でも猪の通路をいう（民俗地名語彙事典）。

従って、サクラウツとは「崩壊地を通るイノシシやシカなど獣道のあるところ」をいうのであろう。今も、支流に沿った長い崩壊地が、この小字を貫いている。ここが猟場だったと思われる。

しかし、全国地図には、サクラウツ地名は記載されていない。

【櫻久保・桜久保】

サクラクボ。

木澤の須澤と川合にある。須澤は遠山川右岸に、川合は上村川左岸にある。

サクラクボとは、①「桜の木がある窪地」をいうか、あるいは、②「崩れ地のある窪地」の意であろう。クボは山中にある平地や崩れ地が平らになっているところや単に谷川をさしているものと思われる。

全国地図には、サクラクボ地名は3ヶ所が挙げられている。

【サゝゴマ】

ササゴマ。

木澤須澤の山地にある広い小字。

ササゴマとは何を意味するのだろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ササはササ（細）で「わずか」の意で、ゴマは「山中で木材を一時積み重ねておく所」をいう。水窪の方言だという。すなわち、ササゴマは「あまり広くない一時の貯木場のある所」をいうのだろうか。

②ササはササ（笹）で「イネ科タケ属の植物」をいい、ゴマは「狭い土地」のことか。ササゴマは「笹が生えている傾斜地で狭い平地のある所」をいうのだろうか。そうした狭い平地に家屋があつたり、家屋跡らしいところもある。

全国地図には、サダゴマ地名は見えない。

【サスガ久保】

サスガクボ。

和田の西部山地、南和田との境にある。

サスガクボとは何か。二説を挙げる。

①サスガはサスガ（刺刀）で「猟師が携える山刀」で静岡県磐田郡、愛知県北設楽郡の方言だという（国語大辞典）。従って、サスガクボとは「山刀のように上流部が鋭い谷になっている窪地」をいう。細く尖った谷を山刀に見立てたのであろう。

②サスガはサス（焼畑）・ガ（助詞でノの意）で、サスガクボとは「焼畑耕作が行われている窪地」を意味するか。サスは武蔵から甲州付近で焼畑をいうらしい。この言い方が遠山まで届いているかどうかは不明。

全国地図には、サスガクボ地名は記載されていない。

【サトウシ・佐藤治】

サトウシ・サトウジ。

いずれも南和田の名古山にある。遠山川右岸の名古山の集落の西方山地になる。

サトウシもサトウジも隣り合っていて、同じ由来と思われる。

サは「語調をととのえる接頭語」で、トウシは動詞タフス（倒）の連用形が名詞化した語で「崩壊地形、浸食地形」をいうのであろう（以上は語源辞典）。

従って、サトウシ（ジ）とは「崩崖のある傾斜地」を意味するのであろう。

全国地図には、サトウシ地名もサトジ地名も載っていない。

【沢穴】

サワアナ。

和田の押出の伊ノ木沢が遠山川に流れ込む左岸の二ヶ所にある、小さな小字である。

サワアナとは、字面の通りで、「谷川が削って穴状になっているところ」をいうのであろうか。

全国地図には、サワアナは記載されていない。

【澤カラ】

サワカラ。

木澤の小道木にあり、サワカラ沢左岸の急傾斜地にある。

サワカラとは何か。二説を挙げる。

①「カレを山の崩れた所や崖の意としている。海食崖などに立地するカラには、この意もあろう」（民俗地名語彙事典）という。カラにも「崩崖」の意があるのであれば、サワカラとは「崩崖もある谷川の流域」と解することもできそうだ。

②カラ（柄）には「草木の茎」の意がある。すなわち、サワカラとは「茎のように伸びている谷川のある所」か。深い谷をこのように表現したのかもしれない。

全国地図には、サワカラ地名は記載が無い。

【沢戸】

サワド・サワノト。

サワド小字は和田の池口集落北方の山地にある。

サワドとはサワ（サワ）・ド（処）で「小さな谷川が流れているところ」を意味するものと思われる。

全国地図には、サワド地名は5ヶ所に中・大字として記載されており、うち3ヶ所が「沢戸」になっている。

【沢之戸】

サワノト。

サワノト小字は南和田十原の遠山川左岸の崖地にある。

この場合のトは形容詞トシ（利）の語幹で、「険しい地形」をいう（語源辞典）。

すなわち、サワノトとは「谷川が流れていて、険しい崖になっているところ」をいうのであろうか。このサワは遠山川をいうのか、あるいは支流を指すのかはわからない。

全国地図には、1ヶ所にだけサワノト地名がのっているが、「沢乃渡」の字になっている。

【沢山】

サワヤマ。

南和田の十原にある。集落の南側の遠山川の支流に沿った細長い小字になっている。

サワヤマは「谷川が流れている林地」をいうのであろう。しかし、それだけだろうか、という思いもある。もしかしたら、山入の神事が行われた場所かとも。

サワヤマ地名は、全国地図に10ヶ所が中・大字となっており、うち9ヶ所で「沢山」の字が宛てられている。

【三角畑】

サンカクバタ。

南和田十原の集落から東の方にある小字で、十原配水池がある。

サンカクバタとは字面の通りで、「三角形の形をした畑」をいう。広い面積ではないが、焼畑と思われる。

全国地図には、サンカクバタ地名もサンカクハタ地名も載っていない。

【三角山】

サンカクヤマ。

和田の漆平山、集落から登る山地にある。

サンカクヤマとは、字面の通りで「三角形の形をした山のあるところ」を意味するのであろう。545.8mの標高がある独立峰の斜面にあり、その頂上から外れているが、これが神体山であったかもしれない。そしてサンカクヤマ小字で山の神をおまいりしたのかもしれない。

全国地図には、サンカクヤマ地名は27ヶ所に中・大字として挙げられており、そのすべてに「三角山」の字が宛てられている。

【サントレ】

木澤の上島にあり、上村川に西の山地から流れ込む上沢川右岸にある。

サントレは、サキタレが撥音便化した語であろう。サキは「尾根の先端部」をいい、タレは動詞タル（垂）の連用形が名詞化した語で、崖が緩んで崩れることをいうのであろう。

以上から、サントレとは、「尾根の先端部が緩んで崩れた所」を意味するものと思われる。

現地には大きな崩壊地があるが、この小字発生時に生じた大崩壊であろうか。

全国地図には、サントレ地名は記載されていない。

【シツトイワ・シツト岩】

シツトイワ。

木澤の上村川の左右両岸にあり、多くは川辺にあるが、山地にある小字もある。

シツトイワとは何をいうのであろうか。意外と分かりにくい。二説を挙げておきたい。

①シツトイワはシツ（湿）・ト（処）・イワ（岩）で、シツは「湿った所」の意、トは「場所」を示す接尾語、イワは「大きさが岩と土の間のもの。砂利」（国語大辞典）のこと。従って、シツトイワとは「湿った砂利のある所」か。山地のシツトイワはこれか。しかし、これで川辺の地名になり得るのかどうか、疑問もある。

②シツト←シット←シトと転じたもので、強調するために促音便化したか。シトは動詞シトム（浸）の語幹で「水に浸かる地」（語源辞典）をいう。以上から、シツトイワとは「水に浸かる岩のある所」。いつもは川から離れているが、少し水量が増すと水に浸かってしまう岩があって、水量をはかる目安にでもなっていたのであろうか。

全国地図には、シツトワ地名は無い。

【シツトワ】

木澤の小道木にある。遠山川右岸の氾濫原から山地にまでかなり入り込んだ広い小字になっている。

シツトワはシツトイワの省略語と思われる。

もちろん全校地図にはシツトワ地名も記載は無い。

【漆平島・漆平嶋・漆平嶋】

シッペイジマ。

和田に二ヶ所、遠山川左岸の台地上と小池沢上流部にある。

シッペイジマとは何をいうのであろうか。シッペイジマはシチヘイジマの促音便化した語であろう。ではシチヘイジマとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①シチはフシ（節）と類義で「節くれ立った所。高所」をいい、ヘイ（平）は「斜面」か「平坦地」のこと。ジマ（島）は「一区画の土地」をいう。以上から、シチヘイジマとは「台地にある緩傾斜地」をいうか。

②シチはヒチ（漬）の転じた語。すなわち、シチヘイジマとは「水に漬かったことのある緩傾斜地」を意味するか。小池沢のシッペイジマについては、成立しそうな解釈である。

全国地図には、シッペイジマ地名は記載されていない。

【柴休戸】

シバヤスンド。

和田の急傾斜地の多い西部山地にある。

シバヤスンドとは何を意味するのか。三説を挙げたい。

①シバは薪にするような「小さな雑木」（国語大辞典）をいい、ヤスンドはヤスミドが撥音便化した語で、ヤ（湿地）・スミ（奥）・ド（狭くなった所）から「湿地になっている奥地の狭くなった所」（語源辞典）をいうのであろうか。

②ヤスンドはヤスミ（休）・ド（処）で、シバヤスンドとは「雑木を切るなど山

作業をして、休憩する場があったところ」か。作業は柴山での焼畑耕作であったかもしれない。小さな谷川があり、飲み水も十分にあった休憩地であったか。
③ヤスンド←ヤスリドと撥音便化したものかもしれない。シバは動詞シバク（打）の語幹で「崩崖」（語源辞典）の意で、ヤスリ（鑿）・ド（処）は「鑿で削られたような所」か。以上から、シバヤスンドとは「ヤスリで削られたような崩崖のある所」を意味するか。

全国地図には、シバヤスンド地名は載っていない。

【島川原】

シマガアラ。

八重河内の小嵐川左岸にある小さな小字で田んぼになっている。

シマは「ある一区画をなした土地」（国語大辞典）だから、シマガアラとは「（小嵐川の）川原で、周りと違った土地」をいう。この場合は、現在とそれほど変化していなかったとすれば、周辺が荒地や畑なのに、このシマは田んぼになっていることを指しているのであろうか。

全国地図にはシマガアラ地名は載っていないが、シマガワラは1ヶ所だけだ
が中・大字として挙げられており、「島川原」になっている。

【島口・鳶口】

シマクチ。

和田の池口と大島にある。池口川左岸と遠山川右岸になる。

シマクチとは、字面の通り、「川の中にある島へ繋がっているところ」をいう
のであろうか。

全国地図には、シマクチ地名は載っていないが、シマグチ（島口）地名は1
ヶ所にだけある。

【島古】

シマゴ。

和田尾乃島の遠山川左岸氾濫原にある。

シマゴとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①シマゴはシマ（島）・ゴ（処）で、「川の中の島だった所」をいうか。ゴはコ
で「場所」を示す。

②ゴ←コ（戸）と濁音化した語で「家屋」のこと。すなわち、シマゴとは「川
辺で家屋があったところ」をいうのかもしれない。

全国地図には、シマゴ地名は載っていない。

【清水】

シミズ。

南和田十原の遠山川左岸の川原と十原集落台地との間の傾斜地にある。

シミズとは「自然湧水のあるところ」をいう。旅人が利用する場所ではない
ので、村人たちがここまで飲料水を求めて下ってきたか。

全国地図にはシミズ地名が236ヶ所に中・大字として挙げられている。

【清水畑】

シミズバタ。

和田の押出扇状地の小さな小字群の中にある。

シミズバタとは、①「清水畑」で、「自然湧水のある畑地」をいうか、あるいは②「清水端」で「自然湧水のある傍らの土地」をいうか。

シミズバタ地名は全国地図に3ヶ所が挙げられており、2ヶ所が「清水端」で1ヶ所が「清水畑」となっている。

【下市場】

シモイチバ。

和田新町の八重河内川が遠山川に合流する地点にある。

シモイチバとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①シモイチバとは「下流の方にある市が立った場所」をいうのであろう。川原だから、山人たちと里人立ちの間に、物々交換などがなされたか、あるいは商人が仲立して山の生産物が買い取られていったか。

②イチバーイツ（齋）・バ（場）と転訛したか。ウ段→イ段の母韻交替は「かなり見られる」変化であるという（国語学大辞典）。すなわち、シモイチバとは、「低地にある神を祀った場所」をいうのであろうか。この小字内には諏訪神社が祀られている。

国土地理院の2.5万分の一全国地図には、シモイチバ地名は9ヶ所に中・大字として挙げられており、そのすべてに「下市場」の字が宛てられている。

【下坂】

シモサカ。

和田山原にあり、遠山川右岸の氾濫原に落ち込む急傾斜地になっている。

シモサカとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げておく。

①シモサカとは字面の通りで、「低地にある急傾斜地」をいうか。急傾斜地といえば、大きな川から離れた高地には多いが、下の方にある傾斜地は目立ったのかもしれない。

②シモ←シボ（皺）と転じた語で「縮んだような地形」をいう。勾配のきつい傾斜地のことを表現したのであろうか。マ行⇔バ行の子音交替は「きわめて多い」（国語学大辞典）という。以上から、シモサカとは「縮んだように見える急傾斜地」を指すのだろうか。

全国地図にはシモサカ（下坂）地名は1ヶ所だけだが、中・大字として記載がある。

【下屋敷】

シモヤシキ。

南和田の底稲にあるが、遠山川右岸の尾形戸の奥地になる。側稜の尾根もあり、深くはないが谷もある。

シモヤシキとは何か。よく分からない。この山中に屋敷があるとは考えられないからである。それでも語源辞典に依りながら、二説を挙げておきたい。

①シモ（下）とは「下流の方」をいう。カミには底稲があり、そこには明治頃

には作り小屋があったので、地名発生時には焼畑が主だったと思われるが、耕作されていた地域だったのであろう。その底稻からみて「下流の方」と表現したものか。ヤはヤツの一字音化で「小さな谷地形」をいい、シキは動詞シク（敷）の連用形で「平らに広げる」意から「台地」のことか。以上から、シモヤシキとは「下流の方にある小さな谷や台地があるところ」をいうのであろうか。そして「屋敷」という好字を宛てたのであろう。

②シモ←シボ（皺）と転訛したもので、前に触れたように、「縮んだような地形」をいう。ヤはイハ（岩）の約、シキは動詞シク（頻）の連用形が名詞化したもので「山丘の重畳とした状態」をいう。以上から、シモヤシキとは「急傾斜地があり、岩も出ており、尾根が段丘のようにになっている山地」をいうか。

全国地図には、シモヤシキ地名が中・大字として27ヶ所に挙げられており、その全てに「下屋敷」の字が宛てられている。

【下和田】

シモワダ。

八重河内の下市場や和田の押出などにある。八重河内川の左岸に小さなシモワダ小字が二ヶ所にあるが、そこには尾乃島・正八幡神社が祀られている。旧八重河内村の村社で、もともと八重河内川上流にあったがここまで流れ着いたものだという（遠山谷南部の民俗）。

もう1ヶ所、八重河内川右岸に広大なシモワダ小字がある。

ワダ（曲）は「形が曲がりくねっていること」をいう（国語大辞典）。

従って、シモワダとは「（遠山川の）下流側にある曲がりくねった川端のある土地」をいうのであろう。

全国地図には、シモワダ地名は21ヶ所に挙げられており、その全てが「下和田」となっている。

【下和田前】

シモワダマエ。

八重河内の中字「下和田」にあり、シモワダ小字の前の見下ろす所に位置している。

シモワダマエとは「シモワダ小字の前側にある土地」をいう。

全校地図には、シモワダマエ地名は載っていない。

【シヤシウ】

シヤシュウ。

和田の池口にあり、池口川左岸の山地で面積の広い小字となっている。

シヤシュウとは何か。よく分からない地名だが、候補を二つあげておきたい。

①シヤシュウ←シワ（皺）・ス（州）と転じた語で、「皺がよったような砂地」をいうか。一旦は堰き止められた池口川の堰が切れたあとの状態をいうのだろうか。

②シヤシュウ←シヤシュウと転訛したか。シヤは動詞シャル（曝）の語幹で「崩壊地形」をいい、シュは動詞シュウケル（じめじめする）の語幹で「湿地」の

意。従って、シヤシュウとは「崩崖のある湿地のある土地」を意味するか。

全国地図にはシヤシュウ地名もシヤシウ地名も載っていない。

【正善寺】

ショウゼンジ。

和田の新町にある。

ショウゼンジとは、もちろん、「正善寺のあったところ」をいう。

正善寺は「竜淵寺第四世塞天建充が天正二年（1574）三月に創立したと伝えられている」（南信濃村史遠山）とある。明治二年に廃寺になったという。

【城山】

ジョウノヤマ。

南和田の大町にある。

ジョウノヤマとは「砦のあった所」と思われるが、はっきりしたことはわからない。

全国地図には、ジョウノヤマ地名は4ヶ所に中・大字として挙げられている。

【白土】

シラスナ。

和田の山原と南和田の名古山にあるが、この二ヶ所はほぼ隣り合っている。遠山川右岸の山地である。

シラスナとは「白い砂地のある土地」をいうのであろう。領家帯の花崗岩類があるところである。

全国地図にはシラスナ地名は、2ヶ所に中・大字として記載があるが、いずれもなぜか、「白妙」の字が宛てられている。

【城】

シロ。

南和田の名古山にある。遠山川の右岸にあり、丘陵の先端が遠山川に突き出して川を反対側に押し出している。砦を造るには最適の場所であろうか。長山城址とあり、正一位稻荷神社が祀られている。稻荷神社となる前には山の神が祀られていたか。

シロとは「砦のあった場所」をいう。

全国地図には、シロ地名は13ヶ所に中・大字として記載があり、そのうち12ヶ所が「城」となっている。

【城下】

シロシタ。

南和田の十原にある。遠山川左岸にあり、十原集落のある台地の先端が遠山川に突き出して川を北東側に押しやっている。そこに城山小字があり、城神社も祀られている。その先端部付近に二ヶ所、シロシタ小字がある。

シロシタとは、もちろん字面の通り、「砦のあったところの麓の土地」を意味する。

国土地理院の2.5万分の一全国地図には、シロシタ地名は中・大字として

14ヶ所に記載されており、うち13ヶ所が「城下」となっている。

【城畑】

シロバタ。

和田の大島にあり、一部は盛山の山頂部に懸かっている。

シロバタとは何か。三説を挙げる。

①シロバタとは、文字通りで、「砦のあった所の焼畑耕作地」をいうか。盛山に砦があったのかどうかは不明。

②シロバタはシロ（白）・バタ（畑）で「白い砂地の焼畑耕作地」をいうのであるうか。

③シロ（城）・バタ（端）で、「城址の傍らにある土地」を意味するか。

全国地図には、シロバタ地名の記載は無い。

【城山】

シロヤマ。

南和田の十原にある。

先にシロシタ小字のところで触れたシロヤマ小字である。

ここには「遠山土佐守景直の弟景忠の館である十原館があったとされる」（遠山谷南部の民俗）という。

シロヤマとは「砦のあった場所」を意味する。

全国地図には、シロヤマ地名は中・大字として223ヶ所が挙げられており、うち218ヶ所が「城山」となっている。

【白山】

シロヤマ。南和田の名古山の集落にあり、そこには白山神社が祀られている。

白山は「古来シラヤマと呼びならわされてきたと思われる。しかし藩政期に加賀藩が神社名をシラヤマ、山名をハクサンと読むことに定めて以来、ハクサンの呼称が慣例化している」（修験道辞典）という。遠山では、多分、修験者によってだと思われるが、白山信仰がもたらされたときには、シロヤマであったと思われる。近世ではなく、もっと以前の中世である。それ以来、この地では、シロヤマと呼んできたのであろう。

シロヤマとは「白山神社が祀られている土地」を意味する。

【新畑】

シンバタ。

和田の押出扇状地の最上端にある。

シンバタとは字面とおりで、「新たにつくられた常畑」をいうのであろう。土石流にあった後で、手を入れて畑にした、その喜びが伝わってくるような気がする。

シンバタ地名は、全国地図には、中・大字として、11ヶ所が挙げられており、その全てに「新畑」の字が宛てられている。

【シンビラ・新平】

シンビラ。

和田の池口と大島にあるが、いずれも池口川右岸になる。

シンビラとは、「表層が流れて、新しい地肌が出てきた傾斜地」を意味するものと思われる。享保三年（1718）の地震の後のことであろうか、地震で崩落した傾斜地の後を指しているのではないだろうか。

全国地図には、シンビラ地名もシンヒラ地名も記載されていない。

【新町】

シンマチ。

和田の新町である。

シンマチとは「新しくできた町」をいうのであろう。

享保三年（1718）の地震の後で新しく造られた町か。

全国地図には、シンマチ地名は中・大字として、358ヶ所にも挙げられている。うち351ヶ所が「新町」になっている。

【助五郎】

スケゴロウ。

遠山川の右岸にあり、柳木瀬沢の右岸で信玄滝の上流側になっている。

スケゴロウとは何を意味しているのか、二説を挙げる。

①スケは動詞スケル（透）の連用形が名詞化した語で「谷間」をいい、ゴロウはゴロが長音化したもので「大きな石のごろごろしている所」をいう（以上は語源辞典）。以上から、スケゴロウは「大きな石がごろごろしている谷のあるところ」を意味しているか。

②可能性は小さいが、スケゴロウは固有名詞か。であれば、スケゴロウとは「助五郎さん所有の土地」となる。焼畑があったか。隣に、固有名詞と思われやすい「佐藤治」小字があるので、引っ張られたか。

スケゴロウ地名は、全国地図には載っていない。

【ス沢・須沢】

スザワ。

木澤の遠山川の左右両岸に散在している。

スザワとは何か。

ス（州）は「押し流されて堆積した土砂」をいう。従って、スザワとは「土砂を押し流す谷川」をいうのであろう。

急傾斜地を流れる遠山川の支流が何本もあり、遠山川に中洲が生まれたり消えたりすることを指していると思われる。支流の上流側でも、傾斜が緩いところで土砂の堆積がみられたのであろう。

全国地図にはスザワ地名が6ヶ所にあり、うち4ヶ所が「須沢」となっており、スサワ地名も4ヶ所で全てが「須沢」となっている。

【須沢山】

スザワヤマ。

遠山川右岸の須沢集落周辺の麓付近に二ヶ所ある。

スザワヤマとは「須沢にある林地」をいうが、この地では山の神が祀られる

場であったかもしれない。

スザワヤマ地名も、スサワヤマ地名も、全校地図には無い。

【スザマ】

遠山川左岸に二ヶ所あり、「須沢」小字に接している。

スザマのマはマ（間）ではないかと思ったことがあった。それはスザマとは「スザワ小字の間にある土地」ではないかと考えたことによる。しかし、そうではないことがはっきりした。

スザマ←スサバ←スザワ（須澤）と転訛したらしいことがわかってきた。濁音と清音が相互に交替することは地名には多い。だから、スザワ⇄スサワの変化は一般的なもの。ワ=ハ、これも書き言葉と話し言葉を置き換えているだけだから、戦前には当然視されていた。

問題はバ→マの転訛であるが、このバ行⇄マ行の子音交替は「きわめて多い」ということがわかった（国語学大辞典）。

以上から、スザマとはスザワ（須澤）から生まれてきた小字であると判断することができた。土地を分けて与えるときに少しだけ地名を変えたのであろうか。漢字名を仮名にしたり、読みが同じ漢字に変えたり、あるいはその逆の書き換えもあったと思われる。

当然のことながら、全国地図には、スザマ地名もスサマ地名も載ってはいない。

【スズミ戸】

スズミド。

遠山川右岸を流れる三ツ沢川に合流する支流の流域にある。

スズミドとは何をいうのか。主に語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①スズミは「稲積形の山」をいう。「稲積」をいう東海地方の方言だという。ドはト（処）の濁音化した語。以上から、スズミドとは「稲積形の山が近くにある所」をいうか。稲積型の円錐形の山はスズミド小字と少し離れた所にあるが、その山の形は離れた場所でないか確認はできないからであろうか。

②スズ（篠）・ミ（水）・ド（合流点）であろうか。スズは「すずだけ」のことで長野県飯田付近では「根まがり竹」のこと（国語大辞典）というがどうであろうか。ドは川音の擬音語で、ここでは三ツ沢川に支流が流れ落ちている所をいうか。以上から、スズミドとは「篠竹の茂っていて、谷川が合流している所」を意味するか。

全国地図には、スズミド地名もススミド地名も載っていない。

【関鶴山】

セキヤドヤマ。長野県町村字地名大鑑はセキツルヤマとなっている。

南和田大町の遠山川左岸の川辺にある。

セキヤドヤマとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①セキはセキ（堰）で「木材を流し下すためなどに川の水を一時せきとめる場所」。ヤドはヤド（宿）で「一時的の泊まる家」で、山は「林地」をいうか。以

上から、セキヤドヤマとは「材木流しをするための堰を設置した場所で、作業者が泊まった宿もある林地」をいうのであろうか。筏に組める天竜川まで流すのに、数ヶ所の堰を造ったという（遠山谷南部の民俗）。

②ヤドはヤトが濁音化した語で「低湿地」をいう（語源辞典）。すなわち、セキヤドヤマとは「木材を流す堰があつた低湿地もある林地」を意味するか。

もし、セキツルヤマであれば、ツルには①ツル（蔓）の意と、②「水路のある低地」の意味もあるので、

①セキツルヤマとは「堰を塞ぐ蔓などを集めた山地」をいうか、あるいは

②「遠山川の分流があり、堰を造った場所である林地」をいうのかもしれない。

全校地図には、セキヤドヤマ地名も、セキツルヤマ地名も記載されていない。

【セト・瀬戸・セド】

セト・セド。

セトもセドも由来は同じ。セト⇔セド と変化しても、意味することは変わらない。

南和田の名古山、八重河内、和田の新町・漆平島・大島・押出・新町などにある。

セト（瀬戸）は、本来は「川の瀬の幅が狭くなった所」（国語大辞典）を意味するものと思われるが、南信濃のセト小字をみると、①急流であること、②兩岸が急峻な崖であること、この二つを満たしている場所のようにみえる。すなわち、南信濃の川であれば、その川辺の多くがセトと名づけられても不思議ではないような気がする。

セトは「流が急できつい崖になっている所」を意味するのであろう。

全国地図には、セト地名は91ヶ所、セド地名は10ヶ所に挙げられている。

【瀬戸澤】

セトザワ。

南和田の十原、遠山川左岸の曲流点にある。対岸に突きだしている岬である。

ここでセトザワとは何を意味するのか。ザワはサワと同じで、サワといえは谷川のことになるが、セトの語には連なりにくいように思える。そこで、次の二説を挙げておきたい。これも語源辞典による。

①サワは動詞サハ（騒）で、「水音などによる擬音」をいうか。従って、セトザワとは「崖が高く急流の瀬音が響く所」をいうのかもしれない。

②サワは動詞サハル（障）の語幹で「(交通などの) 障害となる所」の意か。すなわち、セトザワとは「流が激しく、岸壁も陰しいので、通行が容易でない場所」をいうのだろうか。

それでも、全国地図には、セトザワ地名は2ヶ所に中・大字として記載があり、いずれも「瀬戸沢」となっている。

【セノコシ・瀬ノコシ】

セノコシ。

いずれも八重河内にある小字。

「瀬ノコシ」小字は小嵐川が八重河内川に合流する手前の右岸にあり、「セノコシ」小字はその奥の側稜にある。由来については、二つを分けて考えたい。

「セノコシ」は、セ（背）・ノ（助詞）・コシ（越）で、「山の側稜を越える土地」を意味するか。セ（背）は「山の背」のこと（国語大辞典）。コシは動詞コス（越）の連用形が名詞化した語（語源辞典）。

「瀬ノコシ」は、セ（瀬）・ノ（助詞）・コシ（腰）で、「川辺の土地」をいう。セは「川の流れ」をいい、コシは「付近」を意味する（国語大辞典）。

全国地図には、セノコシ地名は記載が無い。

【底稲】

ソコイネ。

南和田西部の奥地にある緩傾斜地で出作り小屋が明治時代にはあったという。

ソコイネとは何をいうのであろうか。難解地名である。二説を挙げておきたい。

①ソコには「奥深いところ」の意がある（国語大辞典）。イネは陸稲か。すなわち、ソコイネとは「奥深い山地で陸稲を栽培している土地」をいうのであろうか。陸稲は定畑で栽培されていたというが、小字名が発生したときにはどうであったか、という疑問はある。

②ソコイ（底方）には「はて。きわみ」の意味があり、ネはネ（根）で「ふもと。すそ」をいう（以上は国語大辞典）。以上から、ソコイネとは、「もつとも奥地の尾根の麓にある土地」を意味するか。最奥地の尾根は伊那山脈を指すのであろう。

全国地図には、ソコイネ地名は1ヶ所だけ記載があり、「底稲」になっている。もちろん、それは2.5万分の一の「伊那和田」地図である。

【大明池】

ダイミョウチか。長野県町村字地名大鑑には、ダイミョウチ（大明地）となっている。あるいは、ダイミョウイケか？

和田の大島にある。集落の台地の東側傾斜地にある。

ダイミョウチとは何を表しているのであろうか。よく分からない地名。

ダイミョウには「大明神」の意もある（語源辞典）。ダイミョウジンの下略だという。このことが遠山でも成立するとすれば、ダイミョウチとは「大明神に関わる土地」を意味することになる。あるいは、ダイミョウチ←ダイミョウジン という転訛も考えられる。

大明神に関わる地といえ、大明神が祀られているか、あるいはかつて祀られていた場所をいうのであろう。それらしい所はみえないが、すぐ近くに大島観音堂がある。国土地理院の地図には「十一面観音」と表示されている場所である。

遠山霜月祭で読み上げられる神名帳の「村の中の神（大島）」には「池大明神」が挙げられている。だから、大島地区にも池大明神が祀られていたと思われるが、現在の大島観音堂には池大明神が祀られているとは聞かない。

疑問の多い小字名であるが、これ以上は追求できないでいる。

全国地図には、ダイミョウチ地名は1ヶ所に中・大字として挙げられているが、ダイミョウイケ地名は無い。

【平畑】

タイラハタ。

木澤の須澤にあり、遠山川左岸で集落の対岸になる。

タイラハタとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①タイラは「山中にある平らな所」のこと。ハタは「焼畑」であろう。すなわち、タイラハタとは「平らな所もある山中の焼畑耕作地」をいうか。

②ハタは動詞ハタク（叩）の語幹で、「崩壊地」の意もある。従って、タイラハタとは、「平らな所もある山中の崩壊地」を意味するか。

全国地図には、タイラハタ地名はないが、タイラバタ地名は1ヶ所ある。

【高平】

タカツタイラ。

和田の新町にある。

タカツタイラとはタカ（高）・ツ（助詞ノ）・タイラ（平）で（語源辞典）、「平らな少し高い所」をいうか。新町の集落地の一部かかる緩傾斜地になっているが、平らな部分に力点をおいて、このように表現したのであろうか。

全国地図には、タカツタイラ地名は記載されていない。

【鷹ノス】

タカノス。

木澤小道木の遠山川左岸の山地にある。

タカノスとは何をいうのであろうか。二説を挙げる。

①タカノスとは「鷹狩りが行われたところ」をいうか。「わが国では、古くから鷹狩りが行われ、そのため藩によって狩場にあてられる山々が保護され、この種の山は”御巢鷹山”などと呼ばれ各地にあった」（民俗地名語彙事典）という。ここでも鷹狩りが行われたのであろうか。

②タカノスはタカ（高）・ノ（助詞）・ス（州）で、スは「押し流されて堆積した土砂」の意（語源辞典）。すなわち、タカノスとは「（川辺ではなくて）押し流された土砂が堆積した高所」を意味するか。

全国地図には、タカノス地名が58ヶ所に中・大字として挙げられている。

【タカマチ・高町】

タカマチ。

和田の池口と南和田の名古山の山地にある。

マチはマチ（待）で、「昔の狩言葉。高い木の股に横木を結びつけ、その上において、シカなどが下にくるのを待って射ること」（国語大辞典）という意がある。

従って、タカマチとは「高所にあつて、獣の通り道で獲物と待つ場所があるところ」を意味するのであろう。愛知県や三重県では方言になっているという。

獲物となる獣は、猪や鹿だったと思われる。

全国地図には、タカマチ地名が10ヶ所中・大字として記載されており、その全てに「高町」の字が宛てられている。

【高町平】

タカマチダイラ・タカマチタイラ。

和田の池口と漆平島の二ヶ所にあるが、漆平島の方は地図上で確認できていない。池口のタカマチタイラ小字は池口川の南方の山地にある。

ダイラはタイラと同じで、「山中にある平らな所」（国語大辞典）である。静岡県磐田郡の方言だという。タカマチは前述のように「獣の通り道」であろう。

以上から、タカマチダイラとは「獣の通り道で猟師が獲物を待つ場所がある、山中の比較的平らな所」を意味するものと思われる。

タカマチダイラ地名もタカマチタイラ地名も、全国地図にはない。

【高町下】

タカマチシタ。

和田池口の「高町平」小字に隣接して二ヶ所にある。

タカマチシタとは「獣が通る山地の麓」をいうのであろう。

全国地図には、タカマチシタ地名も載っていない。

【滝口】

タキクチ。

南和田の名古山、信玄滝の右岸にある。

タキクチともタキグチともいう。タキクチとは「滝の流れ落ちる所」（国語大辞典）をいう。

それだけでなく「山岳信仰の中では滝の周辺に神をまつり、穢れを清める行事として滝行や水行といわれる荒行が行われ、滝が神聖な場として崇められてきた」（民俗大辞典）のである。不動明王なども祀られているのであろう。

全国地図には、タキクチ地名は載っていないが、タキグチ地名は5ヶ所中・大字として記載があり、その全てが「滝口」となっている。

【タキ久保】

タキクボ。

これも南和田の名古山にある。信玄滝のある柳木瀬沢の上流の周辺である。柳木瀬沢の支流が二本あり、いずれも深い谷になっている。

タキクボとは、字面の通りで、「滝になっている谷川が流れている窪地」を意味するのであろう。

タキクボ地名は、全国地図に3ヶ所中・大字として、記載がある。

「なお、タキ系統の地名はおよそ四、五百年から五、六百年を周期として、災害が起こっているようである」（民俗地名語彙事典）という。

【瀧の花】

タキノハナ。

木澤の中字「木沢」と八日市場にある。

二ヶ所とも、信玄滝に見るような明瞭な滝地形は地形図から判断することは

できないが、上流部には小規模な滝があるのであろう。木沢は美園沢の上流にそれらしい急傾斜地がある。八日市場を流れる上村川支流の上流にもあると思われるが、地形図が空白になっているので断定はできない。

タキノハナとは何か。ハナはハナ（鼻）で「側稜の先端部」をいうものと思われる。

以上から、タキノハナとは「高い所に滝のある側稜の先端部にある土地」を意味するのであろう。

全国地地図には、タキノハナ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「滝」と「鼻」の字が宛てられている。

【タケサワ】

南和田の名古山にある広い小字になっている。名古山集落地の西隣にある。

タケは「高い山」ではあるまい。集落の間近にあるからである。ではタケとは何をいうのか。「傾斜地、崖、地滑りの意で、破碎礫のことをタケという所もある」（民俗地名語彙事典）という。このタケではないだろうか。崩れやすい所へ、昔は竹を植える習慣があったという。子どもの頃、そういう話を聞いたことがある。

以上から、タケサワとは「崩崖のある山地で谷川が流れているところ」を意味するものと思われる。

国土地理院の2.5万分の1の全国地図には、タケサワ地名が2ヶ所に中・大字として挙げられており、「岳沢」と「猛沢」の字が宛てられている。

【竹下】

タケシタ。

これも南和田の名古山にある。遠山川右岸の岸壁になっている。

ここのタケも「急傾斜地。崩崖」を意味する。このタケシタ小字と名古山集落地の間には大きな崩壊地がある。

従って、タケシタとは「崩壊地の下方の土地」をいう。

全国地図には、タケシタ地名は9ヶ所に中・大字として挙げられており、うち8ヶ所が「竹下」となっている。

【タコツ下】

タコツシタ。

和田大島の亀久保集落地の北隣の山地にある。同じ大島にタコツ小字もあるが、公図で探すことができず、結局は地形図上に落とすことができなかった。

タコツシタとは何をいうのだろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。
①タ（接頭語）・コツ（山の頂上）・シタ（下）で、「尾根の頂上部分のすぐ下方の土地」をいうか。コツは「山などの頂上」の意であるが、タコツと思われる所は、尾根筋の緩傾斜地から急傾斜地に下る場所となっているので、上記の表現とした。

②タコ（高）・ツ（場所接尾語）・シタ（下）で、「湧水のある高所の下方の土地」をいうか。

全国地図にはタコツ地名は無い。

【忠じろ】

チュウジロ。長野縣町村字地名大鑑にはチュウジロウ（忠治郎）となっている。

木澤の中根の遠山川左岸にあつて、一つのスザワ小字を囲んでいる。

チュウジロとは何か。主に語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①チュウ←チブ←ツブ（潰）と転じたもので「崩壊地形、浸食地形」をいい、ジロはズリ（傾斜地）の転か。従つて、チュウジロとは「崩崖のある傾斜地」をいうか。同義重複になってしまうがどうであろうか。

②ジロはシロの濁音化した語で、「赤石山地では緩やかな傾斜地」をいう。すなわち、チュウジロとは「崩崖のある緩傾斜地」を意味するか。

チュウジロ地名は全国地図には記載されていない。

【立山】

タチャマ。

南和田名古山の遠山川右岸にあり、宮の前橋が架かっている。

タチは動詞タツ（断）の連用形が名詞化した語で、「断ち切られたようなお崖となっている所」を意味するのであろう。遠山川が直接にぶつかる岸にあり、しかも狭い所に二本の支流が湧き出ており、湧水も多いところと思われる。

あるいは、ここが立山信仰に関わるような修験の修行地であったかもしれない。現在はタテヤマと呼ぶことが多いが、タチャマという古称を使っていることも気になる。

全国地図には、タチャマ地名は中・大字として11ヶ所に挙げられており、うち10ヶ所が「立山」となっているが、タテヤマ地名は52ヶ所にも及ぶ。ただし「立山」となっているのは18ヶ所と多くはない。

【樽上】

タルウエ。

木澤の遠山川右岸にあり、タキノハナ小字の上流側になる。

タルウエとは「滝の上流側の土地」を意味する。下流側にある小字タキノハナとも整合する。

タルはタル（垂）で「たるみ」（垂水）の略で「滝」をいう。長野県飯田付近や静岡県阿倍郡などの方言ともいう（以上は国語大辞典）。

全国地図には、タルウエ地名は載っていない。

【チクジン】

和田の夜川瀬集落西方の山地に、広いチクジン小字一つと近くに小さなのが一つある。

ジンは「小平地」を指すという（民俗地名語彙事典）。チクはツキが転じた語といわれている（語源辞典）。

では、チクジンとは何を意味するのか。主に語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①チクから転じたツキには「高所」の意がある。動詞ツク（突）の連用形が名詞化した語であるという。すなわち、チクジンとは「高い所にある小平地」をいうのであろうか。尾根筋にも峯があって小平地になっている。

②ツキは動詞ツク（付）の連用形で「二つのものがぴったり一つになった地形」をいうこともあるらしい。この解釈に従えば、チクジンとは「二本の尾根が合流している分岐点の小平地」を意味するかもしれない。小字図では空白部分になるのではっきりしないが、

2. 5万分の一の地形図でみると、そこは標高 878mの峯になっている。

しかし、全国地図には、チクジン地名もチクシン地名も載っていない。

【茶畑】

チャバタ。

和田の押出にある小さな小字。

チャバタとは「お茶が栽培されていた畑」である。遠山のお茶については天正十七年(1589)の文書にあるので(南信濃村史遠山)、当然ながら、この小字地名発生時には遠山ではお茶が生産されていたのであろう。静岡でも天竜川沿いの山岳地帯に良質なお茶があるという。日光の直射時間が短い、という良質茶の条件にかなっているためだろうか。

全国地図には、チャバタ地名は1ヶ所にだけ記載があり、「茶畑」となっている。

【月ノ島】

ツキノシマ。

南和田の名古山にあり、遠山川右岸から川に突き出て半島のようになっている。

「長野県下伊那郡の遠山川流域地方では、田地の連なった所をシマといい……」(民俗地名語彙事典)とあるが、ここには田んぼはないようだ。

ツキノシマとは何か。ツキはツク（突）の連用形から「高所」をいい、シマは「半島など島状の地」(以上は語源辞典)のこと。

従って、ツキノシマとは「半島状に川に囲まれた丘陵地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ツキノシマ地名は1ヶ所、ツキシマ地名は4ヶ所にある。

【津々み・ツツみ・堤】

ツツミ。

和田の尾乃島と南和田の十原にあるが、互いに隣接している。

ツツミとは何か。はっきりした地名であるが、二説を挙げておきたい。

①ツツミといえば、一般的には、「池などの岸に沿って、水があふれないように土を高く築いたもの」(国語大辞典)である。「溜池」としてもいい。しかし、遠山のツツミには、現在は水が溜められていないツツミ小字もある。地名発生時には水が波だっていた所もあったということであろうか。

②ツツミは動詞ツツム（包）の連用形が名詞化した語であるから、「(山などに

よって)周囲をとり囲まれた地」(語源辞典)の意もある。従って、ツツミには「周囲を山で囲まれた平地」をいうこともありそうだ。水が溜められていないツツミ小字の中に、該当するものもあると思われる。

【椿ウツ】

ツバキウツ。

南和田の飯島、遠山川右岸にある。対岸は天龍村折立になっている。

ウツは既にサクラウツ小字で触れたように「獣の通り道で、猟師が獣を待ち受けるところ」をいうのであろう。

従って、ツバキウツとは「椿が自生している獣の狩場」を意味するものと思われる。

なお、語源辞典には、ツバキを動詞ツバクの連用形であるとして、「崩壊地形」の意に解する説を挙げているが、ツバクがはっきりしないので、ここでは採りあげないことにする。

全国地図には、ツバキウツ地名は載っていない。

【出山】

デヤマ。

和田の新町にあり、遠山中学校から和田小学校さらに龍淵寺近くまで繋がる長い小字になっている。

デは動詞イヅ(出)の連用形イデの上略で、「突出した所」をいう(語源辞典)。東側の山が崩れて埋まった土地らしい。

以上からデヤマとは「山が押し出してきた所」を意味するのであろう。享保三年(1718)の大地震の時だという(針間道夫さん)。

全国地図には、デヤマ地名は1ヶ所にだけ記載があり、「出山」の字が宛てられている。

【寺下】

テラシタ。

和田の池口にある。

テラシタとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①テラといえば、「寺院」になるが、その形跡はここにはない。しかし、山崩れのあとで消滅してしまったが、わずかに地名に残ったと考えられないこともない。可能性は薄いだが、テラシタとは「墓地かお寺があった所の下方の土地」として挙げておきたい。

②テラはタヒラ(平)の転訛した語で、「緩傾斜地」をいう。すなわち、「緩傾斜地の下方にある土地」を意味するか。

全国地図にはテラシタ地名は26ヶ所に中・大字として挙げられており、うち25ヶ所が「寺下」となっている。

【寺平】

テラビラ。

この小字も和田の池口にあり、先のテラシタ小字に隣接する。

テラビラの由来についても、二説を挙げておきたい。

①ビラには「山の中腹」の意がある。テラダイラとは「お寺か墓地のあった山腹」をいうか。

②テラには、タラの転で「たわんだ地形」をいうこともある（語源辞典）ので、テラビラとは「たわんだような地形になっている山腹」を意味するか。

全国地図には、テラビラ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「寺平」の字が宛てられている。

【寺中】

テラナカ。

和田の新町の龍淵寺があるところ。

ナカ（中）は「一定の境のある物の内部」（国語大辞典）をいうので、テラナカとは「（龍淵寺の）境内がある土地」を意味するのであろう。

全国地図には、テラナカ地名は載っていない。

【寺ノ上】

テラノウエ。

これも和田新町の龍淵寺の上手にある小字。従って、テラノウエとは「（龍淵寺の）上の方にある土地」を意味する。

全国地図にはテラノウエ地名は5ヶ所に挙げられている。

【寺ノ下】

テラノシタ。

木澤の遠山川右岸の川辺にある。その西隣のマツノタ小字に青龍寺がある。

従って、テラノシタとは「（青龍寺という）お寺の下の方にある土地」を意味する。

ボクタクサン（木沢山）青龍寺は慶長10年（1605）で、学制が布かれたときに仮校舎であったという。龍淵寺の末寺（以上は郷土の寺院）。

全国地図には、テラノシタ地名は中・大字として19ヶ所があり、テラノウエ地名よりも多い。

【手路山】

テロウヤマ。

和田の押出集落の北北西方の尾根にある。

テロウヤマとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①テロウ←テロ←タロと転訛したもので、タロはタル（垂）に関して「滝」のことをいう。南安曇郡や静岡県周智郡の方言でもある。以上から、テロウヤマとは「滝のある山地」を意味するか。この小字の西端には押出沢の支流があり深い谷になっているので、滝は存在しうる。ただ、ア段→エ段の母韻交替は「あまり多くない」（国語学大辞典）という。

②タロにはタル（弛）と関係して、「たわんだ地形」の意もある。すなわち、テロウヤマとは、「たわんだような、緩い勾配の尾根がある山地」をいうのであろうか。地図で見ると、弛んだような緩い傾斜の尾根がある。

全国地図にはテロウヤマ地名は載っていない。

【手路下】

テロウシタ。

押出のテロウヤマ（手路山）の下流の方にある。押出集落に近い。

テロウシタとは何か。これも二説。

- ①テロは「滝」のことで、テロウシタとは「滝の下流の方にある土地」をいうか。
- ②テロウシタとは、単に「手路山の裾の方にある土地」を指すのかもしれない。

【傳吉作】

デンキチヅクリ。

和田の山原の西方山地にある。

デンキチヅクリとは「傳吉さん所有の焼畑耕作地」をいうか。

【天神山】

テンジンヤマ。

南和田大町の集落の東部にある。

テンジンヤマとは「天神様を祀っているところ」をいう。ここには遠山天満宮がある。

昭和53年までは「天満宮」と呼ばれていて、江戸初期に西本願寺の建築用材を流す川狩人足の宿舎があって、そこへ水難除けと身の安全を守るために北野天満宮から勧請したと伝えられている（遠山谷南部の民俗）。

全国地図には、テンジンヤマ地名が41ヶ所の中・大字として挙げられており、うち40ヶ所が「天神山」となっている。

【デンダツ】

木澤の三ツ沢川左岸の急傾斜地にある。

デンダツとは何か。分かりにくい難解地名であるが、怪しげながら二説を挙げておく。

- ①デンはテン（天）が濁音化した語で「高いところ」をいうか。ダツも動詞タツ（断）と関係して「崩壊地形」をいう（語源辞典）。つまり、デンダツとは、「高い所まで崩崖のある山地」をいうことも考えられる。
- ②ダツはタツ（龍）の濁音化した語で「竜神」をいうか（語源辞典）。デンダツとは、「高い山地にあって水神を祀った場所」か。この水神は、あるいは、霜月祭り神名帳の「木沢村」にある「五人の御神」の中にあるのかもしれない、と勝手に想像している。

全国地図には、デンダツ地名は載っていない。

【堂島】

ドウジマ。

木澤の須澤、遠山川左岸の曲流部に二ヶ所ある。

ドウジマとは何か。二説を挙げる。

- ①ドウ（堂）は「仏堂のあった所」（語源辞典）で、シマ（島）は「川に臨んで

いる所」をいうのであろうか。以上から、ドウシマとは「(遠山) 川に臨んだ場所
所で仏堂のあった所」を意味するか。『遠山谷中部の民俗』に載っている地図には、
寺院のマークがつけられている。

②念のためにもう一説を加えておきたい。ドウは「川音による音響地名」(語源
辞典)で、シマは「水流に臨んでいる周囲を水で囲まれた陸地。洲」(国語大辞
典)である。従って、ドウジマとは「川音がひびく洲がある土地」を意味する
かもしれない。

国土地理院の2. 5万分の一全国地図には、ドウジマ地名は10ヶ所に記載
があり、うち6ヶ所が「堂島」となっている。

【堂ノ軒】

ドウノノキ。

和田の押出扇状地の山付けにある小さな小字。

ドウノノキとは何をいうのであろうか。語源辞典などにより二説を挙げたい。

①ドウ(川の擬音語)・ノ(助詞)・ノキ(抜)で、ドウノノキとは「土石流の
堆積地で川音がひびく土地」であらうか。川は伊ノ木沢と思われるが東方にあ
る押出沢や南の方の遠山川の川音も混じるのかもしれない。

②ドウ(堂)には、「神仏をまつる建物」(国語大辞典)の意もある。ノキは「裏
手の土地」をいう。長野県伊那郡や水窪の方言だという。以上から、ドウノノ
キとは「若宮神社の裏手の方にある土地」をいうか。

全国地図には、ドウノノキ地名は2ヶ所にあるが、ドウノノキ地名は無い。

【堂やしき】

ドウヤシキ。

木澤の上島にある。上村川右岸の上島橋が架けられているところ。

ドウヤシキとは何か。三説を挙げておく。

①ドウ(堂)は「土台の上に高く造った建物」をいい、ヤシキ(屋敷)は「立
派な構えの家」のこと。すなわち、ドウヤシキとは「土台のしっかりした大き
な構えの建物があつた所」を意味するか。豪族の屋敷か(以上は国語大辞典)。
上村川の対岸には八日市場もあるので、市場を支えた有力者が住んでいたの
であらうか。

②ドウは既に登場している解釈であるが、「川音の擬音語」か(語源辞典)。ド
ウヤシキとは「川音が響く有力者の大きな建物があつたところ」かもしれない。
上村川の川端にあつたから、かなり可能性のある由来である。

③ドウ(堂)は「神仏をまつる建物」(国語大辞典)。従って、ドウヤシキとは
「寺社に関わる有力者が住んでいた建物のあつた所」か。

全国地図には、ドウヤシキ地名は5ヶ所に挙げられており、うち4ヶ所が「堂
屋敷」となっている。

【トウヤマ】

和田の池口にある。池口川右岸の山中にあり、池口川の支流である、やがし
ゃが沢がその支流と合流している。

遠山谷のトウヤマについては、①諏訪神社の奉仕者たちが「外県（そとあがた）の最も奥の村」という意味で名づけたという柳田国男説と②美濃・三河や遠江からみて、「重畳する山並みの彼方にある僻遠の地方」の意だとする谷川健一説がある。

この池口のトウヤマはどうであろうか。この小字を見る視点がおかれているのは、池口の集落であろうか。日常のやりとりの中で出てくるのは、やはり、和田ではなくて、池口と思われる。

したがって、トウヤマとは「(池口の中心地から) 遠い山地」を意味するのであろう。

なお、ここに分かりにくい地名が顔を出している。ヤガシャガ沢である。小字ではないが、取りあげておきたい。

国語大辞典によれば、ヤカは愛知・静岡・三重の方言で「弱々しいさま」をいう形容動詞で、シャカ(泻下)には「水などをそそぎくらすこと」という意味がある。以上から、ヤガシャカサワとは「弱々しい流れになっている谷川」を意味していると思われる。二本の支流が合流したところが傾斜が緩くなっているので、流れも弱々しいさまを名づけたのであろうか。遠山谷では珍しい谷川か。

【ドギジマ】

和田の尾乃島、遠山川左岸の川に突きだした半島状の岬にある。

ドギとは「山野の尾端が道路等に突出しているよう所」(民俗地名語彙事典)をいう。トゲ(刺)が濁音化した語であろう。エ段→イ段の母韻交替は「かなり見られる」変化である(国語学大辞典)。

従って、ドギジマとは「川に突き出た半島状の岬になっている土地」を意味するものと思われる。和田の浄化センターがあるところで、ピッタリの地形になっている。

全国地図には、ドギジマ地名もトギジマ地名も挙げられていない。

【徳造平】

トクゾウタイラ。

和田池口の池口川右岸氾濫原の平坦地からその北方の山地を含む広大な面積をもつ小字になっている。

トクゾウタイラとは何か。二説を挙げておきたい。

①トクは動詞トク(解)の連用形が名詞化したトキが転訛した語で、「崩壊地形」をいうのであろう。イ段からウ段への母韻交替は「かなり多い」という(国語学大辞典)。ゾウはサハ(沢)が転じたソウの濁音化した語で、「川」をいう。古く「佐波」などと表記された地名が「総」「惣」などの用字に変えられている例が少なくないという(語源辞典)。以上から、トクゾウタイラとは「崩崖のある川辺の平坦地もある土地」を意味すると思われる。

②あるいはトクゾウ(徳造)は固有名かもしれない。であれば、トクゾウタイラとは「徳造さんの所有する、平坦地を含む山地」をいうのかもしれない。

全国地図には、トクゾウタイラ地名は無いが、トクゾウ（徳造）地名は2ヶ所の中・大字として挙げられている。

【ト澤】

トザワ。

木澤八重河内、上村川右岸の山地にある。

トザワとは何か。二説を挙げておく。

①分類山村語彙は次のようにいう。「日本の東半分は山中の獣類の足跡をト又はトウといふ領域である。遠州の奥では、鹿は手負ひになるとよく川へ入るといふ。入れば半道でも一里でも河水の中を遡って遁げる。それをトウを晦ます為だといふ」と。遠山は遠州の奥に近い。従って、トザワとは「獣の通り道があり、追われた鹿などが逃げ込む谷川のある所」をいうか。

②ト（戸）には「(谷間の)狭くなった所」の意がある（語源辞典）。すなわち、トザワとは「谷間の狭くなっている谷川のあるところ」を意味するか。

全国地図には、トザワ地名は41ヶ所も中・大字として挙げられているが、「ト沢」となっているのは1ヶ所だけ。

【栃合戸】

トチアイド。

南和田十原の遠山川左岸の急傾斜地にある。

トチアイドとは何をいうか。意外と分かりにくい地名であるが、主に語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①トチは動詞トチルの語幹で「まごまごする。あわてる」の意（国語大辞典）から、「崩崖」を意味するか。アイはアヒ（相）で「相対応する関係」を示し、ドはトと同じで、形容詞トシ（利）の語幹から「険しい地形」をいう。以上から、トチアイドとは「両岸が崩崖で相対応している険しい所」をいうか。

②トチが「栃の木」を指しているとするれば、トチアイドとは「栃が自生している険しい谷間」を意味するか。

全国地図には、トチアイド地名は記載されていない。

【栃ノ上】

トチノウエ。

木澤にある支流の三ツ沢川中流域の左岸にある。

トチノウエとは何か。これも二説を挙げる。

①前述のように、トチには「まごまごする。あわてる」から「崩崖」の意もありそうだ。すなわち、トチノウエとは「崩崖の上に方の土地」をいうのであるうか。

②トチはトチノキで、トチノウエとは「トチノキが自生している所より上の方にある土地」をいうのかもしれない。トチノキは山地に沢沿いに自生するので、三ツ沢川の川辺には自生していて、そこよりも高い所を指しているのであろうか。

全国地図には、トチノウエ地名もトチウエ地名も記載されていない。

【十原】

トッパラ。

むろん南和田の十原にある。この小字が中字に広がったのであろう。

二ヶ所にある。一つは遠山川右岸の女沢左岸の高い所にある緩傾斜地で、もう一つは遠山川右岸の十原集落のある広い台地になっている。

トッパラとは何を意味するのか。三説を挙げる。

- ①トッパラ←トチハラ（栃原）と促音便化した語か。すなわち、トッパラとは「トチノキが自生し、木の実の採集や狩猟が行われていた平坦地」をいうのであろうか。
- ②トッパラ←トリハラ（鳥原）と転じたか。トッパラとは「小鳥の群れが通過したり休んだりした緩傾斜地で鳥が目立った土地」か。
- ③トッパラ←トリハラ（取原）で、トリは動詞トル（取）の連用形で、「切り取られたような地形」（語源辞典）をいう。従って、トッパラとは「崩崖で囲まれるほうになっている平坦地」を意味するか。

全国地図には、トッパラ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられている。この南和田のトッパラがその一つ。

【殿町】

トノマチ。

和田新町の扇状地の上部にある。

トノマチとは「有力者たちの住む町」で、和田城を守る武士たちの居住地であったと思われる。

全国地図には、トノマチ地名は26ヶ所にあり、うち25ヶ所で「殿町」の字が宛てられている。

【樋口】

トヨクチ。

和田新町の現在かぐら大橋が架かっている場所の遠山川左右両岸にある。特に、右岸には2ヶ所あり、支流の樋口沢右岸の山地にも広がっている。

トヨは、今でも使われている伊那谷の方言で、トイ（樋）のこと。トヨクチ（樋口）＝ヒグチ（樋口）である。

従って、トヨクチとは「人工の水路の出入口」をいう。

3ヶ所にあるトヨクチのうち、2ヶ所が水路の排水口で、一ヶ所が取り入れ口を示していると思われる。

全国地図には、当然のことながら、トヨクチ地名は見当たらない。

【笥道上】

トヨミチウエ。

和田新町の和田城址の斜面にかかる細長い小字である。

トヨは先に触れたように、「人工の水路」を意味する、伊那谷の方言。従って、トヨミチウエとは「人工の水路の上側にある道路」をいう。小池沢から水を取り入れて流しているように見える。

全国地図には、トヨミチウエ地名もトヨミチ地名も載っていない。

【中川原】

ナカガアラ・ナカガワラ。

和田の新町（ナカガワラ）と八重河内の下和田（ナカガアラ）にあり、いずれも遠山川と八重河内川の合流点付近にある。

ナカガアラあるいはナカガワラとは何をいうのか。カワラは「川辺の土地」をいうのであろうが、ナカの意味によって三説を挙げておく。

- ①ナカが和田・南和田の中央をいうとすれば、ナカガワ（ア）ラとは「（和田・南和田の）中央部にある川辺の土地」となるか。
- ②ナカが「二つのものに挟まれた間」（語源辞典）であれば、ナカガワ（ア）ラとは「遠山川と八重河内川の間にある川辺の土地」を意味する。
- ③ナカが「神社の境内」（語源辞典）を意味するとすれば、ナカガワ（ア）ラとは「中心的な（諏訪）神社のある川辺の土地」となる。ここに祀られている諏訪神社は和田・南和田の旧村社で遠山谷随一の諏訪神社であるという（遠山谷南部の民俗）。

全国地図には、ナカガアラ地名は載っていないが、ナカガワラ地名は60ヶ所に中・大字として挙げられており、うち41ヶ所で「中川原」の文字が宛てられている。

【長クナ】

ナガクナ。

木澤の小道木にある。遠山川左岸の山地にあり、一部は日掛沢に接している。

「焼畑の地力が衰えて使えなくなる」ことをクナといので、地名になると、クナとは「地味悪く草木の生長しない土地」をいう（以上は民俗地名語彙事典）。焼畑3年目か4年目に入った焼畑を上村でもクナと呼んでいるという（上村の方言）。

ナガは動詞ナガル（流）の語幹から傾斜地をいうか、あるいはナギ（薙）の転で「崩壊地」の意か。

以上からナガクナとは何か、次の二説にまとめておきたい。

- ①ナガクナとは「傾斜地にある地力の衰えた焼畑耕作地」をいうか。
- ②あるいは、ナガクナとは「崩壊地もある地力の衰えた焼畑耕作地」を意味するか。

全国地図には、ナガクナ地名は記載がないが、ナカクナ地名は1ヶ所だけだが、中・大字として挙げられている。

【中久保】

ナカクボ。

和田の山原、遠山川右岸の山地にある。

ナカはナガの清音化した語で、ナガは動詞ナガル（流）の語幹で、「傾斜地」をいう（以上は語源辞典）。

以上から、ナカクボとは「傾斜地にある窪地」をいうか。

【長久保】

ナガクボ。

遠山川左岸の日掛沢の両岸にある。北側の右岸が木澤で、南側の左岸が和田になっている。

ナガクボとは何を意味しているのか。二説を挙げておきたい。

①ナガクボとは字面の通りで、「谷川に沿った長い窪地」をいう。日掛沢の谷になって、長く伸びている地名である。

②ナガは、繰り返しになるが、動詞ナガル（流）の語幹で「傾斜地」をいう（語源辞典）。従って、ナガクボとは「傾斜地にある窪地」を意味するのかもしれない。

全国地図には、ナガクボ地名は31ヶ所に中・大字として記載があり、うち20ヶ所が「長久保」となっている。

【中沢】

ナカザワ。

南和大町の集落の東に下る傾斜地になっていて、大町の配水池がある。

ナカザワとは何をいうのであろうか。はっきりしないが、二説を挙げておく。

①ナカザワとは、遠山川へ左岸の東側から流れ込む大町付近の支流の中で、三本ある内の真ん中の支流になっていることをいうのかもしれない。南側の支流は宮の前沢か。北側の支流の名前はわからない。

②あるいは、ナカザワ小字の近くに天満宮がある。この小字が天満宮の勢力圏のなかにあることを意味しているのであろうか。

全国地図には、ナカザワ地名は96ヶ所に中・大字として挙げられており、うち93ヶ所に「中沢」の字が宛てられている。

【中し満・中嶋・中寫・中島】

ナカシマ。

和田の押出にあり、遠山川右岸の押出沢が合流する左岸に集まっている。すなわち、遠山川と押出沢に囲まれた一画になっている。

ナカシマとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①ナカシマとは「中流域にある川に囲まれた島」を意味するのかもしれない。現在は川に沿ってはいるが、川に取り巻かれているとはいえない。この小字地名が発生したころ、この部分は島であったことも考えられる。遠山川（上村川）の上流の木澤にはカミシマ（上島）小字があるので、そのシマと対応しているのかもしれない。

②これらの押出のナカシマには、現在のところ、田んぼはないが、田地になっていた時期があったかもしれない。「長野県下伊那の遠山川流域地方では、田地の連なった所をシマといい……」（民俗地名語彙事典）とある。シマには「ある一区画をなした土地」（国語大辞典）の意もあるので、田んぼであった可能性もないわけではない。上流の木澤のカミシマに依じてナカシマとしたか。であれば、ナカシマとは「中流域川辺の田地がある所」をいうか。

全国地図には、ナカシマ地名は76ヶ所が中・大字として記録されている。

【中瀬】

ナカゼ。

和田の押出の西方山地にある、大きな小字。

ナカには「二つのものにはさまれた間の地。山などの間」であり、セは「急流」をいう（以上は国語大辞典）。

従って、ナカゼとは「二つの大きな側稜の間に流れている浅い急流のある山地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ナカゼ地名は14ヶ所に挙げられており、その全てが「中瀬」となっている。

【中立】

ナカダチ。

木澤八日市場、上村川左岸の山地の尾根周辺にある広い小字。

ナカダチとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ダチは動詞タツ（立）の連用形が濁音化した語で「高くなった所」をいう。すなわち、ナカダチとは「中央部が尾根で高くなっている所」をいうか。尾根に連なる傾斜地も含まれている。

②タチは動詞タツ（断）の連用形が名詞化した語か。ナカダチとは「崩崖もあちこちにある山地」をいうのであろうか。

全国地図にはナカダチ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「中立」の字が宛てられている。

【中洞】

ナカッポラ。

八重河内の此田、梶谷川の左右両岸に三ヶ所ある。

ナカッポラ←ナカホラ と促音便化した語。ナカハラとは何を意味するのか。民俗地名語彙事典に依りながらみていく。

ホラは「湧水の少ない浅い谷」をいう。梶谷川を前にして、後ろの山地は尾根の麓か、等高線に凹凸がほとんど無い場所になっており、梶谷川に流れ込む支流の流域はホラから外れている。このような場所には居住地になっていたり、田んぼがみられることもあるという。周辺に比べて、災害が少ない所であろうか。

ナカッポラについて、二説を挙げておきたい。

①ナカは梶谷川の「中程。中流部」をいうか。ホラは「湧水のない浅い谷」を意味する。従って、ナカッポラとは「川の中流部の川辺にあって、湧水の少ない平坦地か緩傾斜地」をいうか。

②ナカは梶谷川の「大きな谷の中」のいうか。すなわち、ナカッポラとは「大きな谷の中にある、湧水の少ない平坦地か緩傾斜地」を意味するか。

全国地図には、ナカッポラ地名は載っていないが、ナカホラ地名は7ヶ所、ナカボラ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられており、それらの全てが「中洞」

になっている。なお、ホラ地名は岐阜県に多いという。

【中根】

ナカネ。

木澤の上島と中根（中字）に懸かる大きな面積になっている。上村川と遠山川に接し、尾根をも含んでいる。

ナカネとは、「上村川と遠山川の間にある、尾根を含む山地」を意味するのであろう。

2. 5万分の一の全国地図には、ナカネ地名が44ヶ所に中・大字として記載されており、うち40ヶ所に「中根」の字が宛てられている。

【中根山】

ナカネヤマ。

この小字は、南和田の大町にあり、木澤のナカネ小字とは離れていて、直接には繋がっていない。

ナカネヤマとは「二筋の谷川に挟まれた尾根になっている山地」を意味するのであろう。

大町の集落で南に見上げる山稜である。

全国地図には、ナカネヤマ小字は1ヶ所に挙げられており、「中根山」となっている。

【中ノ島】

和田の新町にあり、遠山が左岸になっている。

ナカノシマとは何か。二説を挙げる。①「カミノシマ小字の下流側にある、川に臨んだ低地」を意味するのであろうか。

②「カミノシマ小字の下流側にある、水田のある低地」をいうか。

いずれにしても、ナカノシマは木澤や和田のカミシマではなくて、カミノシマに対応している。

全国地図には、ナカノシマ地名は中・大字として、55ヶ所に挙げられており、うち54ヶ所では「中」と「島」の字が宛てられている。

【中平山】

ナカノタイラヤマ。

南和田の大町、遠山川左岸の山中にある。

タイラヤマとは「山中にある緩傾斜地」をいうか。周辺部よりも傾斜の緩い部分を指しているのであろう。

では、ナカノタイラヤマとは何をいうか。ナカの解釈に依って、二説を挙げる。

①ナカは「山地の中」を意味するか。すなわち、ナカノタイラヤマとは「山地の中にあって、比較的傾斜の緩んでいる土地」をいうか。

②ナカが「二筋の谷川」を指すのであれば、ナカノタイラヤマとは「谷川の間にある比較的緩やかな傾斜地」を意味するか。この解釈が成立する可能性は少

ないか。

全国地図には、ナカノタイラヤマ地名は載っていない。

【中道】

ナカミチ。

和田の大島にあるが、池口とをつなぐ道路が通っている。池口川右岸の尾根まで達する傾斜地になっている。

ナカミチとは何か。二説を挙げたい。

①一般的には、ナカミチとは何本か道路がある中で、間にある道を意味すると思われる。ここには、貫通している道路は一本しかないが、途中で切れている道路が、貫通している道路の上の方と下の方に一本ずつある。そこで、ナカミチとは「何本か道路があるが、斜面の中程にある道が貫通している土地」をいうのだろうか。

②あるいは、ナカミチは単に「道路が通っている山地」を意味するのかもしれない。

全国地図には、ナカミチ地名は39ヶ所にあり、うち35ヶ所が「中道」となっている。

【中村】

ナカムラ。

木澤の八日市場、上村川左岸の川原のすぐ上の緩傾斜地にある。

ナカムラとは何をいうか。二説を挙げる。

①ナカは「八日市場の中心地」をいうのであろう。ムラはモリ（盛）から転じた語で「盛り上がった所」（語源辞典）のこと。すなわち、ナカムラとは「（八日市場）地域の中心地になっている台地」を意味するか。ここには日月神社が祀られている。

②ムラは「集落」をいうか。すなわちマラとは八日市場のムラかもしれない。ナカムラとは「（八日市場の）ムラの中心になっている所」の意かもしれない。

国土地理院の2.5万分の一全国地図には、ナカムラ地名が中・大字として635ヶ所にも挙げられている。

【ナギナカ】

木澤の須澤にあり、遠山川右岸の側稜の尾根先端になっている。

ナギナカとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ナギ（薙）は「崩壊地」をいい、ナカはナ（土地）・カ（処）か。ナは「土地」をいう古語のナだという。以上から、ナギナカは「崩崖のある所」をいうのであろうか。

②ナカ←ナガと清音化した語で、動詞ナガル（流）の語幹から、「傾斜地」をいう。静岡県榛原郡の方言でもある。

従って、ナギナカとは「崩崖のある傾斜地」となるが、どうか。

全国地図には、なぜかナギナカ地名は記載が無い。

【名古屋】

ナゴヤマ。

南和田の名古山集落とその周辺に5ヶ所ある。中心地は遠山川右岸であるが、左岸にもある。

ナゴは「霧」のことで、愛知県北設楽郡・下伊那郡・静岡などの方言だという（民俗地名語彙事典）。ヤマは「田畑」（静岡県）、林（上伊那郡）をいう（国語大辞典）。

以上から、ナゴヤマとは「霧の発生しやすい畑や林地」を意味する。

全国地図には、ナゴヤマ地名は2ヶ所に中・大字として記載がある。うち一つはこのナゴヤマ。

【梨元】

ナシモト。

木澤の上島の上村川右岸川原にある。

ナシは動詞ナシル（擦）の語幹で「こすられたような地形」（語源辞典）をいうか。従って、ナシモトとは「崩壊地の山麓にある平地」をいうのであろうか。

全国地図には、ナシモト地名が、中・大字として8ヶ所に挙げられている。

【梨元向】

ナシモトムカイ。

ナシモト小字の上村川対岸にある急傾斜地。

ナシモトムカイとは「ナシモト小字の対岸にある土地」を意味するのであろう。

全国地図には、ナシモトムカイ地名は載っていない。

【梨山】

ナシヤマ。

和田の漆平島、小池沢の上流にある。

ナシヤマとは何か。二説を挙げる。①ナシヤマとは「ナシの原種であるヤマナシが自生している山地」をいうか。しかし、ヤマナシがあるかどうかは、まだ確認していない。

②すでに触れたように、ナシには動詞ナスルから「崩壊地」の意もある。従って、ナシヤマとは「崩壊地のある山地」を意味するか。

全国地図には、ナシヤマ地名は記載されていない。

【名田熊・名田クマ】

ナダクマ。

南和田の飯島の名田熊沢上流になる。

ナダクマとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①ナダはナダリ、ナダレの語幹で「崩壊地」をいい、クマはクマ（曲）で「湾曲点」を意味する。以上から、ナダクマとは「崩壊地で川の曲流している所」を意味するか。

②ナダは「流れの早い所」で、クマハクマ（隈）で「奥まった所」をいう。従って、ナダクマとは「川の上流部で流れの速い所」を意味するか。

全国地図の中・大字には、ナダクマ地名は載っていない。

【七久保】

ナナクボ。

遠山川左岸の山地にあり、木澤の川合と中根にまたがっている。

ナナクボとは何か。語源辞典によりながら、二説を挙げる。

①ナナは美称でクボ（窪）は「谷」をいうか。ナナクボとは「いくつかの谷がある山地」をいうか。

②ナナはナナメ（斜）の下略形で「傾斜地」をいう。従って、ナナクボとは「傾斜地で谷になっているところ」をいうか。

全国地図には、ナナクボ地名は中・大字として12ヶ所に挙げられている。

【ナベツル】

南和田十原集落の北側斜面にある。

ナベツルとは何か。これも語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ナベツルとは、鍋弦のように「道が大きく迂回する所」か。この道の一部が懸かっているだけであるが、この道のことを指しているのであろうか。

②ナベは「急傾斜地」をいい、ツルは「細長く曲がった所」の意。以上から、ナベツルとは「急傾斜地で細長く曲がった道のあるところ」を意味するのかもしれない。

全国地図には、ナベツル地名は記載が無い。

【鳴沢】

ナルサワ。

遠山が左岸の支流である小池沢に流れ込むナル沢の流域にある。

ナルサワとは「流れの鳴り響く沢」（国語大辞典）である。それほど急流であることを意味しているのであろう。

全国地図には、ナルサワ地名は、中・大字として17ヶ所に挙げられており、うち10ヶ所が「鳴沢」になっている。

【西垣外】

ニシカイト。

遠山川右岸の押出集落の下流側の川辺にある。

ニシカイトとは何をいうのか。主に国語大辞典に依りながら二説を挙げる。

①カイトには「畑」の意味がある。下伊那郡の方言だという。すなわち、ニシカイトとは「(押出集落の)西側にある畑地」を意味するか。

②ニシは動詞ニジム（滲）の語幹が清音化した語で「湿地」のこと（語源辞典）。カイトは「垣の外」で、日葡辞書にもあり「村の囲いの外」を意味している。以上から、ニシカイトとは、「(押出の)村の外にある湿地」をいうのかもしれない。

全国地図には、ニシカイト地名は載っていない。

【西ノ宮】

ニシノミヤ。

和田の池口南部の山地にある。

ニシノミヤとは何か。小字図をみると、和田の東部にあり西方にはないので、ニシは方角を示す語とは思えないし、またミヤも神社の気配もない。いずれも瑞祥地名として用いたのであろうか。

以下、語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①ニシは動詞ニジル（躡）の語幹の清音化した語。ミヤはミ（水）・ヤ（菴）で「湿地」をいうか。従って、ニシノミヤとは「崩壊地のある湿地」をいうのであろうか。

②ニジは動詞ニジム（滲）の語幹が清音化したか。すなわち、「自然湧水があり、湿地のあるところ」の意味があるのだろうか。

全国地図には、ニシノミヤ地名は中・大字として11ヶ所に挙げられている。

【西山】

ニシヤマ。

木澤の小道木、八重河内には小嵐、和田には夜川瀬と、各地にある小字。

ニシヤマとは

①一般的には、ニシヤマとは「西の方にある山地」をいうのであろう。木澤のニシヤマは遠山川の西側すなわち右岸にあり、八重河内のニシヤマは八重河内川や小嵐川の西側すなわち左岸にある。和田夜川瀬のニシヤマも遠山川の西側右岸にある。すべてが大きな川の西方になっている。

②それでも、ニシヤマは「自然湧水のある山地」ではないか、という思いを捨てきれない。繰り返しになるが、ニシは動詞ニジム（滲）の語幹の清音化と見る解釈である（語源辞典）。

全国地図にも、ニシヤマ地名は中・大字として170ヶ所にも挙げられており、うち167ヶ所で「西山」となっている。

【子ぐり山】

ネグリヤマ。

木澤の南部で遠山川左岸にある。

ネグリヤマとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ネはネ（根）で「裾」をいい、グリは動詞クル（剝）の連用形が濁音化した語で「崩壊地形」を意味する。従って、ネグリヤマとは「側稜の尾根の裾にあたる山地で崩崖もある所」をいうか。

②クリはクリ（涅）で「湿地」をいうことも考えられる。すなわち、ネグリヤマとは「尾根の裾の山地で湧水のある所」を意味するか。

全国地図には、ネグリヤマ地名は記載されていない。

【軒畑】

ノキハタ。

和田押出集落の西部で伊ノ木沢左岸にある小さな小字。

ノキは「建物の裏手」をいう、上伊那郡と遠山の方言（長野県方言辞典）。従って、ノキハタとは「家の裏手にある畑」を意味する。

全国地図には、ノキハタ地名もノキバタ地名も載っていない。

【呑沢】

ノンザワ。

八重河内の左岸すなわち西の方から八重河内川にそそぐノミ沢の下流域にある。このノミサワが撥音便化してノンザワに転じたのであろう。

ノンザワとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ノミ←ノビ（延）と転じたもので、谷川の水を田んぼに引くために谷川の流路を変えて延長したことをいうのではないだろうか。ノビサワから直接に撥音便化してノンザワに転訛したとも考えられる。地形図をみると、この谷川は八重河内川に直線的に注ぐのではなくて、迂回路をとっているように見える。以上から、ノンザワとは「水路を延ばして田んぼに水を引き入れるようにした谷川のあるところ」を意味するのであろう。水田が比較的多い川辺になっている。

②ノは「田畑」をいい、ミ（廻）は「屈曲」のこと。従って、ノミサワとは「田畑の間を屈曲している谷川の流域」をいうか。屈曲させたのは自然では無く人工によると思われる。

全国地図には、ノンザワ地名もノミザワ地名も見当たらない。

【灰焼渡】

ハイヤキド。

木澤南西部の山地にある。

ハイヤキドとは何を意味しているのか。意外と分かりにくい地名だが、二説を挙げておきたい。

①ハイヤキドはハイヤキ（灰焼）・ド（処）で、「草木を焼いて肥料をつくった所」をいうか。多摩丘陵ではハイヤキと呼んでいたという（民俗大辞典）。

②ハイヤキドとは「焼畑が行われていた土地」かもしれない。焼畑では休閑中に堆積した落ち葉や草木を焼却すれば、それが肥料になっている。そのことを指しているのかもしれない。

全国地図には、ハイヤキド地名は記載が無い。

【羽ガ戸】

ハガト。

南和田大町の南部山地にある。

ハガトとは何か。二説を挙げる。

①ハガは動詞ハガス（剥）の語幹で「崩崖」をいう（語源辞典）。トはト（処）。従って、ハガトは「崩崖のある所」を意味するか。

②トはド（渡）の清音化した語で、ハガトとは「崩れた土砂が谷川を越えた所」をいうか。大きな地震があった時のことであらうか。

全国地図には、ハガト地名は中・大字として挙げられていない。

【橋場】

ハシバ。

和田の大島、遠山川左岸にあり、現在も西島橋が架けられている。

ハシバとは、字面の通りで「(遠山川を渡る) 橋が架けられていた所」をいう。
国土地理院の2.5万分の一地図には、ハシバ地名は38ヶ所に記載されており、うち36ヶ所に「橋場」の字が宛てられている。

【畑上】

ハタウエ。

木澤の小道木、遠山川左岸の奥の山地にある。

ハタウエとは「焼畑耕作地の上の方の土地」をいう。狩猟が行われた場所だったのかどうか。

全国地図には、なぜかハタウエ地名は採られていない。

【畑久保】

ハタクボ。

木澤の須澤にある。遠山川右岸の集落西方にある山地。

ハタクボとは「焼畑耕作地で谷川の流れる窪地のある所」を意味するのであろう。

全国地図の中・大字には、1ヶ所だけ、ハタクボ地名が挙げられており、「畑久保」となっている。

【秦平】

ハタタイラ。

和田漆平島の集落の南方の山地にある。

ハタタイラとは何を意味するのか。三説を挙げておきたい。

- ①ハタタイラとは「焼畑耕作地で小平地のある所」をいうか。
- ②ハタは動詞ハタク(叩)の語幹から「崩壊地形」のことか(語源辞典)。従って、ハタタイラとは「崩崖のある山中の小平地」をいうか。
- ③もしかしたら、ハタは渡来系といわれている「秦氏」と関係があるか。すなわち、ハタタイラとは「秦氏に関わる山中の小平地」も考えられないわけではない。あるいは居住地があったのかどうか。

全国地図には、ハタタイラ地名は記載がない。

【ハダ畑】

ハダハタ。

南和田の名古山、遠山川右岸の川端から山地に連なる小字。

ハダハタとは何か。語源辞典によりながら二説をあげる。

- ①ハダは動詞ハダケル(開)の語幹から「かき落とす」の意、ハタは「焼畑」をいう。以上から、ハダハタとは「崩崖のある焼畑耕作地」をいうのであろうか。
- ②ハタはハ(端)・タ(処)で、「川端」をいうか。すなわち、ハダハタとは「崩崖のある川端」をいうのかもしれない。

ハダハタ地名も、全国地図には記載されていない。

【八森】

ハチモリ。

南和田の名古山、遠山川右岸にあって、対岸に突きだした独立峰になっていて、頂上付近には八森神社がある。

ハチモリとは何か。主に語源辞典によりながら二説を挙げておく。

①ハチは「円錐形の山」をいう。静岡県の方言だが、鉢を伏せた形に見立てたのであろう。モリは「神を祀ってある森」のこと。以上から、ハチモリとは「神を祀る森のある円錐形の山」をいうのであろうか。

②モリには単に「頂上のこんもり茂った山」の意もある。すなわち、ハチモリとは「頂上に森がある円錐形の山」を意味することも考えられる。

神社以前には山の神が依り付く山だったと思われるので、ハチモリ地名が発生した時期がかなり古ければ②の由来になりそうだ。

全国地図には、ハチモリ地名が中・大字として18ヶ所に記載があり、うち15ヶ所に「八森」の字が宛てられている。

【羽入田】

ハニュウタ。

南和田の大町にあり、遠山川左岸の崖地になっている。

ハニュウタとは何か。これも語源辞典に依りながら、二説を挙げておく。

①ハニュウはハニ(埴)・フ(生)で、「粘土質の土質」を意味する。タはタ(処)。すなわち、ハニュウタとは「粘土質の土質の土地」をいうのであろう。しかし、現地に粘土があるのかどうかは未確認。

②ハニュウ←ハネフの転訛も考えられる。ハネ(勿)・フ(生)で「崖になっている所」の意もありそうだ。従って、ハニュウタには「崖地になっている所」をいうのかもしれない。

全国地図には、ハニュウタ地名は無いが、ハニュウダ地名は5ヶ所に挙げられている。

【羽ヲリ】

ハネオリ。

木澤の川合集落の南方山地に、尾根と谷の二ヶ所ある。

ハネオリとは何か。ハネの解釈により、二説を挙げる。いずれも語源辞典による。

①ハネ←ハニ(埴)と転じたもので、オリはヲリ(折)で「傾斜地」をいう。以上から、ハネオリとは「粘土質の土がある傾斜地」を意味するか。

②ハネは動詞ハネル(勿)の連用形が名詞化した語で、「切り落とすこと」をいう。従って、ハネオリとは「崖地もあり傾斜地」をいうのであろうか。

全国地図には、ハネオリ地名は載っていない。

【波場】

ハバ。

南和田の十原と和田の山原の二ヶ所にある。

十原のハバ小字は遠山川左岸の川原から急傾斜地につながる長い小字になっている。

和田のハバ小字は遠山川右岸にあり、これも川原から北西方向の山地の急傾斜地に繋がっている。

「ハバは崖を指すが、濃尾地方およびそれ以東に多い。濃尾平野周辺の山麓台地のへりにつづく崖地などによくみうけられ、それからずっと東北地方へ連続している」(民俗地名語彙事典)とある。

ここ十原と山原のハバも同じで「川辺から山麓台地のへりに続く崖地になっているところ」をいう。十原の集落のある台地と遠山川の川原に繋がる崖地になっており、山原も山原の集落と川原の間にある急傾斜地になっている。

国土地理院の2.5万分の一全国地図には、ハバ地名は40ヶ所が中・大字となっているが、「波場」の字は一ヶ所もない。

【榛久保】

ハリクボ。

南和田の名古山、遠山川が激しく屈曲している左岸にある。川岸から立ち上がっている崖地になっている。

ハリクボとは「ハンノキが自生している谷のある所」をいうのであろう。

ハンノキとはカバノキ科の樹木でハリノキともいう。湿地に自生しており、谷沿いの斜面にも生えている。

根粒菌をもち肥料木としても有用であるというので、ハリノキが自生している傾斜地では焼畑耕作も行われたのであろう。

しかし、全国地図には、ハリクボ地名は載っていない。

【ハロンリ】

南和田の名古山にある。遠山川右岸の山地で、野口沢の最上流部に張り出している側稜の尾根になっている。

ハロンリとは何か。こんな日本があるのだろうか、という疑問が浮かんでくるほどに難解な地名である。

ハロンリ←ハルンリ←ハルモリと転訛した語であろうか。その撥音便化は稀ではあるが、ありうるという(国語学大辞典)。ハルは動詞ハルク(払)の語幹から「崩壊地形」をいい、モリは「高く盛り上がった所」のこと(語源辞典)。

以上から、ハルモリは「崩崖のある高く盛り上がった所」を意味するか。あるいは、山の神を祀った場所でもあったのであろうか。

全国地図には、むろん、ハロンリ地名は見当たらない。

【ハンバ】

上村川右岸の木澤八日市場にある。支流の右岸の緩傾斜地になっている。

ハンバとは何か。二説を挙げておきたい。

①ハンバについて、国語大辞典は「長野県北部や島根県西部で、山中のわずかな平地。…川べりの緩傾斜地をいう“はば”の変化した語か」という。現地はこの通りの地形になっている。従って、ハンバとは「山中にある川べりのわずかな平地」を意味すると思われる。

②ハンバは遠山地方の方言で「山仕事をする人が寝起きする山小屋」(長野県方

言辞典) というがどうであろうか。

全国地図には、ハンバ地名が10ヶ所に中・大字として記載があり、うち6ヶ所は「半場」になっている。

【ハンマイバ】

南和田の遠山川右岸のマダラ沢上流部と柳木瀬沢に挟まれた側稜の尾根付近にあり、柳木瀬沢には接している。

ハンマイバとは何か。これも難解地名であるが、二説を挙げておく。

①ハンマイバ←ハンバイバと転じたか。バ行⇄マ行の交替は「きわめて多い」という(国語学大辞典)。ハンバは既に述べているように「川べりのわずかな平地」であり、イバは井(井)・バ(場)か。以上から、ハンマイバとは「谷川べりの平地」を意味するものと思われる。水場もあるので焼畑や山仕事の休憩所があったのかもしれない。

②ハマイバ→ハンマイバと撥音便化したもので、ハマイバ(破魔射場)で「破魔射の行事が行われた場所」か。しかし、神社は近くにないし、この付近が境界地かどうかははっきりしていない。

全国地図には、ハンマイバ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「飯米場」となっている。

【ヒカケ・日掛】

ヒカケ。

和田の大島と池口にある。

ヒカケとは「日当たりの良くない土地」をいう。中には、西向きの傾斜地も一部にはあるが、その小字の大部分が日蔭地になっている。

全国地図には、ヒカケ地名が3ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【日カゲ・ヒカゲ】

ヒカゲ。

木澤の「木沢」中宇と川合にある。

ヒカゲには、「日当たりのよくない土地」の意と、逆に「日当たりのいい土地」をいう場合とがある。現地を訪れるか、地形図から判断するよりほかはない。川合のヒカゲは「日当たりのよくない土地」に該当するが、「木沢」中宇は東北東向きの傾斜地になっており、むしろ「日当たりのいい土地」をいうのかもしれない。

全国地図には、ヒカゲ地名が78ヶ所、中・大字として記載されており、うち57ヶ所に「日影」の字が宛てられている。

【日掛沢】

ヒカケサワ。

和田大島の遠山川左岸の山地にあり、支流の日掛沢の左岸にもなっている。

ヒカケサワとは「谷川と接している日当たりのような所」を意味するのであろう。

谷川の名前が先に付けられたか、あるいは小字の命名が先だったのか。考え

てみるに、この谷川である日掛沢は東西に延びているので、左右両岸の日当たりの具合は対照的になっている。従って、この沢をヒカケサワと名づけることは難しい。故に、小さいながらもヒカケサワ小字名の方が、時期的に早く発生しているのではないだろうか。

全国地図には、ヒカケサワ地名は載っていない。

【東畑】

ヒガシハタ。

和田の押出集落のほぼ中央部にある。

ヒガシハタとは「(押出沢の) 東側にある定畑」を意味するか。集落の中にある小さな小字だから焼畑とは思われない。

全国地図には、ヒガシハタ地名は中・大字として16ヶ所が挙げられており、その全てに「東畑」の字が宛てられている。

【日ガラヒ】

ヒガラヒ。長野県町村字地名大鑑には、「日カリキ」となっている。

木澤の上島、上村川右岸の山地にある。

ヒガラヒとは何をいうのか、分かりにくい地名。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ヒガはヒガ(僻)で「曲がった土地」をいい、ライは「場所」を示す接尾語ラにつながる、忘れられた語であるのか」という。ヒガラヒとは「(側稜の尾根が) 曲がっている所」だろうか。どの側稜の尾根も曲がっているので、これで、他と区別すべき地名になりうるのか、という疑問は残る。

②ヒは動詞ヒウ(轟)の語幹で「削り取られたような地形」をいい、ガラ(礫)は「小石まじりの地」の意、イは井(井)で「流水」のこと。以上から、ヒガラヒとは「崩崖のある小石混じりの谷川が流れている所」か。

全国地図には、ヒガラヒ地名は記載されていない。

【壺ツボツ】

ヒトツボツ。

南和田の名古山にある。

ヒトツボツとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ボツはホツの濁音化した語で「側稜」のこと。下伊那郡と水窪の方言だという。ヒトツは「一つ」であろうか。すなわち、ヒトツボツとは「一本の側稜が目立つ土地」を意味するか。

②ヒトツのヒは、前述のように動詞ヒウ((轟)の語幹で「削り取られたような地形」をいい、トツはタツ(断)の転じた語で「崩壊地形」のことか。従って、ヒトツボツとは、「削り取られたような崩崖のある側稜」をいうか。やや無理気味な解釈かもしれない。

全国地図には、ヒトツボツ地名は載っていない。

【ヒナタ】

和田の池口集落の東部、池口川左岸にある。

ヒナタには「日当たりのいい土地」の意しか考えられないが、池口川は東西方向に流れており、その左岸にある小字だから北向きの傾斜地になっている。しかし緩傾斜地が多いので、左岸のなかでは日当たりがいいことをいうのであろうか。

ヒナタとは、「(左岸の山地の中では) 日当たりのいい土地」を意味しているか。

あるいは、集落の東の方になるので、「日の出る方の土地」を指しているかもしれないが、可能性はうすい。

当然のことながら、全国地図にはヒナタ地名は141ヶ所と多い。

【日ナタツクリ】

ヒナタツクリ。

南和田の名古山、遠山川左岸の柳木瀬沢の上流部にある。深い谷であるが、左岸には緩傾斜地もある。

ヒナタツクリとは、「日当たりのいい焼畑耕作地のある土地」を意味するか。この谷川左岸の深い谷も朝のうちは日が当たる。

全国地図には、ヒナタツクリ地名は記載されていない。

【日向畑】

ヒナタバタ。

南和田の大明にある。遠山川左岸の山地にあり、支流の宮の前沢右岸になる。北西向きの傾斜地になっている。

ヒナタバタとは「(周りに比べて) 日当たりがいい焼畑耕作地」を意味するものと思われる。

ここ、遠山地方南部では、ごく近くの周辺地にくらべて少しでも日当たりがいい土地が求められていたためであろうか。それほど日当たりがいい土地とも思えない所にヒナタの地名が付けられている。

全国地図には、ヒナタバタ地名もヒナタハタ地名も載ってはいない。

【桧平】

ヒノキタイラ。

南和田名古山、遠山川左岸の川縁にあり北東向き急傾斜地になっている。

ヒノキタイラといえば、「ヒノキの生えている山中の平坦地」とうことになるが、この小字のある場所からみると、この解釈は成立しそうにもない。

ではヒノキタイラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①ヒノキはヒ(樋)・ノ(助詞)・キハ(際)の略で「水路のほとり」をいい、タイラはタ(語調をととのえる接頭語)・イラ(苛)で「角ばって、けわしい地形」を示す。以上から、ヒノキタイラとは、「川の際にあってけわしい崖になっている所」をいうか。

②ヒノキはヒ(樋)・ノキ(除)で「川崖」の意か。タイラは「周辺に比べてやや傾斜の緩いところ」をいうこともあるかもしれない。従って、ヒノキタイラとは「川崖になっていて、一部に傾斜が緩んだ場所のある土地」とすることも

ありうるか。

全国地図には、ヒノキタイラ地名は無いが、ヒノキダイラ地名は中・大字として一ヶ所にあり、「桧平」となっている。

【兵右エ門作田】

ヒョウウエモンツクリダ。

南和田の十原集落の南東方の山地にある。比較的に勾配の緩い傾斜地になっているが、田んぼはできそうにもない。

ツクリダとはツクリ（作）・ダ（処）で、「焼畑耕作をした土地」をいうのであろうか。

従って、ヒョウウエモンツクリダとは「兵右エ門さんの焼畑耕作地」のことと思われる。

【兵沢】

ヒョウザワ。

和田山原、遠山川右岸に注ぐ兵沢の中流域にある。

ヒョウは動詞ヒヨル（曲）の語幹が長音化した語で、「たわんだ地形」をいう（語源辞典）。

従って、ヒョウザワとは「たわんだ低地を川が流れている土地」をいうか。若松神社のある台地と南西側の尾根との間にあるたわみを兵沢が下っている。

ヒョウザワ地名は、全国地図には載っていない。

【兵坂】

ヒョウサカ。

和田の漆平島集落の南東側山地にある。

ヒョウは「峯」をいう（語源辞典）。すなわち、ヒョウサカとは「側稜の尾根が下ってくる傾斜地」を指しているものと思われる。

全国地図には、ヒョウサカ地名もヒョウザカ地名も記載されていない。

【兵嶋】

ヒョウジマ。

和田の山原の兵沢が遠山川に流れ込むところにある。

ヒョウジマとは何か。二説を挙げたい。

①ヒョウジマとは「兵沢が（遠山川に）注いで出来た島のある所」をいうのであろうか。

②ヒョウはヒヨが長音化した語で、動詞ヒヨメクの語幹で「弱々しい様子」から「湿地」をいう（語源辞典）。すなわち、ヒョウジマとは「湿地にある島」をいうのかもしれない。

全国地図には、ヒョウジマ地名もヒョウシマ地名も記載が無い。

【ヒヨシマ】

南和田の大町、天龍村折立境のオオヨケ沢が遠山川に合流する所にある。

ヒヨは「標」から山の鞍部の境界をいうらしい（語源辞典）。

ここでは山の鞍部であるオオヨケ沢という谷川が境界になっていることを指

しているのであろう。

従って、ヒヨシマとは「村境になっている土地で水流に二方を囲まれているところ」を意味するのであろう。

全国地図には、ヒヨシマ地名も載せられていない。

【平城】

ヒラシロ。

和田の漆平島と大島の、いずれも山地の尾根にある。

ヒラシロとは何をいうのであろうか。いずれも砦跡の無い土地で、これも分かりにくい地名。民俗地名語彙事典に依りながら二説を挙げておく。

①ヒラは「信州では傾斜面のこと」で、シロは長野県下伊那郡でも、「毎年、定まった場所に茸が群れて出る場所」をいう。以上から、ヒラシロとは「毎年、同じ場所に茸が群れ出る傾斜地」をいうか。

②赤石山地では、シロというのは「緩やかな傾斜地」をいう。すなわち、ヒラシロとは「勾配が緩やかなところもある傾斜地」となるが、どうであろうか。

全国地図には、ヒラシロ地名もヒラジロ地名も記載されていない。

【平岩】

ヒライワ。

木澤中根の遠山川左右両岸にある。

左岸のヒライワは広大な小字になっている。

ヒライワとは何か。二説を挙げておきたい。

①ヒライワには「表面が平らで、板のような岩」の意がある（国語大辞典）。こうした岩は山の神が宿る磐座として、だいにされてきたのではないだろうか。

従って、ヒライワとは、「表面が平らで大きな岩が祀られていた土地」をいうか。

②あるいは、ヒライワとは「表面が平らで大きな岩があった傾斜地」の意かもしれない。

国土地理院の2.5万分の一地図には、中・大字として、ヒライワ地名は2ヶ所に挙げられており、うち2ヶ所が「平岩」となっている。

【藤花】

フジハナ。

木澤小道木の遠山川左岸にある。

フジハナとは何か。二説を挙げる。①フジハナとは「毎年、藤の花が咲く場所」をいうか。この一帯のどこかで毎年花をつけているのであろうか。しかし、どうも地名にはなりにくいような気もするが、どうであろうか。

②フジはフシ（節）の濁音化した語で「高所」をいう（語源辞典）。ハナは「先端部」のこと。従って、フジハナとは「高い側稜の先端部の土地」をいうのであろうか。150mほどこの小字よりも高い側稜の高みがあり、富士山に見立てたこともありうるのではないだろうか。

全国地図には、フジハナ地名は載っていない。

【ブ戸】

ブト。

木澤の遠山川右岸から注ぐ三ツ沢川の更に支流であるぶどう沢左岸にあり、標高653mの独立峰に接している。

ブトとは何か。二説を挙げたい。

①ブト←フドと転じたもので、フドはヒダ（襞）の変化した語で、「山ひだ」を意味する（国語大辞典）。従って、ブトとは「山襞のある土地」をいうのであろうか。独立峰がいくつかある側稜の尾根がある。

②ブト←ホトと転訛した語で、ホ（秀）・ト（処）から「突出した地形」をいう（語源辞典）。すなわち、ブトとは、「独立した峯のある土地」を意味するのだろうか。木沢城址がここにある。

国土地理院の2.5万分の一全国地図には、ブト地名は載っていないが、ブト地名は5ヶ所にあり、宛てられている字はさまざまである。

【ホカクボ】

南和田名古山の遠山川右岸の山中にある。等高線を切るように長く伸びた小字になっている。

ホカは動詞ホガス（「穿つ」の意）の語幹で「浸食地形」をいう（語源辞典）。従って、ホカクボとは「浸食されて窪地になったところがある土地」をいうか。これも分かりにくい地名である。

全国地図には、ホカクボ地名は記載されていない。

【ホケ】

木澤や南和田に数ヶ所ある。

ホケは「山などの水辺に接した崖」をいう。長野県下伊那郡遠山の地名だとある（以上は民俗地名語彙事典）。

当然のことながら、現地によくマッチしている。

ホケはホキから転じたか、あるいは動詞ホグ（解）の連用形ホゲの清音化した語ではないかという（語源辞典）。

なお、国語大辞典には、ホケは方言で「山などのきり立った所」だとしている。

全国地図には、ホケ地名は、一ヶ所にだけ中・大字として記載されている。

【ボケ】

南和田の名古山にあり、やはり遠山川に接する崖地になっている。

ボケ（木瓜）はバラ科の落葉低木であるが、これが地名になる可能性は殆ど無いという。

ボケはホケ、ホゲから転じたもので、「崩壊地形。浸食地形」をいう（以上は語源辞典）。

以上から、ボケもホケと同じで「山などの水辺に接した崖」を意味する。

全国地図には、ボケ地名は記載がない。

【ホソウ】

南和田の名古山、遠山川右岸に注ぐ柳木瀬沢の中流域右岸にある。

ホソウとは何か。これも難解地名であるが、全国地図には1ヶ所だけであるが、中・大字として挙げられており、「保曾」となっている。

二説を挙げておきたい。

①ホソウ←ホソイ と転じたか。ホソ（細）・イ（井）で、「幅の狭い谷川」であろうか。イ段→ウ段 の母音交替は「かなり多い」という（国語学大辞典）。以上から、ホソウとは「細い谷川が流れている土地」を意味するか。

②ホソウはホ（秀）・ソウ（添）で、「尾根に添って延びている土地」をいうのかもしれない。

【細ナギ】

ホソナギ。

和田の押出、遠山川右岸の山地にある。

ホソナギとは、字面の通りで、「幅の狭い崩崖のあるところ」を意味するか。急傾斜地で崩壊幅が狭まっているのであろうか。

全国地図には、ホソナギ地名は載っていない。

【本町甫】

ホンマチウラ。

和田の新町にある。

ウラはウレ（末）に同じで「川の上流」を意味する（語源辞典）。従って、ホンマチウラとは「本町の山側の土地」をいうのであろう。小字図には「本町」はなく、現在の本町は「中ノ島」になっている。これらの経過は掌握できていないが、国土調査の前後で齟齬があるのかもしれない。

全国地図には、ホンマチウラ地名は挙げられていない。

【前畑】

マエハタ。

和田の押出の集落の中に、三ヶ所、小さな小字がある。

マエハタとは「（所有者の家の）前にある畑」であろう。むろん定畑である。

全国地図にはマエハタ地名が17ヶ所、マエバタ地名が2ヶ所、中・大字として挙げられており、その全てに「前畑」の字が宛てられている。小字にはなっていないが、中・大字にはなりにくいと思っていたので、やや意外な数字である。

【巻金】

マキガネ。

木澤の中根の遠山川左岸の山中にある。

マキガネとは何をいうのであろうか。二説を挙げる。

①マキは土石流か地滑りで「その先端が地物を巻きこんで流下するさま」（民俗地名語彙事典）をいうか。ガネ←カネ←カナ←カキナグ（搔・薙）と転じた語で、「搔き薙がれたような土地」の意（語源辞典）。以上から、マキガネとは「土石流などによる崩落があった土地」を意味するか。

②マキは動詞マク（巻）の連用形が名詞化したもので「巻きつける」の意。ガ

ネはカネ（矩）で「直角」をいうか。すなわち、マキガネとは「(等高線や道などが)尾根をほぼ直角にとり巻いているところ」をいうのかもしれない。上村川と遠山川の合流点に近いところにある。

全国地図には、マキガネ地名は2ヶ所に挙げられている。

【牧釜】

マキガマ。

南和田飯島、遠山川右岸で牧釜沢が流れ込む所にある。

マキは「土石流などで崩れて埋まった所」をいい、ガマはカマで「淵」のこと（民俗地名語彙事典）。

従って、マキガマとは、「土石流が押し出したところで、(遠山の)上流側には淵もある土地」ということになりそうだ。

全国地図には、マキガマ地名もマキカマ地名も載っていない。

【榎平】

マキダイラ。

八重河内の梶谷川右岸の小嵐川との合流点に近いところにある。

マキは動詞マク（巻）の連用形で、ダイラは「小平地」をいうか。従って、マキダイラとは「傾斜地で取り巻かれている小平地」を意味するのであろう。傾斜地は一方が下りで、反対側が登りの傾斜地になっている。

全国地図には、マキダイラ地名は3ヶ所にあり、うち2ヶ所が「榎平」になっている。

【榎ノ上】

マキノウエ。

八重河内の「榎平」小字に接している。

マキノウエとは「榎平小字の上の土地」をいうか、それとも「山中の小平地の上にある傾斜地」を意味するのであろう。

全国地図には、マキノウエ地名は中・大字として3ヶ所にあり、いずれも「榎」と「上」の字が宛てられている。

【榎林】

マキバヤシ。

南和田の十原集落の東方山地にある。

マキバヤシとは何か。主に国語大辞典に依りながら二説を挙げておく。

①マキは「ナラ、クヌギなどの総称」である。マキバヤシとは「ナラやクヌギの林地になっている所」をいうか。炭焼や薪にしたのであろうか。

②マキは「スギやヒノキなど」をいうか。ハヤシな「植林したところ」の意。すなわち、マキバヤシとは「スギやヒノキを植林したところ」を意味するのであろうか。

全国地図には、マキバヤシ地名は挙げられていない。

【マグラギ】

南和田十原のマキバヤシ小字の北隣にある。

マグラキとは何か。語源辞典によりながら、二説を挙げる。

①マグラギ←マクラキ と転じたものか。マ（真）・クラ（剝）・キ（場所接尾語）で、「崩壊地のあるところ」を意味するか。マは単なる接頭語、クラは動詞クル（剝）の連用形クリの転じた語。

②もしかしたら、マクラギは鉄道に使う「枕木」かもしれない。すなわち、マクラギとは「鉄道の枕木に使う用材を伐りだしたところ」か。これが正しいとすれば、この地名発生時期は近代になる。

マグラギ地名も、マクラギ地名も、全国地図には記載されていない。

【孫平作り】

マゴヘイツクリ。

和田の夜川瀬、遠山川右岸の金七沢の上流部右岸にある。

マゴヘイツクリとは「孫平さんが所有する焼畑耕作地」を意味するものと思われる。

【マダラ】

南和田の名古山、遠山川右岸に注ぐマダラ沢右岸の山地にある。

マダラとは何を意味しているのであろうか。これも分かりにくい地名であるが、二説をあげておきたい。

①マダラ（斑）は「地形が複雑に錯綜している地」をいう（語源辞典）。幅の狭い尾根の両側に谷が迫るなどの地形を指しているのであろうか。従って、マダラとは「谷と尾根が絡み合っている山地」をいうのかもしれない。

②マダラ←マタラ と濁音化したもので、マタ（股）は「二本に分かれている地形」をいうか。マダラとは「二股に分かれているマダラ沢に添っている山地」を意味するか。

なお。マダラは摩多羅神との関係があるかもしれないと考えたことがあった。天台密教と関わっていると思われるので、遠山に現れても不思議ではないと判断した。しかし、その影も見えないので、取りあげないことにした。

全国地図には、マダラ地名が1ヶ所に挙げられている。宛てられている字は「斑」。

【町浦】

マチウラ。

木澤の中心地、遠山川右岸に注ぐ三ツ沢川の右岸にある。

マチ（町）は集落地をいい、ウラ（浦）には「水際」の意がある（国語大辞典）。

従って、マチウラとは、「集落内の川沿いの土地」を意味していると思われる。

全国地図には、マチウラ地名は15ヶ所に中・大字として挙げられているが、「町浦」の字は1ヶ所のみで、あとは「町裏」となっている。

【松下】

マツシタ。

南和田名古山の遠山川右岸の山中にある。

マツシタとは何か。二説を挙げる。

- ①マツシタとは、文字通りで、「目立つ松の木があった、その下方の土地」をいう。目印になっていた松で、あるいは山の神の依代でもあったか。
- ②マツは動詞マツハル（纏）から「巻いたような地形」の意もありうるという（語源辞典）。従って、マツシタとは「側稜の尾根が巻いている、その下方にある土地」をいうか。

全国地図には、マツシタ地名は11ヶ所に記載があり、うち10ヶ所は「松下」の字が宛てられている。

【松島・マツシマ】

マツシマ。

木澤の中根と和田の山原にある。中根のマツシマは遠山川左岸にあるが川がヘアピンカーブしており、山原のマツシマは遠山川右岸で、支流の女沢と二面で川に接している。

マツシマとは何か。ここも二説を挙げておきたい。

- ①マツシマとは、字面の通り、「アカマツが自生している水路に面した土地」をいうか。
- ②あるいは、マツには先述のように「巻いたような地形」の意があるので、マツシマは「川が巻くように流れている川辺の土地」を意味する可能性もある。

全国地図には、マツシマ地名は85ヶ所も中・大字として挙げられており、うち82ヶ所が「松島」となっている。マツ（松）は瑞祥地名であるためであろう。

【マツチャマ】

木澤の池口境の山地にある。

マツチ（真土）は「耕作に適している良質の土」をいう（国語大辞典）。焼畑耕作地である高知県吾川郡でも「焼畑で土壤に水分が多く粘り気がある。小石が多く、どんな作物でもよく穫れる。雨が降り続いたらよく固まる」（民俗地名語彙事典）とある。

以上から、マツチャマとは「粘り気のある良質の土になっていて焼畑耕作に適した山地」を意味するのであろう。

しかし、全国地図には、マツチャマ地名は挙げられていない。

【松ノ田】

マツノタ。

木澤の中心集落の南側、遠山川右岸の山中にある。

マツノタとは何か。主に民俗地名語彙事典に依りながら、二説を挙げる。

- ①マツ（松）・ノ（助詞）・タ（平坦地）で、マツノタとは「アカマツが自生している台地」をいうか。この小字は遠山川の川原から一段上がった、勾配の緩い台地にある。
- ②ノタ（ヌタとも）は「山中の湿地」をいう。猪などが泥を塗りつけるヌタ場である。従って、マツノタとは「アカマツが自生していて、湿地のある山地」

を意味するか。

あるいは、マツはマツ（待）ではないかという考えも浮かんだが、上村の下栗にはヌタ待ち獵の禁忌伝承がある（遠山谷中部の民俗）というので、挙げないことにした。

全国地図には、マツノダ地名もマツノダ地名も載っていない。

【的場】

マトウバ。

和田新町の山地への登り口にある。

マトウバはマトバが長音化した語であろう。

マトバは「的を懸けて弓を射る練習をする場所」（国語大辞典）である。和田城の武士たちの矢場であったと思われる。

以上から、マトウバ小字は「矢場のあった土地」をいう。

国土地理院の2.5万分の一地図には、マトウバ地名は載っていないが、マトバ地名は、58ヶ所で中・大字として挙げられており、うち57ヶ所で「的場」の字が宛てられている。

【マトウバネ】

南和田の大町、和見集落の裏手の山地にある。

マトウバネとは何を意味しているのでしょうか。三説を挙げたい。

①マトウバネ←マトウハネ と濁音化したもので、マトウ（纏）は「(山裾などに)まとわりついたような場所」（語源辞典）であり、ハネはハ（端）・ネ（根）で「末端部の山裾」であろうか。すなわち、マトウバネとは「側稜にまとわりついたようになっている裾地」をいうか。マトウ←マトヒ ウ音便化した語で、マトヒは動詞マトフの連用形が名詞化したものであろう。

②バネ←ハネ←ハニ（埴）と転訛したか。ハニは「黄赤色の粘土」をいう（語源辞典）。従ってマトウバネとは、「尾根を取り巻いているように黄赤色の粘土がある所」か。しかし、ハニがあるかどうかは未確認。

③可能性は小さいが、もしかしたら、マトウバ←マトバ（的場）と長音化したのかもしれない。ネ（根）は「麓」か。以上から、マトウバとは「射場のあった尾根の麓」かもしれない。近くにミヤ（宮）地名があるので、弓に関わる神事が執り行われたことも無かったとはいえないので、挙げておく。

全国地図には、マトウバネ地名は記載が無い。

【ママ】

南和田の大町に二ヶ所ある。一つは和見の唐土神社のある岬に、もう一つは遠山天満宮の北側の谷を流れる支流の中流域右岸にある。

ママは東日本に多い方言で、「急な傾斜地。崖」を意味する（国語大辞典）。

語源ははっきりしないが、「あわてる。どもる」ことをママヤクという。これも伊那谷南部はもとより、東日本に多い方言である。このママヤクからママが生じたとするのは、首肯できるが、そのママヤクの語源は何かと辿ると分からないということになる。こればもどかしいが、やむをえまい。

全国地図には、ママ地名は4ヶ所に中・大字として挙げられており、うち、3ヶ所が「間々」となっている。

【マ下】

ママシタ。

南和田の大町にある。遠山川左岸の川原と川岸の崖地にある。

ママシタとは「崖の下の平地」を意味するのであろう。

全国地図にはママシタ地名は1ヶ所だけであるが、中・大字として挙げられており、「儘下」となっている。

【大豆栃】

マメトチ。

これも南和田の大町、遠山川左岸の川辺に二ヶ所ある。

マメトチとは何か。主に語源辞典に依りながら三説を挙げる。

①マメは「小さい地域」をいい、トチは「ふざけた」などの意を示すトチと関係し「崩壊地形」を意味する。以上から、マメトチとは「小さな崩壊地がある場所」を意味するか。

②マメにはママと同じく「崩崖」の意もある。トチは「栃の木」。すなわち、マメトチとは「栃の木が自生しており、崩崖のある土地」をいうのであろうか。

③マメトチとはマメ（豆）・トチ（栃）で、「栃の木も自生していた焼畑だった所」を意味するか。大鹿には、マメトチという焼畑耕作地があったという（焼畑民俗文化論）。

全国地図には、マメトチ地名は載っていない。

【丸畑】

マルバタ。

南和田名古屋山の集落の奥地にある。

マルバタとは何をいうか。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①マルバタ←マル（丸）・ハ（端）・タ（処）と転じたもので、マルバタとは「先端部が丸くなっている側稜」のことを指すか。

②バタ（畑）は「焼畑」のことで、マルバタとは「裾が丸くなっている尾根もある焼畑耕作地」をいうか。

全国地図には、マツバタ地名もマルハタ地名も記載されていない。

【丸林】

マルバヤシ。

南和田大町にある。遠山天満宮脇の谷川中流部右岸の山地になる。

マルバヤシとは「等高線が丸く延びている林地」であろうか。

全国地図には、マルバヤシ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「丸林」の字が宛てられている。

【丸程】

マルホド。

木澤小道木の遠山川右岸に注ぐサワカラ沢の右岸山地にある。

マルホドとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①マルは「等高線が円形になっている所」をいい、ホドは「女陰」から「河谷」を意味するか。すなわち、マルホドとは「等高線が円形になっていて河谷のある土地」をいうのであろうか。

②マルは動詞マルグ（転）の語幹で「崩崖」のこと、ホドも動詞ホドク（解）の語幹で「崩壊地」をいう。マルホドとは、同義語を重ねて、「崩壊地のある土地」を意味するか。

全国地図には、マルホド地名は記載されていない。

【丸山】

マルヤマ。

和田池口の池口川左岸から南方に続く山地にある。

マルヤマとは「円錐形の山で山の神の帰るところ」を意味するのであろうか。南方の尾根筋には、標高 1440mの峯があるが、この山を指しているのであろうか。

全国地図には、マルヤマ地名は中・大字として352ヶ所に記載があり、うち321ヶ所で「丸山」の字が宛てられている。

【水口】

ミズクチ。

和田新町の山地の麓にある。

ミズクチとは「泉で水が湧き出ているところ」をいうのであろう。生活用水だったと思われる。近くには水路も田んぼもないようだ。

全国地図には、ミズクチ地名は6ヶ所に挙げられており、その全てが「水口」となっている。またミナクチ地名は17ヶ所が中・大字として記載されており、うち15ヶ所が「水口」となっている。

【ミズタレ】

八重河内の梅平にある。八重河内川左岸にある支流の末端部になっている。地形図では、合流点が見えていないが、どうなっているのか、現地ではまだ確認していない。

ミズタレとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①タレは動詞タル（垂）の連用形が名詞化した語で「流れ落ちること」をいうか。従って、ミズタレとは「谷川の水が流れ落ちている土地」を意味するものと思われる。

②もし、合流点がはっきりしないのであれば、次のような解釈も成り立つ。ミズタレ←ミスタレ と濁音化したもので、ミスタレはミ（水）・スタレ（衰）で、「水路がはっきりしなくなっている所」かもしれない。スタレは動詞スタル（廃）の連用形スタリが転訛した語。イ段→エ段の母韻交替は「中世ごろ目立って多い」という（国語学大辞典）。

全国地図には、ミズタレ地名は載っていない。

【水ノウツ】

ミズノウツ。

南和田名古屋山の遠山川右岸に注ぐ柳木瀬沢の信玄滝上流左岸にある。

前にも触れたように、民俗地名語彙事典によれば、ウツとは「カモシカや猪の通路」をいう。

従って、ミズノウツとは「谷川があって、獣の通路になっているところ」をいうか。獣を待ち受けたり、罾を仕掛けた場所であろう。

全国地図には、ミズノウツ地名は挙げられていない。

【水ノ口】

ミズノクチ。

和田山原の遠山川右岸の奥地にある。

ミズノクチとは先述のミズクチ（水口）と同じで、「自然湧水のあるところ」をいうのであろう。山作業や焼畑耕作者たちが利用した水源であったと思われる。

全国地図には、ミズノクチ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「水」と「口」の字が使われている。

【水ノ山】

ミズノヤマ。

南和田の大町、遠山天満宮より奥地にある谷川に沿った小字。

ミズノヤマは字面の通りで「谷川が流れている山地」となるが、これで他と区別できる地名になりうるのか、という疑問はあるが、他の解釈は浮かばない。

全国地図にはミズノヤマ地名は載っていない。

【見セ】

ミセ。

遠山川右岸の和田押出集落の中にある小さな小字で、押出沢左岸の川辺になっている。

ミセといえば、一般的には商品を並べている店のことであるが、小字発生期には市場はあったが、店は無かったのではないだろうか。

ではミセとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げておきたい。

①ミはミズ（水）の下略で「川」の意。

セはセ（瀬）で、ミセとは「瀬になっている所の川辺」をいうか。

②セはセ（背）で「陰の方」をいう。従って、ミセとは「川の日当たらない方にある土地」をいうのかもしれない。

全国地図には、ミセ地名が12ヶ所に中・大字として挙げられているが、「見セ」は無い。

【ミソノ】

木澤の遠山川右岸の木沢集落の北側にあり、小字の中を美園沢が流れており、正八幡神社もある。

美園は「平安時代以降、神社の荘園の称の一つ。本来、供御の果実、蔬菜類の調進のための園地であったが、のち通常の所領と異ならなくなった。特に伊

勢神宮に多く、その他、石清水八幡宮、熱田神宮にも見られる」（国語大辞典）という。

従って、ミソノとはこの小字にある「正八幡神社に付属し、その収穫を祭典や造営などの諸費にあてた土地」をいうのであろう。

木沢八幡神社は遠山郷全体の総鎮守であったという伝承があるという（遠山霜月祭 南信濃②）。ここに美園があるのは当然とも考えられる。

全国地図には、ミソノ地名は33ヶ所に中・大字として記載があり、うち16ヶ所が「御園」、8ヶ所が「美園」などとなっている。

【三ツ澤】

ミツザワ。

遠山川右岸の木沢集落を流れる谷川の名前にもなっており、この川の右岸山地にある。木沢城址北側の傾斜地である。

ミツザワとは「三本の支流が合流している谷川が流れている所」であろうか。小字図は空白になっているが、2.5万分の一「上町」図をみると、最上流部で三つの谷が一つになっているのを見てとることができる。

ミツザワという谷川があつて、その後で、ミツザワ小字が生まれたものと思われる。

全国地図には、ミツザワ地名は7ヶ所に中・大字として挙げられており、うち5ヶ所が「三ツ沢」となっている。

【三ツ沢】

ミツザワ。

小沢の他に、和田夜川瀬にあるミツザワ。これも遠山川右岸に注ぐ金七沢の右岸にある小字で、ここの二ヶ所で金七沢は曲流している。

夜川瀬のミツザワは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①ミツは動詞ミツル（満）の連用形が名詞化したもので「ぎりぎりのところまで迫る」ことを意味しているか（語源辞典）。従って、ミツザワとは「ぎりぎりのところまで迫っている谷川が流れているところ」をいうか。ここは峡谷となっていて、上流の方が谷幅は広がっている。

②2.5万分の一「伊那和田」図でみると、金七沢の最上流部は、やはり三つの谷が合流している。ミツザワとは「三本の支流が合流した谷川のほりにある土地」となる。しかし、ここは、谷川の名前が ミツザワ→金七沢 と変わったのではないか、とするのが合理的と思われる。金七さんが所有関係を明らかにするために地名を変更したのであろうか。

【水口】

ミナクチ。

和田の大島にある。遠山川左岸の大島集落から見上げる傾斜地になっており、麓には十一面観音が祀られている。

和田新町のミズクチ（水口）や和田山原のミズノクチ（水ノ口）と同様、このミナクチも「自然の湧水があるところ」と思われる。

【南沢】

ミナザワ。

和田新町に二ヶ所ある。正善寺の南側を流れて遠山川に注ぐ南沢の右岸になる。

ミナはミナミの下略であろう。従って、ミナザワとは「(正善寺か大屋敷の)南側を流れている谷川に沿った土地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ミナザワ地名は6ヶ所にあるが、すべて「皆沢」となっている。

【ミネジオリ】

ミネジオリ。

南和田、遠山川右岸の名古山集落の北西方山地にある。遠山川支流の大堀沢の右岸になる。

ミネジオリはミネシオリが濁音化した語。ミネは「尾根筋」をいい、シオリは動詞シヨル(萎)の連用形が名詞化したもので「しなって撓んだ地形」(語源辞典)をいう。

以上から、ミネジオリとは、「尾根筋の側稜が分かれて等高線が撓んだようになっている山地」をいうか。

全国地図には、ミネジオリ地名は載っていない。

【都畑】

ミヤコハタ。

和田の大島、池口川北方の尾根付近にある。

ミヤコハタとは何か。これも難しい地名であるが、二説を挙げたい。

①ミは接頭語で「地名につけて美称として用いる」(国語大辞典)という。ヤコ←ヤク(焼)から転訛、ウ段からオ段への母韻交替は「各時代にわたっておりきわめて例が多い」(国語学大辞典)という。ヤクハタはヤキハタ(焼畑)と同じ。従って、ミヤコハタとは「焼畑耕作が行われた土地」を意味するのではないだろうか。

②ミヤコハタはミヤコバタが清音化した語で、ミヤ(宮)・コバ(焼畑)・タ(処)か。すなわち、ミヤコハタとは「神社に供された焼畑耕作地」をいうのかもしれない。神社だとすれば、大島にある十一面観音を祀るお宮か。また、ミヤコハタにある峯では山の神が祀られた可能性もある。

全国地図には、ミヤコハタ地名は記載が無い。

【宮戸ノ向・宮戸向】

ミヤドノムカイ・ミヤドムカイ。

木澤の上村境にあり、上村川右岸になる。

ミヤドノムカイもミヤドムカイも同じ内容か。では、ミヤドノムカイとは何を意味するのか。主に国語大辞典に依りながら二説を挙げざるをえない。

①ムカイ(向)は動詞ムカウの連用形が名詞化した語で「互いに正面に対すること。相對すること」。ミヤドはミヤ(宮)・ド(処)で「神靈の鎮まる所」を

いう。以上から、ミヤドノムカイとは「神霊の鎮まる所の対岸にある土地」を意味するのであろう。その神霊の鎮まる所はどこか。これがあまりはつきりしない。真正面だとすると、隣村の上村にある赤沢山神になる。同じ村内であれば、中立にある高津神社であるが、少し真正面からは外れているし、勧請したのが明治41年(1908)だというので、新しすぎてミヤドノムカイ小字の発生時とはズレてしまう(遠山霜月祭 南信濃②)。では、同じ中立だが元稲荷かもしれない。しかし、これもミヤドノムカイ小字の正面とはいえない。ということで、小字のミヤに当たるお宮を特定できないでいる。

②ミヤはミ(水)・ヤ(菴) 鴨しれない(語源辞典)。すなわち、ミヤは「湿地」を意味するのではないだろうか。

従って、ミヤドノムカイとは「(氾濫原の) 湿地の対岸にある山地」をいうのかもしれない。小字図を見ると、上村川右岸は山地になっているが、左岸は氾濫原が広く、現在も田畑や住宅地になっている。

全国地図には、ミヤドノムカイ地名もミヤドムカイ地名も記録されていない。

【宮ノ上】

ミヤノウエ。

木澤の須澤と南和田の大町にある。

ミヤノウエとは「お宮の上方にある土地」を意味する。

大町のミヤノウエ小字は和見の集落の山よりにあるが、この神社といえば、小字図では唐土神社ということになるが、少し離れすぎているようにも見える。宮の前沢という谷川があるが、唐土神社からはさらに離れることになる。あるいは、宮の前沢とミヤノウエ小字の間には確認できない神社があったのかもしれない。

須澤にあるミヤノウエ小字はなんか所にもあって、面積を大小とさまざまになっている。ここのお宮は遠山川の川原にあった宇佐八幡三社旧地と笹子稲荷神社を指しているのであろうか。

全国地図には、ミヤノウエ地名は中・大字として、29ヶ所に挙げられており、その全てに「宮」と「上」の字が宛てられている。

【宮の木】

ミヤノキ。

木澤小道木の遠山川左岸にあり、白山神社も祀られている。

ミヤノキとは何か。主に語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ノキはヌキ(抜)が転じた語。「きわめて多い」といわれている。イ段→オ段の母韻交替である(国語学大辞典)。以上から、ミヤノノキとは「お宮の周辺で崩崖のあるところ」をいうか。

②ノキは長野県伊那郡や水窪の方言で「家の裏手の土地」をいう。従ってミヤノキとは「お宮の裏手にある土地」を意味するか。

全国地図には、ミヤノキ地名は記載されていない。

【宮ノ口下】

ミヤノクチシタ。

南和田大町の遠山川の宮の前橋がかかっている所にある。

ミヤノシタグチとは「お宮の参道の下の方にある土地」を意味するのであろう。

ミヤノクチシタ地名は全国地図には見えない。

【宮前】

ミヤノマエ。

和田の押出にある。遠山川右岸の伊ノ木沢と押出沢の間にある小さな小字。

ミヤノマエとは「お宮の前にある土地」を意味するのであろう。ここでいう、お宮はどこにあるのか。伊ノ木沢を渡れば、若宮神社があり、押出沢を渡れば山住神社になる。これらのどちらかであるのか、それとも沢を渡らないで、山地に向かえば、そこに山の神の祠でもあったのか。いずれにしても、はっきりはしない。

【ミ山】

ミヤマ。

和田の池口川右岸沿いの山地になっている。大島と池口の集落の間になる。池口川を渡るノド橋がある。

ミヤマとは「山を敬い、ほめたたえていう語」（国語大辞典）であるという。ここには標高794.4mの独立峰がある。この山をミヤマと呼んでいたのではないだろうか。神体山と思えるが、神そのものか、あるいは山の神のおわす場所であったのであろう。

なお、脱線するが、ミヤマには松虫草の意もあり、春には食べられる山の草で茹でてひたしものにするという。上伊那郡の話である。（改訂総合日本民俗語彙）

全国地図には、ミヤマ地名が中・大字として36ヶ所に挙げられている。

【向イ】

ムカイ。

木沢集落の三ツ沢川左岸から北西側山地に続く傾斜地にある。

ムカイとは何か。二説を挙げたい。

①ムカイは「向こう側の土地」をいう。向こう側とこちら側の境は、川か谷か、それとも尾根か、ということになるが、この場合は三ツ沢川であろう。小字が川辺に張り付いて長く延びているからである。従って、“こちら側”とは木沢集落の中心地か、浅間神社を祀る土地であろう。

②ムカイ←ムケ（剥）と転じた語で「剥かれたような地形」をいう（語源辞典）。すなわち、ムカイとは「崩壊地のある土地」ということになるが、どうであろうか。

全国地図には、ムカイ地名は94ヶ所にも中・大字として挙げられている。宛てられている字は、「向」が55ヶ所、「向井」が32ヶ所となっている。

【向方】

ムカガタ。

南和田飯島、遠山川右岸に注ぐ野口沢の上流にある。

ムカガタは何を意味するのか。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ムカは動詞ムケル（剥）の連用形ムケが転訛した語で「剥かれたような地形」を意味する。エ段→ア段の母音交替は「あまり多くない」（国語学大辞典）というがあり得ないわけではない。カタ（方）は「場所」をいう。以上から、ムカガタとは「崩壊地のある土地」をいう。崩壊地の多い遠山地方では、それらの区別するために、崩壊地をいろいろと言葉を換えながら表現している。

②ムカは「向う側」で、カタ（方）は「方向」をいうか。すなわち、ムカガタとは、「向こう側の土地」を意味するのであろう。しかし、どこから見ての“向こう側”なのか、野口沢の谷がよく見える場所という、遠山川対岸にある大町の集落になる。とすれば、ムカガタとは「（大町集落から見て）向こう側にある山地」ということになりそうだ。

全国地図には、ムカガタ地名は1ヶ所に中・大字として挙げられている。その2.5万分の一地図は、むろん天龍村のある「三河大谷」である。

【麦地・ムギ地】

ムギジ。

和田の漆平島と新町の境界域に三ヶ所ほどある。遠山川、池口川と小池沢に囲まれた盛山の中腹部である。

ムギジとは何か。二説を挙げる。

①ムギジは「麦をつくっていた焼畑耕作地」か。水窪にもある小字名で、水窪では、焼畑地で豆の裏作に麦を作っていたという（焼畑民俗文化論）。

②ムギは動詞ムク（剥）の連用形の【濁音化した語で、「崩壊地形」をいい、ジはチ（地）で「土地」のこと（以上は語源辞典）。従って、ムギジとは「崩崖のある山地」を意味するか。

全国地図には、ムギジ地名は一ヶ所だけだが、中・大字として挙げられており、「麦地」となっている。

【ムクノ沢】

ムクノサワ。

南和田の大町の遠山川左岸にそそぐ谷川に沿った細長い小字。

ムクノサワとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ムク（尨）は「樹木などの生い茂っているさま」をいう。すなわち、ムクノサワとは「樹木の茂った谷川が流れている所」を意味するか。

②ムクは動詞ムクル（剥）の語幹から「剥き出しになった地形」をいう。従って、ムクノサワとは「崩崖のある谷川が流れている所」をいうのかもしれない。

全国地図には、ムクノサワ地名は載っていない。

【ムジナ岩】

ムジナイワ。

木澤の八日市場、遠山川左岸の日月神社を祀る台地の上の方にある山地にな

っている。

ムジナイワとは何か。二説を挙げる。

- ①ムジナイワとは文字通り、「狸などの棲息している岩場のある土地」をいうか。
- ②ムジナ←ムシ・ナ（助詞ノ）と濁音化したもので、ムシは動詞ムシル（糞）の語幹で「崩壊地形」をいい、イワは「崖」の意か（以上は語源辞典）。従って、ムジナイワとは「崩崖のある土地」を意味するのであろうか。

全国地図にはムジナイワ地名は載っていない。

【村沢】

ムラサワ。

南和田の名古山、遠山川右岸にあり、対岸に向けて飛び出したような半島状の岬を取り巻いている。

ムラサワとは何か。語源辞典によって二説を挙げる。

- ①サワは「谷川」であるが、この場合は遠山川を指す。ムラはムラ（斑）と関連して「凹凸の多い土地」をいう。

以上から、ムラサワとは「凹凸の多い川沿いの土地」となるか。

- ②ムラはモリ（盛）が転訛した語で、「盛り上がった所」を意味する。従って、ムラサワとは「盛り上がった丘陵のある川辺の土地」をいうか。しかし、モリがムラに転じる例がどうなっているのか、気がかりは残る。

全国地図にはムラサワ地名は記載されていない。

【村中】

ムラナカ。

和田の遠山川右岸の押出にある小さな小字。

和田の押出集落の中にある。伊ノ木沢と押出沢に挟まれた土地となっている。ムラナカとは字面の通りで、「集落の中にある土地」を意味するのであろう。

国土地理院の2.5万分の一全国地図には、ムラナカ地名は、12ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「村中」の字が宛てられている。

【茂順山】

モズヤマ。

南和田の大字にある。遠山川左岸に注ぐ宮の前沢左岸にあり、宮の前沢の対岸には和見の集落がある。このモズヤマ小字にも数軒の民家がある。

モズヤマとは何をいうのか。二説を挙げたい。

- ①モズヤマとは、字面の通りで「モズ科の鳥であるモズがいる山地」をいうのだろうか。

- ②モズとは「族（まぶし）」のこと、蚕が繭を作る時に移すわら製の床ヲマブシと呼んでいる。これをモズというのは山梨県南巨摩郡、諏訪、静岡県だという（方言大辞典）。遠山地方にも、この語があったとすれば、モズヤマとは「マブシのような尾根がある山地」とうことになりそうだが、どうだろうか。

全国地図には、一ヶ所だけだがモズヤマ地名が中・大字として挙げられており、「百舌鳥山」の字が宛てられている。

【森越山】

モリコシヤマ。

南和田の大町にある。遠山天満宮の北側にある谷川へ降りる傾斜地になっている。

モリについては、「森のつく地名は、神社の所在地を意味することが多い。この場合、森はたんなる樹林の場所を指すのではなく、神社のある木立、つまり鎮守の森を指すのである」（民俗地名語彙辞典）という。

では、モリコシヤマとは何か。主に語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①コシは人のコシ（腰）の部分に見立てて「中腹」をいい、ヤマは「森林」を意味するか。以上から、モリコシヤマとは、「お宮のある頂上部の中腹傾斜地にある林地」をいうか。

②コシは「越えた所」の意か。すなわち、モリコシヤマとは「お宮の境内を越えていった山地」を意味するか。大町の集落からの目線であろう。

しかし、全国地図には、モリコシヤマ地名は採られていない。

【盛平】

モリタイラ（下伊那地名調査）、あるいは モリヘイ（長野縣町村字地名大鑑）か。

和田新町、遠山川・池口川・小池沢に囲まれた森山に中腹部の傾斜地にある。

「盛平」とは何か。いずれも語源辞典によりながら、二説を挙げておきたい。

①マリタイラであれば、モリ（森）・タ（接頭語）・イラ（苛）で、タは語調をととのえる接頭語、イラは「尾根筋の縁辺」をいう。従って、モリタイラとは「森山の尾根筋の縁辺部にある傾斜地」をいうか。

②モリヘイの可能性は高いように思えるが、ヘイはへ（辺）の長音化した語で、「あたり。そば」の意。従って、モリヘイとは「森山の傍にある土地」となる。

全国地図には、モリタイラ地名もモリヘイ地名も記載が無い。

【森山】

モリヤマ。

和田の押出と新町にあり、遠山川の左右両岸にそれぞれ一ヶ所ずつある。

「モリとはもともと霊の住む樹木の繁った所という感じで、遠く眺めてもあの山らしいと見分けのつきやすい、里近いたたずまいのよい山であることが多い」（山岳宗教と民間信仰の研究）という。「祖霊の住む山」ともいう。

以上から、モリヤマとは「姿かたちのいい、祖霊の住む山」であろうか。

全国地図には、モリヤマ地名は中・大字として、46ヶ所に挙げられており、うち42ヶ所には「森山」の字が宛てられている。

【八重川（河）内】

ヤエゴウチ。

八重河内にあり、大小様々な小字になっている。

ヤエは「数多く重なっていること」で、ゴウチ＝コウチで「川の流れを中心として、兩岸一帯の地域」をいう（以上は国語大辞典）。

以上から、ヤエゴウチとは「幾筋もの谷川が流れている流域の土地」をいう。かつては繋がっていた広大な土地の地名であった、と思われる。

国土地理院の2.5万分の1全国地図には、中・大字として、一ヶ所にだけヤエゴウチ小字が挙げられている。「伊那和田」図である。

【屋形戸】

ヤカタド。

南和田の十原にあり、遠山川右岸にあるが、一部は左岸にも懸かっている。

ヤカタドとは何か。意外と決めにくい地名で、いくつか仮説を挙げておきたい。

①ヤカタは文字通り、「有力者の屋敷」で、ドは「合流点」となれば、ヤカタドは「有力者の屋敷があり、支流が遠山川に注いでいる土地」ということになる。しかし、その痕跡は見当たらない。

②ヤ(岩)・カタ(片)・ド(処)と考える事も出来る(語源辞典)。すなわちヤカタドとは、「片側が岩石の目立つ急傾斜地になっている所」か。支流の屋形戸沢が遠山川の氾濫原に落ちる場所を小字図で見たとき、頭に浮かんだ仮説。

③ヤカタは字面の通りで、「矢のように突出している山稜」を指すのかもしれない。ドは「場所」を示す接尾語。この場合は、ヤカタドとは「側稜が氾濫原に着きだしている所」になる。

④ヤはヤツ(菴)の略で「湿地」をいい、カタ(方)は「場所」、そしてドが「合流点」か(以上は語源辞典)。すなわち、ヤカタドとは「湿地で二本の川が合流している土地」をいうかもしれない。

全国地図には、ヤカタド地名は見当たらない。

【ヤカンナギ】

和田の池口にある。池口川左岸で亀久保の対岸になる。

ヤカンナギとは何をいうのか。二説を挙げる。

①ヤカンは「薬罐」のこと。もっぱら薬草などを煎じたり、漢方を中心とする医薬用の調整具で、もともとは土製(素焼き)・陶磁製で深鍋状のものをういたという(民俗大辞典)。日葡辞書にもあるので、中世末には使われていたであろう。従って、ヤカンナギとは「深鉢状にえぐられたような崖地」を意味するのであろうか。

②ヤカンは「野干・射干」で狐の異名だという(国語大辞典)。日本霊異記にも登場しているという。もしかしたら、ヤカンナギとは、「狐が住んでいる崖地」をいうこともあり得る。

全国地図には、ヤカンナギ地名は記載されていない。

【焼越】

ヤキコシ。

和田の山原に二ヶ所、遠山川右岸の若松神社の北方山地に広いヤキコシ小字と狭いのがある。

ヤキコシとは何を意味するのか。これもよく分からない地名ながら、二説を

挙げたい。

①ヤキは動詞ヤク（焼）の、コシは動詞コス（越）の連用形が名詞化した語で、ヤキコシとは「焼畑で延焼したことがあった土地」をいうか。実際に使われた語かどうか、出会ったことのない言葉で疑問もある。

②コシはコシ（腰）で「麓」を指すか。すなわち、ヤキコシとは「焼畑耕作をする土地の麓の部分」をいうか。

全国地図には、ヤキコシ地名も載っていない。

【焼尾】

ヤキョウ。

南和田の飯島にあり、遠山川が屈曲して北西に流れを変える所にある。

ヤキョウとは何か。漢字になっているように、元はヤキオであったが、ヤキョウに転訛した語であろう。二説を挙げておく。

①ヤキは動詞ヤク（焼）の連用形が名詞化した語で「焼畑」を意味し、オはヲ（尾）で「山裾の末端」をいう（以上は語源辞典）。従って、ヤキョウとは「側稜の山裾で焼畑耕作が行われた土地」をいうのであろうか。

②「尾」は鉾脈の意味があるから、「焼尾」とは、「精錬」の意味であるという（新編伊那風土記）。であれば、ヤキョウとは「精錬が行われていた土地」をいうことになるが、どうであろうか。

全国地図には、ヤキョウ地名が2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「八京」の字が宛てられている。

【焼尾坂】

ヤキョウザカ。

これも南和田の飯島にあり、ヤキョウ小字の近くの上流側にある。

これもヤキオザカから転じた語であろう。

ヤキョウザカとは何を意味しているのか。これもヤキョウに倣って二説を挙げておく。

①ヤキョウザカとは「側稜の山裾で焼畑が行われていた傾斜地」というか。

②ヤキョウザカとは「精錬がおこなわれていた傾斜地」か。

全国地図には、ヤキョウザカ地名は載っていない。

【屋敷畑】

ヤシキバタ。

和田の押出、遠山川右岸に注ぐ押出沢と伊ノ木沢の間にある。

ヤシキバタとは何か。主に国語大辞典に依りながら、三説を挙げる。

①ヤシキバタとは「家を建てるべき土地であるが、畑になっているところ」をいうか。

②ヤシキバタとは「屋敷の敷地内にある畑」を意味するか。屋敷の敷地まで含めているなら、少し狭すぎる土地に思えるがどうか。

③ヤシキバタとは「以前、屋敷があったところの畑地」を意味するか。

全国地図には、ヤシキバタ地名は1ヶ所にだけ中・大字として記載があり、「屋

敷畑」となっている。

【弥治郎林】

ヤジロウバヤシ。

南和田の十原集落東方の山地にあり、急傾斜地と緩傾斜地の境界付近にある小字で、近くには十原配水池がある。

ヤジロウバヤシとは何をいうのであろうか。二説を挙げる。

①ヤジロウは固有名詞で、「弥治郎さん所有の山地」をいうか。焼畑が行われた土地かもしれない。

②ヤジはヤチ（菴）と同じで「湿地」を示す地名で、ロウはロ（接尾語）の長音化した語で「漠然と“場所”を示す」という（以上は語源辞典）。従って、ヤジロウバヤシとは「自然湧水のある山地」を意味するか。近くに配水池があるのは傍証になるか。

全国地図には、ヤジロウバヤシ地名は載っていない。

【休石】

ヤスミイシ。

木澤の川合にある。林道川合線添いの複数民家のあるところ、川合の権現山のすぐ隣地にある。

ヤスミイシとは何か。二説を挙げておく。

①ヤスミイシとは「神を勧請して祭りを行った場所」（改訂総合民俗語彙）か。近くにある権現山に関わって、熊野権現を祀る神事が行われたのかもしれない。

②ヤスミイシとは「護法が腰をかけて休む所で、祈祷と託宣がここで行われた」（五来重）という。山の神が憑いた山伏が護法飛びの間に休む場所か。

全国地図には、ヤスミイシ地名は中・大字として5ヶ所に記載があり、いずれも「休石」の字が宛てられている。

【休戸】

ヤスンド。

和田の大島、遠山川の左右兩岸に三ヶ所、和田新町の遠山川兩岸に三ヶ所ある。

ヤスンドは静岡県の方言で、奈良の吉野や十津川ではヤスバと知っているが「たいてい五、六丁に一つ、見晴らしのよい水の湧くような所に腰の高さくらいに石を置き、荷担ぎの者の休憩に便にしてあり、小祠などもある」（改訂総合日本民俗語彙）という。

ドはト（処）の濁音化した語で「場所」のことであろう。

以上から、ヤスンドとは、「見晴らしのいい、自然湧水のある休憩所で山の神を祀る場所でもあったところ」を意味するものと思われる。小字のヤスンドは「焼畑や材木などの運び出し、あるいは狩猟者の休憩所があった土地」をいうのであろう。

国土地理院の2. 5万分の1全国地図には、ヤスンド地名が、2ヶ所の中・大字として挙げられており、「休戸」「安戸」の字が宛てられている。

【ヤダル】

木澤の須澤にあるが、上村の上中根から南に見下ろす急傾斜地にある。

ヤダルはヤ（谷）・タル（垂）が濁音化した語。ヤには「流水」の意があり、タルは下伊那郡ほかの方言で「谷川の滝となっている所」をいう（以上は語源辞典）。

従って、ヤダルは「谷川に小さな滝がある土地」をいうのであろう。

全国地図には、ヤダル地名は載っていない。

【ヤタレ】

木澤の中根、遠山川右岸の急傾斜地にある。

ヤタレとは何か。二説を挙げる。

①ヤは「谷」で、タレは動詞タル（垂）の連用形が名詞化した語で「急傾斜地」をう。すなわち、ヤタレとは「(遠山川の) 谷にある急傾斜地」を意味するのであろう。

②地元に残る伝説では、ヤタレとは「遠山氏が射た矢が垂れてしまったところ」だという（遠山谷中部の民俗）。

全国地図には、ヤタレ地名は記載がない。

【ヤツクラ山】

ヤツクラヤマ。

和田大島の池口川右岸にあり、亀久保の池口の間になる。

ヤツクラ←ヤツクラと転じたか、あるいは、もともとヤツクラであったかは明らかではない。

ヤツクラとは「岩倉から出た語で、石の小山をなすもの。イワをヤと約、クラは天然の岩組のこと」（民俗地名語彙事典）という。

また、国語大辞典によると、ヤツクラは「山のけわしい難所」をいい、静岡県榛原郡本川根の方言で、そこにも「やっくら山」もあるという。

以上から、ヤツクラヤマとは「急傾斜地もあり、歩きにくい道の難所になっている所」を意味するのであろう。和銅の遠山大地震による埋没地であろうか。

【ヤトコ】

木澤の須澤にある。下栗簡易水道の須沢配水池付近に二ヶ所。上村下栗の尾根と遠山川の間の南向きの傾斜地になっている。

ヤト←ヤツ←ヤチ（菴）と転じたものか。イ段→ウ段の母韻交替は「かなり多い」し、ウ段→オ段の交替は「各時代にわたっており、きわめて多い」という（国語学大辞典）。従って、ヤトは「湿地」を意味する。コは「場所」を示す接尾語（語源辞典）。

以上から、ヤトコとは「自然湧水のある傾斜地」を意味するのであろう。配水池があることも、この解釈を後押ししてくれそうだ。

全国地図には、ヤトコ地名は4ヶ所に中・大字として記載されている。

【桺島】

ヤナギジマ。

八重河内の下市場にある。黒河内川が遠山川に合流する直前の左岸にあるが、大きな小字で一部は右岸にも懸かっている。

ヤナギジマとは、字面の通りで、「(八重河内川の) 柳の木が多い洲のあった地域」を意味するのであろうか。

東京のヤナギシマ(柳島)については「柳の木が多く、隅田川の州であったところから呼ばれた」(国語大辞典)とある。

全国地図には、ヤナギジマ地名は載っていないが、ヤナギシマ地名は12ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「柳島」の字が宛てられている。

【柳木瀬・柳瀬】

ヤナギセ・ヤナギゼ。

ヤナギセ小字は木澤の川合に、ヤナギゼ小字は南和田の名古山にあるが、由来は同じと思われる。川合は上村川と遠山川が合流する地点で、両河川の左岸になる。名古山では遠山川右岸にあり、支流の柳木瀬川が流れている。

ヤナギセ(ゼ)とは、これも字面の通りで、「柳の木が多い、川辺の土地」を意味すると思われる。

【柳瀬・ヤナセ】

ヤナセ。

いずれも木澤の上島にあり、上村川や遠山川の川辺になっている。

ヤナセもヤナギセと同じで、「柳の木が多い、川辺の土地」を意味するのであろう。

全国地図には、ヤナセ地名が34ヶ所で中・大字として挙げられており、うち25ヶ所が「柳瀬」となっている。

【ヤノコシ】

八重河内の梶谷川が小嵐川に合流する直前の左岸にあり、頂上には稻荷神社が祀られている。

隣にはセノコシ小字があり、双方ともに影響を受けあっていることも考えられるが、ここではヤノコシとして見ていきたい。

ヤノコシとは何か。よく分からない地名になっている。

ヤは「水。流水」をいい(語源辞典)、ノは助詞、コシ(越)には「越えた所」をいうか。

以上から、ヤノコシとは「川を越えていった土地」を意味するか。主要道は梶谷川右岸にあるので、右岸からの目線であろうか。

全国地図には、ヤノコシ地名は記載が無い。

【ヤブ・藪】

ヤブ。

ヤブ小字は遠山川支流の柳木瀬沢右岸にあり、「藪」小字は遠山川左岸の川辺にある。いずれも急傾斜地になっている。

ヤブとは何か。二説を挙げたい。

①ヤブは「焼畑耕作が行われていた所」をいうか。焼畑民俗文化論によれば、

九州や四国には多いというが、水窪にもヤブシマとかヤブシタという焼畑を意味する小字があるので、遠山でもあり得る。

②ヤブには動詞ヤブル（破）の語幹から「崩壊しやすい傾斜面」の意がある（語源辞典）。すなわち、ヤブとは「崩壊しやすい急傾斜地のある土地」を意味するか。

全国地図には、ヤブ地名は18ヶ所に中・大字として挙げられており、うち13ヶ所が「藪」や「藪」となっている。

【山神】

ヤマノカミ。

和田漆平島の森山中腹の南東向き傾斜地にある。

ヤマノカミは日本では最も古くから土着している神で、これに別の神などが習合して多彩な姿になっている。

この森山の山神がどのような姿になっているのかは、分からない。霜月祭の神名帳にある「山神」には相違ないと思うが、小祠や石碑なども確認できてはいない。

全国地図には、ヤマノカミ地名は中・大字として、70ヶ所に記載されている。

【山神平・山ノ神平】

ヤマノカミタイラ。

いずれも和田の押出にあり、互いに接している。伊ノ木沢と押出沢の間の側稜尾根の先端部にある。

ここの山神も神名帳押出で呼ばれる「山神」であることは間違いない。それ以上のことはわからない。

【山原】

ヤマハラ。

和田の遠山川右岸にあり、支流の樋口沢と屋形戸沢の間に6ヶ所ほどのヤマハラ小字が散在している。氾濫原や台地の平坦部、あるいは山地の麓の緩傾斜地にある。

ヤマハラとは「山の中の平地」（国語大辞典）をいう。遠山川の川原も「山中の平地」と見たのであろうか。

全国地図には、ヤマハラ地名は4ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てが「山原」になっている。

【山原前】

ヤマハラマエ。

押出の遠山川右岸の川辺にあり、ヤマハラ小字に取り囲まれている小さな小字である。

ヤマハラマエとは「山原集落地の前方の土地」を意味するか。

さすがに、全国地図にはヤマハラマエ地名は載っていない。

【山伏ツカ】

ヤマブシツカ。

木澤の遠山川右岸の熊野城跡の尾根を辿って登ったところの斜面にある。

山伏塚には必ず山伏に関する伝説や言い伝えが付随しているというが、この木澤の山伏塚はどうであろうか。

山伏塚は山伏が生きながら土中に入って入定したか、刑死あるいは殺されて崇るか、のどちらかである場合が多いというが、ここではどうであろうか。確認できないでいる。

全国地図には、ヤマブシヅカ地名もヤマブシヅカ地名も記載はない。

【雪ナギ】

ユキナギ。

南和田大町集落の南方山地の奥にある。

ユキナギとは何か。二説を挙げておきたい。

①ユキナギとは、字面の通りで「雪がなだれたことがあった傾斜地」を意味するか。素直に解釈すれば、このようになるが、ここで果たして雪崩があったのかどうか、という疑問はある。

②ユキは動詞ユク（行）の原義「ある場所から離れるように進み行く」義から、「地送り」などの地殻変動に関連する地名の可能性もあるという（語源辞典）。すなわち、ユキナギとは「地滑りがあった崩落地」をいうことになる。地震ということになれば、享保の遠山地震か。

全国地図には、ユキナギ地名は載っていない。

【湯澤】

ユザワ。

木澤の須澤、遠山川左岸に4ヶ所ほどある。現在、湯の沢温泉があるところも、これらのユザワ小字の中にある。硫黄質の冷泉が出ているという（遠山谷中部の民俗）。

ユザワとは何か。主に語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ユは「温泉」を意味するか。つまり、ユザワとは「温泉の出る谷川が流れている土地」を意味するのであろう。

②もしかしたら、ユはユ（斎）かもしれない。「神聖」の意である。すなわち、ユザワとは「神聖な谷川で、垢離の行を行う場のあるところ」だった可能性もある。近くには宇佐八幡社跡がある。

全国地図には、ユザワ地名は36ヶ所が中・大字として記載されており、うち35ヶ所には「湯沢」の字が宛てられている。

【湯田】

ユダ。

南和田の底稲にある。遠山川右岸の山地の麓に近いところで和田境になっている。

ユダとは何か。語源辞典に依りながら、三説を挙げざるをえない。

①ユ←キ（井）と転じた語で「泉」をいい、ダはタで「場所」の接尾語。すなわち、ユダとは「自然湧水のある土地」をいう。

②ユは動詞ユル（揺）に由来し、「地番がゆるむ」意から「崩壊地形」をいう。ユダとは「崩崖のある土地」を意味するか。

③もしかしたら、ユはユ（湯）で「温泉が出たことがある土地」かもしれない。言い伝えなどは未確認だから、可能性は小さいか。

全国地図には、ユダ地名は、14ヶ所に中・大字として挙げられており、うち13ヶ所には「湯田」の字が宛てられている。

【岩井戸】

イワイド。

南和田十原の遠山川左岸の急傾斜地にある。

イドはイトでイツ（巖）から転じた語で「険しい様子」をいうか（語源辞典）。ウ段→オ段の母韻交替は「各時代にわたっており、きわめて例が多い」（国語学大辞典）という。

従って、イワイドとは「岩の断崖になっている所」をいうのであろうか。

全国地図には、イワイド地名は6ヶ所に中・大字として記載があり、うち5ヶ所が「岩井戸」となっている。

【八日市場】

ヨウカイチバ。

木澤の上村川右岸にある。

ヨウカイチバとは、文字通りで、「毎月8日に市が開かれていた土地のあるところ」を意味するのであろう。

市が開かれる場所は川原が多かったという。上村川と右岸の支流が合流する地点にあり、鎌倉正八幡社や浅間神社旧地もあるが、詳しいことはわからない。主要道路も上村川右岸を通っていたのであろうか。

全国地図には、ヨウカイチバ地名は11ヶ所に中・大字として挙げられており、うち9ヶ所が「八日市場」となっている。

【八日市場向】

ヨウカイチバムカイ。

上村川左岸にある。

ヨウカイチバムカイとは、文字通り、「八日市場の向かい側の土地」をいう。上村川を隔てた向かい側を意味しているのであろう。

全国地図には、ヨウカイチバムカイ地名は記載が無い。

【ヨウヒ・ヨウ日・陽日】

ヨウヒ。

南和田の十原と大町、和田の山原にある。

十原のヨウヒ小字は集落の南方にあり西北西を向く斜面になっており、大町のヨウヒは集落の南側にあり北北西向きの傾斜地になっている。また、山原のヨウヒは集落の西にあり南南東に向けた傾斜地になっている。

ヨウヒとは何を意味しているのか。よく分からないながらも、二説を挙げて

おきたい。

①山梨県御坂の方言でヨウヒは「西面の山腹」をいう（国語大辞典）。従って、ヨウヒとは「西日の当たる傾斜地」を意味するか。ヨウもヒも太陽を指すのであろうか。西日にどのような意味があるのかは不明。しかし、山原のヨウヒには、この解釈は当てはまらない。

②ヨウはヨの長音化した語でヲ（峯）の転訛もあるといい、ヒは動詞ヒウ（轟）の語幹で「削りとられたような地形」をいう（語源辞典）。以上から、ヨウヒとは「側稜の末端部で崩壊地のある所」か。やや無理気味な解釈か。

③ヨウ（陽）は「ひなた」でヒ（樋）は「谷川」をいう（以上は語源辞典）。すなわち、ヨウヒとは「日当たりのいい谷筋」をいうか。

全国地図には、ヨウヒ地名は記載されていない。

【夜川瀬・夜川セ】

ヨカワセ。

和田の「夜川瀬」中字にある。

ヨガワセは享保の地震で堰き止められた遠山川が一時に決壊したが、その時に一夜のうちに広い川原ができて、それが今の夜川瀬部落になったといわれてきた。しかし、針間道夫氏の報告（伊研協シンポジウム 2015）によると、享保三年（1718）の地震より前の天和元年（1681）の文書には既に「夜川瀬」の文字があるという。そして、ヨカワセ小字が発生したのは、元和五年（1619）～天和元年（1681）の間であるという（野牧治『伊那』1999年8月号）。

では、ヨカワセとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カワセのカワ（川）は「地表に集まった水が、傾斜した陸地のくぼんだ所を流れるもの」というのは当然であるが、セ（瀬）には「広く、川の流れや潮流もいう」とある（以上は国語大辞典）。従って、カワセは単に「川の流れ」をいう。問題はヨであるが、ヨシ（良）の略で「美称」だという（語源辞典）。以上から、カワセとは「ゆったりと川が流れている所」をいうのかもしれない。美称をいただくのは、かつては遠山一の穀倉地帯（遠山谷南部の民俗）だったといわれている、夜川瀬にはふさわしいのではないだろうか。

②ヨはヨコ（横）の略で「水平方向に長いものの形容」だともいう。すなわち、ヨカワセとは「川に沿った水平に長い土地」を意味するのであろうか。

【ヨキノハナ】

和田の夜川瀬にある。遠山川右岸の川辺にあり、ヨカワセ小字と金七沢に挟まれている。

ヨキノハナとは何か。二説を挙げる。

①ヨキはオノ（斧）と同じ、ハナ（端）は「先端」をいう。つまり、ヨキノハナとは「山裾が手斧の先端部のようになっている土地」をいうか。

②ヨキ←ヨケ（除）と転じた語。エ段→イ段の母韻交替は「かなり見られる」（国語学大辞典）という。ヨケ（除）は上・下伊那郡の方言で「崖ぎわの通路」

をいう(長野県方言辞典)。従って、ヨキノハナとは「崖ぎわの通路が突き出ている土地」を意味するのであろうか。

全国地図には、ヨキノハナ地名は記載されていない。

【横畑】

ヨコハタ。

和田の押出と南和田の名古山にある。

押出のヨコハタは集落の中に二ヶ所にあるが、いずれも小さい。このヨコハタとは「所有者の家の横手にある畑」をいうのであろう。むろん定畑である。

名古山のヨコハタ小字は遠山川右岸の山地にある、広大な面積の小字になっている。ここは焼畑と思われる。ヨコには「左右に曲がっているものの形容」(語源辞典)の意があるので、ヨコハタとは「尾根の先端を包むように曲がっている焼畑耕作地」を意味すると思われる。

全国地図には、ヨコハタ地名は7ヶ所に中・大字として挙げられており、うち5ヶ所が「横畑」となっている。

【横道】

ヨコミチ。

和田の新町に一ヶ所、南和田の大町に二ヶ所、南和田の和見に二ヶ所ある。

ヨコミチとは何か。二説を挙げておく。

①ヨコは水平方向の意で、ヨコミチとは「等高線に沿った道になっている所」をいうか。

②ヨコミチとは、本道とは別の回り道をいう場合もありそうだ。そこで、ヨコミチとは、「本道でない脇の回り道のある土地」を意味するのかもしれない。

国土地理院の2.5万分の1全国地図には、ヨコミチ地名が42ヶ所にもあり、うち41ヶ所に「横道」の字を宛てている。

【横村】

ヨコムラ。

八重河内の梶谷川下流部の左右両岸に二ヶ所ある。いずれも八重河内の中心地と思われる遠山郷せせらぎの里の周りがある。

ヨコムラとは「(八重河内の)中心集落の傍にある小さな複数の民家がある所」をいうのであろうか。ヨコは「傍。かたわら」の意である(語源辞典)。

全港地図には、ヨコムラ地名は1ヶ所が中・大字として挙げられており、「横村」となっている。

【横山】

ヨコヤマ。

和田の山原に四ヶ所、遠山川右岸の氾濫原に近い傾斜地や平坦地にある。かつては一つながりになっていた小字であろう。

ヨコヤマとは何か。ヨコは先に述べたように「傍。脇」をいう。すなわち、ヨコヤマとは「集落の傍にある傾斜地」をいう。一ヶ所、樋口団地のあるヨコヤマ小字は、ほぼ平坦地で傾斜地とはなっていないが、すぐ近くにもヨコヤマ

小字があり、そこは斜面になっているので、その斜面になっているヨコヤマとは繋がっていたものと考えたい。

全国地図には、ヨコヤマ地名は96ヶ所に中・大字として記載があり、うち94ヶ所に「横山」の字が宛てられている。

【横山有ル】

ヨコヤマアル。

これも和田の山原にあり、二つのヨコヤマ小字の間にある。

ヨコヤマアルとは何をいうのであろうか。主に語源辞典に依りながら、二説を挙げておく。

①アル←アリ（有）と転じた語で「突出する」の意。イ段→ウ段の母韻交替は「かなり多い」といわれている（国語学大辞典）。従って、ヨコヤマアルとは「（遠山川に沿って）横に延びている傾斜地で、川の方に突き出ているところ」を意味するのであろうか。

②あるいは、アル←アレ（粗）と転訛したもので、「崩崖」をいう。すなわち、「ヨコヤマ小字にある崩崖地」かもしれない。しかし、エ段→ウ段の母音交替があったのかどうかは不明。

むろん、全国地図には、ヨコヤマアル地名は載っていない。

【林平久保】

リンペイクボ。

和田の集落のすぐ近くに一ヶ所、小さい小字があり、少し離れた山地に大きなのが、もう一ヶ所ある。

リンペイクボとは何か。二説を挙げる。

①リンペイは固有名詞か。すなわち、リンペイクボとは「林平さんが所有する窪地のある傾斜地」をいうのであろうか。焼畑耕作地であったと思われる。

②リンペイは「林」と「平」のそれぞれの字を当てて音読した者か（語源辞典）すなわち、リンペイクボとは「一時的な木材置き場のある窪地」をいうのかも。水窪にあるリンバには、この意味があるという（語源辞典）。

全国地図には、リンペイクボ地名は記載されていない。

【六ゼン】

ロクゼン。

南和田の名古山、遠山川右岸の名古山集落西方の山地にある。

ロクゼンとは何を意味するのか、全く分からない難解地名であるが、敢えて二説を挙げておきたい。

①ロクゼンの語感には音読みと思える。ロクゼンはロク（麓）・ゼン（前）で「（尾根から見て）山裾の手前の中腹部」をいうか。しかし、普通は麓の集落からの目線になるはずなので、やや無理な解釈か。

②ロクゼン←ロクセン←ロクサン と転訛したか。ア段→エ段 の母音交替は「あまり多くない」（国語学大辞典）というが、ありうると判断した。

「病因をロクサン（土公神）の崇りの所為にし、崇っている場所を明らかにす

るための占い。…土公神はカマドの神、方位の神ともされることから、修験者によって、この占いの方法が考案され広められたとも考えられる」(修験道辞典)という。以上からロクゼンとは「病因を突き止め治療する山伏がいたところ」を意味するか。

全国地図には、ロクゼン地名は記載されていない。

【若宮】

ワカミヤ。

和田遠山川右岸の押出集落の若宮神社の所にある。

八幡社系とか白山系とか祖先神とか、はては崇り強い神とか、若宮の斎祀る対象は様々で、この押出の若宮の祭神はわからないが、ワカミヤとは「若宮を祀る、お宮のある所」を意味する。

全国地図には、ワカミヤ地名は中・大字として85ヶ所が挙げられており、うち83ヶ所が「若宮」となっている。

【和田】

ワダ。

大字にもなっている地名。遠山川左岸の小池沢の扇状地にある。

ワダ(曲)は「地形の入り曲がっている所」をいう。このワダも「低地が山側に入り込んでいて扇状地になっている土地」を意味するのであろう。

国土地理院の2.5万分の1全国地図には、なんと252ヶ所に中・大字として挙げられており、うち250ヶ所が「和田」となっている。瑞祥地名である。

【ワタリゼ】

南和田の名古山にある。遠山川右岸にあり、支流のマダラ沢左岸になる。

ワタリゼ(渡瀬)とは「川などの歩いて渡ることのできる浅瀬」(国語大辞典)をいう。

従って、ワタリゼとは「徒渉で対岸に渡ることのできる場所のある土地」を意味する。

対岸には十原の城山があり、川幅も広がっているように、徒渉できたのであろうか。

全国地図には、なぜかワタリゼ地名もワタリセ地名も挙げられていない。

【ワトヲジ】

ワトウジ。

木澤の須澤にある。津山川左岸にあつて、須沢集落の対岸になる。

ワトウジとは何をいうのだろうか。語源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①ワトはワ(曲)・ト(処)で「曲がった地形」のことで、ウジはオチ(落)の濁音化した語で「急傾斜地」をいうか。すなわち、ワトウジとは「曲流する川辺にある急傾斜地」をいうのであろうか。

②ウジ←オジ←オシ(押)と転じたもので、「押し出された地形」をいう。従って、ワトウジとは「(対岸から)押し出されているようになっている土地」を意味するか。

全国地図には、ワトウジ地名も記載されていない。

【和見】

ワミ。

南和田の飯島、大町、名古屋山の遠山川の左右両岸の崖岸に多い。

ワミとは何か。

ワはワ（曲）で「川などの曲がりくねったあたり」をいい、ミは接続詞で「漠然とした場所」を示す（以上は語源辞典）。

以上から、ワミとは「遠山川が曲流している辺りの土地」を意味するのであろう。

全国地図には、ワミ地名は9ヶ所に中・大字として挙げられており、うち6ヶ所には「和見」の字が当てられている。

【ワルタニ】

南和田の名古山にある。遠山川左岸の奥の山地にある。

ワルタニとは何をいうか。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ワルは動詞ワル（割）に関連して「割れたような、裂けた状態」をいう。すなわち、ワルタニとは「谷川が流れている急傾斜地で、裂けたようになっている山地」を意味するか。

②ワルは形容詞ワルイ（悪）の語幹で「良くない」意から「嶮岨な地形」をいう。従って、ワルタニとは「嶮岨な谷のある傾斜地」を意味するか。

国土地理院の2.5万分之一全国地図には、ワルタニ地名は載っていない。

